王の剣士1

「夜行の列」

著：雅

目次

序章「夜行」……4
第一章「収穫祭」……8
第二章「人形師」……41
第四章「マレル旧運河」……79
終章……109

永遠の美しさをあげよう。
過ぎる時も、不条理も、君を損ないはしない。

君の美しさが変わらず、

君が

そこにあるように――

序章「夜行（やぎょう）」

一

夜の中に、鈴（りん）、と鈴の音（ね）が響いた。

寝静まった大通りに並ぶ建物の間を揺れる。

通りの左右の建物は全て三階まで層を重ね、紅樺色の瓦屋根と乳白色の壁で統一された街並みが、月明かりにぼんやりと浮かんでいる。

王都アル・ディ・シウムでも特に裕福な商人や国の高官達が暮らす区域――

その一角、二階の窓の一つに赤い羽根の房が映り込み、ふわりと揺れた。

窓の中から覗いているのではなく、窓の外、通りにある姿が暗い窓硝子に映っている。

見れば羽根は帽子に付いた房飾りだ。

こんな静まり返った夜の通りではなく、貴族達の華やかな祝宴の場か、それともきらびやかな舞台に相応しい。

帽子の下の顔は口元を残し、白い陶器で作られた鮮やかな色彩の仮面で被われている。

それがちょうど、窓の中を覗き込む高さにあった。

けれど、二階にある窓に？

そう――

それは背の高い、奇妙な姿をしていた。

二階の窓までおよそ一間半はある高さに顔があり、胴体が続き、ただ下半身が異様に長い。身体はゆらゆらと、不安定に揺れている。

膝が高い位置で曲がるのを見ればすぐにそれと判るが、おそらく身長と同じくらいはあろうかという、高足を履いているのだ。足は長い衣ですっぽりと覆われている。

鈴（りん）、と鈴の音（ね）が響く。帽子の房飾りに付けた鈴が揺れる。

身体を左右に振り、拍子をつけて鈴を鳴らす。

その音は一つではなく、二つ、三つと重なり始めた。

振り返れば後ろにも、前にも、同じ高足を履いた人影が揺れている。

灯りを落とした深夜の街の通りで、街燈にそこだけ鮮やかな色が照らされて過ぎる。

長く裾を引く原色の衣裳。

異形の列。

リン、リン、リン……

呼び交わすように――呼び掛けるように鈴が鳴る。

夜の静寂（しじま）を震わせて流れるそれは、だが不思議と住人達の眠りを覚ます様子は見えなかった。

鈴を楽の音のように振り撒き、夜の静まり返った通りを、一見不安定な高足に揺られながらゆっくりと歩く。

足音も立てず、時には身を縛る重さなど感じさせずに飛び跳ねて。

夜行（やぎょう）が進む。

行進していく。

ふと、一つの露台の前で行進が止まった。

仮面の下の瞳が何かを確認するように瞬き、それからゆらりと身体を揺らして露台の手摺に手を付くと、その奥の窓を覗き込んだ。

ぽう、と窓の奥でごくごく小さな光が宿る。

リン、と鈴が鳴る。

仮面の下の赤い唇が艶（あで）やかに笑う。

吊り上がる笑みに誘われたように、露台の奥の硝子戸が開いた。

部屋の中から、若い娘が寝間着のまま露台へと現れる。半開きの瞳

は、まだ緩い眠りの中にあるようだ。
仮面は彼女を見つめ、白い手袋と長い飾り爪をはめた手で優雅に手招いた。
少女の手から、ぽとりと何かが落ちる。
それは冷たく薄い水色に発光している水晶の欠片(かけら)のようで、石造りの露台の床に落ちて転がった。
ゆっくりと光が消える。
鈴(りん)――
微かな鈴の音を残し、夜行の列は夜の影の中に消えた。

第一章　「収穫祭」

一

日の出から一刻ほど過ぎ、未だ陰の色濃い王城西側の頂に近く。
軍将校の官舎の建ち並ぶ一角から、力強い羽ばたきと共に一頭の飛竜が飛び立った。
珍しい銀の鱗を持つ、まだ幼さを感じさせる若い飛竜だ。だが羽ばたき一つで一息に上空へと翔け上がる。
銀翼が斜めから差す朝日を切り取り、遠い場所に影を落とす。
空へと伸びる王城の尖塔の高さまで上がった銀色の飛竜は、一旦真っ直ぐ目的地のある西区域に向いかけ、そこで僅かに迷う素振りを見せた。
長い首を巡らせ、青い瞳を問いかけるように背中に向ける。
その背にいるのは、この若い飛竜に相応しい年頃の少年だ。まだ十五、六歳といったところ。
襟の詰まった黒いかっちりした服を着て、背中に同じく黒の長布を纏っている。王都の住民が見れば、それが近衛師団の軍服である事がすぐ判る。
正規軍は濃紺、近衛師団は黒。
少年の髪と眼の色は漆黒、ただ瞳の輝きがそれを補って明るい印象を与えている。整った面は、精悍さをほんの少し、備えはじめたところだ。
「まだちょっと早いし、一巡りして行こう、ハヤテ」
主の弾んだ声にハヤテと呼ばれた飛竜は嬉しそうに鳴き、ぐるりと縦に大きな弧を描いた。
飛竜の荒っぽい旋回にも、背中の少年は動じる気配もなく却って楽しげな笑みを浮かべる。
「半刻くらいは飛ぶ時間があるかな？　やっぱり早起きはするもんだよな」
実を言えばほんの少し前まで寝台で丸まっていたのだが、二度寝と飛竜での遠駈けを天秤にかけ、後者を選んで跳び起きた。
飛竜は特別だ。
特にこの若い銀翼は僅か五ヶ月前に王から下賜されたばかりで、彼と共に遠駆けをするのが楽しくて仕方がなかった。
少年――レオアリスは、朝日が伸びていく方向へ、手綱を繰った。
銀翼は飛竜族の中でも特に速い翼を持つ。
そして、軍の大将級に与えられる乗騎でもあった。
ハヤテは広げたしなやかな翼に風を孕み、王都の上空を翔け出した。

飛竜の翼を追うように、昇り始めた太陽は朝の光を空と王都へと投げる。
グノーシス大陸の西端に位置する王国アレウス国の王都は、王城を頂に抱く小高い山のような姿をしている。
城下の街は緩やかな傾斜を描いて裾野を広げ、東西南北、どの方角から見ても均一な傾斜と広がりを持っていた。
均整の取れた美しい街並が王城を取り囲んで複層的に広がる姿は、花弁を広げた艶やかな花を思わせ、その名――『美しき花弁』というその名は、国土を越え、近隣諸国にも知られていた。

二

「遅刻遅刻うぅ！」
クライフは黒い軍服の上着を右肩に掛け、王都下層ヴァン・ルー地区の大通りを王城へと足早に歩いていた。半ば駆け足に近い。
通りの店で買った焼きたての麺麭（パン）をひとかたまり口にくわえたままだ。乾酪（チーズ）と干し肉を炙って乗っけてもらうくらいの時間はあったかもしれないと残念に思う。
二十代半ば、茶色の明るい瞳と少し褐色がかった肌の、髪を短く刈り上げた陽気そうな青年だ。
朝食もそこそこに速足なのは、勤務時間に遅れそうになっているせいだ。ここ下層から軍部のある王城の第一層までは、徒歩では二刻強、『門（ガルド）』を使っても半刻を要する。
王都内の大通りに一定区画で設けられ、転位の法術を施された設備を『門（ガルド）』と言い、門と門の間を一瞬で移動する事ができた。
王都は十万人近い人口を有する国内最大の都市であり、そのほとんどが坂道で構成されている。この『門（ガルド）』と共にもう一つ、東西南北のそれぞれの区画を縦に流れる運河とそれに交わる環状運河があり、移動の利便性や流通の向上に大きな役割を果たしていた。
クライフは通りを歩く人の間を縫うように歩く。
「この時期は人が多いなぁ、まだ朝早ぇのに」
目指す場所へ先を急ぐ人々と、通りの店や露店を目当てに行き来する人々、店の主達や商品を納めに来た荷運び屋――王都は常に様々な人々でごった返している。
それが秋も半ばのこの季節は、いつもよりぐっと人通りが増えた。
収穫をあらかた済ませ、王都では今年の豊穣を祝う祭りが行われているからだ。
十日間程度、各地で収穫したての作物や土地土地の工芸品、様々な屋台や旅芸人達、それを目当てに近郊の街から訪れる人々で賑わう。
秋の収穫祭は、春の祝祭に次ぐ大きな祭りだった。
「治安維持も楽じゃねぇや」
正規軍が、と付け加え、気を付けなければ肩がぶつかりそうなほど混んだ通りを足早に抜けながら、クライフはちらりと前方の屋根の上に覗く時計台を確認し、朝食の最後の欠片を飲み込んだ。
本当に本当の、遅刻ギリギリだ。
「麦酒欲しいな」
全力で走ってなんとか――遅れたら彼の上官、副将グランスレイの容赦ない雷、いや、叱責が待っている。
「走るか……」
クライフが駆け出そうとしたその時、前方で鋭い叫び声が上がった。
「ちょっと――返しな！」
女の声だ。
「私の鞄だよ！」
さすがにこの声は、朝のごった返した通りに別種の騒めきをもたらす事ができた。
少し前の人だかりが動き、クライフの視界にも逃げ去るように駆けて行く、茶色の帽子を被った男の頭が見える。
「朝っぱらからかよ」
クライフは溜息を吐き、溜息を終える前に駆け出した。見たところひったくりの類だが、この区域では実はあまり珍しくない。
「遅刻の言い訳――じゃねぇ、仕事だな！」
気楽そうな顔を引き締め、人混みを縫うように走る。
けれど目的の男との間には十人ばかり通行人がいて、思うように距離を詰められない。
「近衛師団だ！　道空けてくれ！」

クライフの大声にぎょっとして、数人がさっと道を空ける。
だが状況を把握できていない通行人達が立ち止まってしまい、クライフは彼らにぶつからないようたたらを踏まなければならなかった。
「何だ何だ？」
「その男が鞄をひったくって逃げてんだ！　悪ィが通してくれ！」
「え、鞄？」
声をかけながら走っても、逆に自分の荷物を慌てて確認する者達に阻まれ、なかなか埒が明かない。一方男は遠慮の欠片もなく通行人を突き飛ばしぶつかりながら、尚も駆けていく。
誰か機転を利かせて足でも引っ掛けてくれ、と思った時、さっと辺りが陰った。
同時に黒い人影が空から降り立つ。
どこから飛び降りたのか――少年だ。
見知った姿に、クライフは足を止めた。
「じょう――」
ちょうど目指す男の目の前、と思った瞬間、少年の蹴り上げた踵が、きれいに男の顎を捉えた。
男の身体がふわりと浮いて、通行人が避けた後の通りに倒れる。わあっと驚きと歓声が上がった。
クライフは駆け寄って男を押さえ付け、手に持っていた荷物を取り戻した。
凛とした明るい声がクライフにかけられる。
「クライフ、遅刻ぎりぎりだろ？　乗せてやろうか」
「上将、お早うございます」
男を蹴り倒した少年、レオアリスへと、クライフは左腕を胸に当てる近衛師団式の敬礼を向けた。
それからにやりと笑う。
「いやぁ、マジ助かります！　散歩帰りですか？」
クライフは、レオアリスが乗せてやろうかと聞いた、その乗り物を見上げた。

陽射しを遮ったのは、レオアリスの乗騎である銀翼の飛竜だ。三階建ての屋根の上に浮いている。
十六の少年は歳上のクライフに対して、可笑しそうな、歳の割に少し大人びた笑みを返した。
「そう。それで、お前がこの辺走ってるんじゃないかと思ってさ。夕べ飲みに行くって言ってただろ」
「ははは。素晴らしい洞察力っす」
というより、日々の観察力かもしれない。クライフは照れくさそうに頭を掻いた。
彼等の周りに立ち止まった通行人達が、隣同士で興味深そうな視線を交わしている。
「何があったんだ？」
「ひったくりらしい。あの服、近衛師団だろ、あの二人。運が悪かったなぁ」
「近衛師団？　何で師団がこんなとこに。誰か通報したのか？　早いな」
似たような会話があちこちで聞こえる。
「違うよ、ほら、クライフ中将がこの辺だから」
「ああ、第一大隊の――え、ってことは」
驚きを含んだ視線が上空にいる銀翼の飛竜と、クライフの横のレオアリスを見比べた。
「銀翼だ」
銀翼の飛竜――軍の大将級の乗騎だ。
そして近衛師団第一大隊の大将と言えば、王都ではよくその名前を知られていた。その理由は一つではなく、見る位置によっても異なった。
「思った以上に若いんだなぁ」
今はやや感心したような響きだ。
近衛師団の士官服は細身の身体にしっくり馴染んで、纏う空気も街を行く同世代の少年達とは大分違う。
しかし本当に、若い。

そして次の言葉には、慎重な響きがあった。
「剣士か……」
一歩引くような。
「剣は？」
「出してないみたいだ。けど――腹の中にあるんだっけ？」
「何だ、剣で捕まえたんじゃないのか、見たかったな」
「まさか、こんな街中で。あんた剣士を知らないのか？」
初めは囁きだった会話もすっかり遠慮無い賑やかなものに変わり、レオアリス達にも届いた。
クライフはレオアリスの顔を見た。自分に向けられた好奇心たっぷりの視線と会話に、少し決まり悪そうだ。
どちらの気持ちも判るとクライフも苦笑して、取り戻した荷物を掲げてみせた。
「ほらよ、荷物。どいつのだ？」
ざわざわと通行人達が顔を見合わせる。
クライフはぐるりと見回したが、輪の中から持ち主が歩み出てくる様子は見られなかった。
「何だぁ？　持ち主いねぇのかよ。大事な荷物なんじゃねぇのか？」
あんな悲鳴を上げたくせに、おかしな話だ。
「どうします、上将」
レオアリスは少し瞳を細め、その荷物を見た。煤けたような茶色の布地の、どこにでもある肩に掛ける形の鞄。
「――そうだな。仕方ない、一旦師団で預かるか」
「ですね」
頷いてクライフはもう一度声を張り上げた。
「今取りに来なきゃ、荷物は近衛師団第一大隊で預かるぜ！　捜してる奴がいたらそう言っておいてくれ！」
最後の言葉は通行人と、特に通りに店を構えている商人達に向けたものだ。幸い建物に軒を連ねる店の他、路上にも露店がずらりと並んでいる。

まだ誰も名乗り出てくる者が無いのを確認し、クライフは気を失っている男を肩に担ぎ上げた。
「こいつも一緒に連行ですね。二、三日放り込んどきましょう」
「ああ。――ハヤテ！」
レオアリスの呼び掛けに、上空で待機していた銀翼の飛竜がすうっと降りてくる。集まっていた通行人達が慌てて場所を空けた。
レオアリスは彼等に顔を向け、軽く頭を下げた。
「お騒がせした――失礼する」
凛とした声が再び、秋の朝の颯爽とした空気を覚えさせる。
飛竜は三人を背に載せて、さすがに少し重そうに浮揚すると、騎首を王城へと向けて飛び去った。

束の間の静寂の後、すぐに普段の騒めきが戻り、大通りは活発に流れ出した。
ただ、今日のいい話の種を手に入れたのは確かだ。
五ヶ月前、この春に最年少で近衛師団第一大隊大将になった、その本人を見た、と言えば、例えば客との会話も弾むに違いない。
それだけレオアリスは良く人の口に上り、興味を引く存在だった。
二年前、僅か十四の年に王の御前試合で優勝したレオアリスを、王は近衛師団に配属した。
元々御前試合の出場者は出世が約束され、いい成績を残せば軍であれば士官級から、法術士であれば個人の研究室と五年分の研究費を与えられる。
物語のような立身出世はいつの世も好まれるが、特にレオアリスは貴族や富裕層ではなく北方の辺境にある小村の出身で、そうした話はより一般大衆に好まれた。
ただ、入隊後二年での大将就任は、正規軍とは異なりその任命が王の意思に基づく近衛師団とは言え異例であり――
そして異例の出世には相応の理由があった。

それこそがこの若さで大将位に就く事を、周囲に――内心はともかく――納得させる理由でもあった。
レオアリスは、『剣士』だ。
ある特殊な、稀な種族。
身の内に剣を宿す。
多くはその剣を腕に宿し、あたかも肘から先の骨が外へ現れるかのように、剣を顕わした。
人々が剣士と口にする時、それは賛辞や好奇心、物珍しさだけではなく、やや複雑な響きをその中に含んでもいた。

飛竜が飛び去った空を、狭く入り組んだ路地の影から、沈んだ視線が見上げた。
あの袋の中に入っていたものは――
「近衛師団……しかも剣士だなんて、間の悪いこと」
悔しそうに呟いて、女は込み入った路地の奥へと足早に消えた。

三

風を切って飛ぶ飛竜の背の上で、クライフはまだ伸びている男の身体を落ちないように押さえ直しつつ、前にいるレオアリスに声をかけた。
少し声を張り上げないと、飛んでいる飛竜の上は会話がしづらい。
「上将！」
「何だ？」
レオアリスは首を僅かに向けた。
風が後ろに抜けていくお陰で、レオアリスの方は声を張り上げなくてもクライフに届く。
「最近朝の散歩が気に入ってるみたいですね！」
「そうかな――いや、そうかも」
レオアリスはほんの少し照れくさそうな様子を見せた。
遅刻の危機を救ってもらったクライフとしては大いに歓迎するところだが、レオアリスが遠駆けに出る理由がただ飛竜好きというだけでもないことを、クライフは理解していた。
飛竜の背の上で、聞いている者は他にいない事だしと、クライフはズバリ核心を口にした。
「大将ってのはやっぱ肩こりますか？」
投げ掛けられた言葉に、レオアリスは少なからず意表を突かれてクライフを振り返った。
「ああ、うん。……どうだろう」
やや気恥ずかしそうに言葉を濁す。
大将という今の彼の立場は決して簡単なものではない。
剣士ということに加え、若過ぎるという批判もまた、常に付いて回った。
「でも責任はやっぱ重いし。だからって息抜きばっかしてるのも、いいって訳じゃないけど」
「いやぁ、いいんじゃないっすか。銀翼で飛ぶのなんて最高に気分いいですよ。ハヤテもまだ若いから、飛びたくてしょうがないでしょ」

クライフは笑って頷いた。
レオアリス自身は気にしているようだが、クライフを始め常に身近に接している第一大隊の隊士達は、この数年を一緒に過ごしてきたこともあり、自分達の大将が若過ぎる事は今さら気にしてはいない。
むしろ最年少で御前試合を制した事や、更に言えば滅多にいない剣士が上官というのは隊の誇りであり、秘かに自慢に思ってもいた。
ただ、王城という場所がそれだけで語れる世界では無い事は、クライフも、ましてやレオアリス自身も良く、判っている。
だから批判を耳にしても、レオアリスは怒るという事はしない。
少なからず、ちょっとのんびりした性格故もあるが。
それから彼のもう一つの目的――願いと。
「年齢のことは言っても仕方ないし、黙っててもも上がるからいいんだけどさ。けど、さっきみたいに改めてまじまじ見られると、俺はほんとに相応しいのかって思ったりはする」
あからさまな好奇の目――期待と、値踏み。
その剣が、地位に相応しいのか。
「第一大隊に恥かかせちゃ悪いし、それに大将に推してくれたグランスレイに申し訳ない」
近衛師団第一大隊副将、グランスレイは前大将の退任に伴い、レオアリスを大将にと強く推挙した。とはいえレオアリスはグランスレイの方が大将に相応しいと思っている。
クライフはニヤリとした。
「俺達はなんも問題ありませんよ。副将だっていつも俺が苦労かけてるんで、上将程度じゃびくともしませんて。そもそもあの体格に当たってったら俺だってひっくり返りますからねぇ」
クライフは当のグランスレイが聞いたら血管を浮き上がらせそうな事をさらりと言って明るく笑い、クライフらしい言い方にレオアリスも可笑しそうに笑った。

下層から王城へ続く西大通りを真っ直ぐに飛ぶと、城下の街と王城を区切る堀があり、橋が渡された先に西外門がある。
その手前、上層地区を抜けようとしていた時、地上にふと視線を引くものがあった。
「何だ？」
レオアリスは視線を巡らせ、何が彼の注意を引いたのか見て取った。
街の中に、ごく小さいが光を弾いているものがある。その光が眼に飛び込んだのだ。
ハヤテの手綱を引いてその場に浮遊させ、レオアリスは光を弾くものの正体を確かめようと瞳を細めた。
「どうかしましたか？」
「いや――」
きら、きら、と不規則に光を弾いているが、この高さだとそれが何かまでははっきりとは判らない。
足元は上層でも一際立派な屋敷が立ち並ぶ区域で、その内の一つの屋敷の窓の辺りだろうか。
窓硝子が光っているのかと思ったが、どちらかというと張り出した露台の上のようだった。
それよりも、その屋敷の前に人だかりができている事に、レオアリスは眉をひそめた。ここは普段なら閑静な通りだ。
「あれは――」
「西方第一大隊ですね、ありゃ」
クライフが後を引き継ぐ。
そこにいるのは、正規軍の兵士達だった。住民達が興味深げに覗き込もうとしているのを阻むように、屋敷の前に十数名の正規兵が立っている。
彼等の立ち位置などを見て取り、レオアリスは眉を潜めた。

「事件の現場調査って感じだな。何かあったか？」
「降りて聞きますか？」
クライフはちょっと興味をそそられたように尋ねたが、レオアリスは束の間考え――、首を振った。
「いや――止めよう。王城の外じゃ管轄外だ。必要があれば連絡が来るだろう」
近衛師団の職務は王と王城の守護であり、王城の外に関しては正規軍第一大隊の管轄になる。
基本的に、互いの管轄には要請が無い限り手を出さないのが不文律だった。
ただそう言いつつも、意識をつつくような無視しがたい感覚を、レオアリスは感じていた。
「法術……」
レオアリスは微かに呟いた。
あの館から微かに漂っているのは、法術の残り香だ。
既に消えかかっている。いつ頃に施されたものだろうか。
消えかけているという事は、夜の間か。
あの場に出ている正規軍の中に法術士はいるだろうかと、それが気にかかった。
「上将？　気になってるなら」
クライフの問いかけに逆に意識を引き戻されて、レオアリスは落としていた視線を上げた。
「いや、筋は通した方がいいだろう。後でワッツか、アスタロトに聞こう」
そう言うと、レオアリスはハヤテの手綱を繰った。

王が所有する兵団は二つある。
一つが王の守護兵団である、近衛師団だ。
一小隊が五十名、中隊は十小隊五百名で構成され、左中右三つの中隊が一大隊を構成する。レオアリスは大将として、第一大隊千五百名の指揮を執る。
その第一大隊から第三大隊、総数四千五百名を統括するのが、総将アヴァロン。
一方で国内の治安維持を主任務とする正規軍は、一大隊が三千名と、単純には近衛師団の倍の組織構成になっている。
正規軍将軍、『炎帝公』アスタロトを筆頭に、東方軍、西方軍、南方軍、北方軍の四つの部隊に分かれる。
その中で王都守護兵団である第一大隊から、辺境部の治安維持を担う第七大隊までが存在し、総兵数は八万四千名に上（のぼ）った。
ただ、一国を担う兵数として、八万という数字は決して多くはない。
むしろ少ないと言えるその数にも、この国なりの理由があった。
アレウス王国が、地理的に閉じられているからだ。
東の国境沿いには峻険ミストラ山脈、西に古（いにしえ）の海バルバドス、南に灼熱の砂漠アルケサス、北に黒森ヴィジャが広がり、行く者の足を阻む。
特に東のミストラ山脈から先は現在も領土争いが続く小国が多いが、王国の四方を取り巻く生者を寄せ付けぬ酷地は、逆に外敵の侵入を阻む絶好の塁壁でもあり、アウレウス国を戦乱から遠ざけてくれていた。
大きな戦乱は一番最近と言っても、およそ四百年前、アウレウス国と西の国境を接する『西海』バルバドスとの百年戦争まで遡る。
現在『大戦』と呼ばれているその戦乱は、双方共に多数の死者を出しながら、三百年前に両国の間に不可侵条約が結ばれる事で漸く決着を見、以来国内は安寧を保っていた。

近衛師団第一大隊の士官棟は、王城西地区のちょうど大通り沿い、緑に囲まれた敷地内にある。大将、中将の執務室に参謀部、資料保管庫等が入った二階建の重厚な構えの建物だ。
隣接する厩舎にハヤテを降ろし、ついでに捕えた男を迎えに出た隊士に預けて、レオアリスとクライフは士官棟の入口の階段を昇った。
玄関前に設けられたこの五段の階段を昇ると、青銅のがっしりした扉がある。扉の上には近衛師団の紋章が掲げられ、第一大隊を示す『一』という数字が刻まれていた。
扉を潜ると、まず二階まで吹き抜けている丸い天井の、六角形の玄関広間に出る。
といっても大して広くはないが、六角形の左右の二辺に棟内に入る飾り硝子を張った木製の扉が二枚。正面は扉の無い出口が設けられていて、その先は回廊のある中庭になっていた。
レオアリスは左側の硝子戸を押し開けた。
廊下は左側に広い窓が並んでいる為、玄関広間よりもずっと明るい。
内装は漆喰で塗られた白い壁と、壁に腰の高さまで張られた板、梁、柱が艶のある落ち着いた深い濃茶。板張りの床は綺麗に研かれて、朝の光をやんわりと照り返していた。
扉のすぐ右手に訪問者用の窓口があり、警備も兼ねた隊士が二人、設けられた硝子窓の向こうに見えた。
レオアリスとクライフの姿を見つけ、さっと敬礼を向ける。
「おはようございます！」
「おはよう。夜勤お疲れ」
彼等は夜勤の隊士で、あと半刻ほど、朝の八刻で勤務は終わりだ。クライフは硝子窓を開けて、窓の下の張り出しの卓に手にしていた鞄を置いた。
「交代前で悪ィけど、この荷物、ここで預かっておいてくれ。下層のヴァン・ルー地区で盗まれかけたやつだ。犯人を捕まえたはいいけど肝心の持ち主が出て来なくてな。それから中に入っているものを確認して、報告上げてくれ。一応あの辺りにゃここで預かるって事は言ってきたから、持ち主が来たら返していいぜ」
「承知しました」
きびきびとした動作で荷物を受け取り、隊士は再び敬礼した。二人はこの部屋のすぐ先にある階段に足を向ける。
階段を昇って二階が将校の執務室になっている。棟自体は中庭をぐるりと囲む長方形をしていて、棟内の部屋は全て中庭に面していた。
「いや、おかげで間に合いました！　またぜひお願いします！」
階段を昇ってすぐ、北翼の一室の前でクライフは左腕を胸に当てて敬礼し、自分の執務室の扉を開けた。中軍中将の執務室だ。
南翼が大将執務室、東、北、西には左、中、右軍の中将、少将の執務室がそれぞれ分かれて置かれている。
「次は走ってるのに追い付けないかもしれないけど」
レオアリスも笑って返し、クライフと別れて、対角の南翼にある自分の執務室へ向かった。

南翼の中央に大将執務室があり、左右には副将の執務室、参謀部が大将執務室を挟んで並んでいる。
扉を開けると、当然誰もいない。棟内で最も広いこの部屋は、レオアリス一人の為の執務室だ。
広い室内は中央に応接用の卓と長椅子、中庭に面した広い窓の前に黒檀の執務机が置かれている。
「……いつ見ても、でかいし……」
ぼそりと呟く。
執務机が、だ。
無駄に――レオアリスにしてみれば無駄に幅が広く、威風堂々たる造りをしている。

机に座っているというより机に座らされている感じがして、それが自分を取り囲むもろもろの事情も加わって、少し情けなさを覚えさせられた。
「俺よりグランスレイが座った方が似合うんだよな」
「幅がでしょう」
付け加えるような声に振り返ると、当のグランスレイが扉の脇に立ち、レオアリスに敬礼を向けた。
身の丈は六尺五寸、体格も立派な、正に武人といった威丈夫だ。短い銀髪に緑の瞳は静かな知性を感じさせる。歳の頃は四十代半ば、レオアリスとは親子ほどの違いがあった。
彼が近衛師団第一大隊副将であり、レオアリスの補佐を務めてくれている。
がらんとしていた室内が少し狭くなった気がして、グランスレイの先ほどの言葉を思い返しレオアリスは笑みを堪えた。
「おはよう、グランスレイ。幅の事を言ってるんじゃなくてさ……それもあるけど。ものにはそれぞれ似合いってものがあるだろ。この机、変えないか？」
グランスレイは少し呆れた様子で口元を曲げた。
「おはようございます。その執務机は歴代の大将がお使いになってきたものですぞ。大将としての自覚の為にも必要です」
「自覚か……。まあ俺も体格はあと三年後くらいには、グランスレイみたいになってるかもしれないけどな！」
「はっはは！　……」
レオアリスの言葉に渋い音色を響かせて笑った後、グランスレイは失敗したと言わんばかりにさっと押し黙った。レオアリスの恨めしそうな瞳が上がる。
「失礼しました。ただ貴方は風格を持たれる事を努力される方が確実で早いでしょうな」
誠実さと実直さがグランスレイの美徳でもある。が、この場合余り有難くはない。

「――」
今のところ身長は五尺と六寸、低い訳でもないが、あと一尺、二の腕の長さ分ぐらい伸びる事を期待している年頃の少年の心中を余所に、グランスレイは可能性の無い話題を切り替えた。その心境は親心に近い。
「それはそうと、クライフと下層で捕物をされたとお聞きしました」
レオアリスは主張をひとまず押しやり、執務机に――机の角辺りに軽く腰を降ろした。
「情報が早いな。捕物ってほど大したものでもないんだ。クライフを拾おうとしたついで――いや。今日の予定は？」
遅刻しかけていた事がばれてもいけない、語尾を誤魔化しつつ、グランスレイの手元の書類を指差してみせる。
「左中右の各中隊ごとに演習ですが、上将は十刻から一刻ほど右軍の視察を。午後は三刻から総司令部で会議です。それ以外は文書の決裁をして頂きます」
「判った」
レオアリスは机の上に積まれた書類の束を複雑な視線で眺めながらも、神妙に頷いた。
このやり取りもすっかり板に付いてきたのだが、つい五ヶ月前まではレオアリスは中将としてグランスレイの同僚の立場にあり――更に言えば、二年前の入隊当初からずっと、グランスレイの部下にいた。
大将になってからは副将としてレオアリスの補佐役となってくれているが、厳しい導き手である事には変わりが無い。
何度となく「大将として相応しい言動を」と嗜められ、特に言葉遣いはかなり苦労したものの、努力と周りの度重なる指摘もあって、ようやく慣れてきた。
ただ、前大将が退任し新たな大将の選任の折、レオアリスを大将に誰よりも強く推したのはグランスレイだった。
正直レオアリスは今でも向いていないと思う事が多いが、グランスレイに根拠があるなら頑張ってみるか、と、そんな気持ちもあった。
何より、大将として、王により近く仕える事ができる――

それはレオアリスの中に、一番強く根ざす想いだ。
理由など判らない。
けれど幼い頃から漠然と憧れ、その憧れに急かされるように生まれ育った北の辺境を飛び出し、王都まで来た。
御前試合を経て近衛師団に配属された時の喜びは、今でも変わらない。
それは身の内にある剣が覚える喜びでもあった。
打ち震えるような慶びと――、思慕。
レオアリスにとって、王はここにいる理由そのものだった。
「急ぎのヤツは？　それから見よう」
レオアリスは身体を捻り、積み上げられた書類を引き寄せた。
「どれも今日中で構いませんが――参謀部から、明日の合同演習の布陣案が提出されています。これは午前中にご確認を」
「へぇ、どれだ？」
布陣案と聞いてぱっと瞳の色を変え、積み重なった書類から目的のものを捜し当てると、レオアリスは執務机に斜めに腰掛けたまま早速それを開いた。
合同演習は三日に一回の間隔で行われているもので、左中右三つの中隊が揃い戦術を競う。勝敗は相手陣営の中将が持つ旗を奪って決する。
最近では参謀部が考案する布陣に複雑なものが多く、旗を手にするまで勝敗が見えない。
複雑で面倒くさい、とクライフなどはぶつぶつ言うが、レオアリスは中将時代に自分がやってみたかった。
考案しているのは主に、最近参謀部に入った人物だ。
ざっと目を通しながら、自分ならどう動かしどう防ぐかと想定を始める。レオアリスが熱中し過ぎる前に、グランスレイはそれとなく遮った。
「後ほどヴェルナー参謀中将から説明させましょう」
「詳しく聞きたいし、そうだな。じゃあ取り敢えず面倒な書類から終わらせるか……」
そう言って布陣書を閉じ、ふとレオアリスは顔を上げた。
「そう言えば、上層の西外門近くで正規軍が出てたが、グランスレイ、何か聞いてるか？」
グランスレイが太い眉を上げる。
「正規ですか。小隊が？」
「規模は小さかったけど――通りの側しか見えなかったが良くて半個小隊か、せいぜい二班くらいか」
とは言っても二班は少ない人数ではない。
正規軍の一小隊は百名、一班十名で構成される。街中に二班二十名も出れば、それなりの大事（おおごと）だという事になる。
「聞いてはおりませんが……二班以上が出ていたとなると確かに気になります。確認しますか」
「そうだな、状況だけ。まあ正規の管轄だから俺達がどうって話にはならないんだが――」
レオアリスは一旦、考え込むように言葉を切った。
「法術の気配を感じた」
「法術の？　現場にですか」
「上空からだから確かじゃないが」
曖昧な言い方ではあったが、そう言ってもグランスレイは疑うような様子は見せなかった。
レオアリスは元々、法術を生活の糧とする村で育っている。御前試合には当初、法術士として出ようと思っていたほどだ。
自分が剣士だと知り、……ついでに王都の法術士の能力を垣間見て、止めた。だが、今でも法術は彼の手に馴染んでいる。
そのレオアリスが、街中の、しかも正規軍が出張っていた場所で法術の気配を感じ取っているのであれば、ただ管轄外と捨てて置ける話でもない。
「成る程……。出ていたのは西方軍のいずれかでしょう。ワッツ辺りに聞いてみれば話が早い」

互いの領分に口出しをしない、が不文律のせいか、それとも両者の関係が不文律を作り上げたのか、近衛師団と正規軍との間には少なからず反目もある。
下手に横槍を出せば、いらぬ反感を買うのが落ちだ。
ワッツというのは正規軍西方第一大隊の左軍中将で、日頃から仕事以外でも交流がある相手だった。レオアリスとも付き合いが長い。
それとなく確認し、或いは忠告をするにしても、そういう相手が適当だろう。
「ではそれに関しては後ほど、情報が入ればご報告します。私は隣室に下がりますが、何かあればお呼びください」
「ありがとう」
レオアリスは机から降り、今度はきちんと椅子に座ると、他の書類を取り上げた。
演習場の使用許可申請や隊士の勤務状況に関わる事務的な決裁、総司令部、内政官房に上げる報告書、王への報告書など、日々様々な書類がレオアリスの元に集まってくる。
軍とは言え、そうした基本的な事務作業を疎かにできるものではなかった。
ただ、今現在、大隊には事務官がほとんどいない。この王都でさえ文字を書ける者の割合は六割程度、更に学問を修め文書を扱える人材ともなれば貴重で、内政官房や財務院、地政院などに優先的に配属されるからだ。
軍では一定の剣技も要求される。そんな文武に優れた人材ばかりがいる訳もなく、必然的に参謀部が事務の役割を担う事になり、大体どこの隊も事務処理には苦労が多い。
ただやはり最近、第一大隊はこの点に関して、他の隊に大きく水を空けた所だった。
非常に読みやすく整理され要点の纏められた書類は、優秀な文官が集う内政官房でも評価が高い。
レオアリスが真剣な面差しで書類を読み始めたのを確認し、グランス

レイは一礼して執務室を出た。

四

午前中に予定どおり演習の視察を終え、再び執務室に戻って落ち着いた頃合いだった。
昼まであと一刻弱、三、四件は決裁を終わらせようと、レオアリスは真面目に書類と向き合っていた。
広い執務室は静まり返って、自分の指先が書類を捲る音だけが時折流れている。
北向きの窓からは直射を免れた薄い陽の光が差し込み、ほんの少しの室内の陰りが却って心地良く、穏やかな雰囲気を作り上げていた。
他者が立てる物音もないまま、頬杖をついて書面に綴られた文字をずっと追い――
がくん、と頭が落ちて、レオアリスは慌てて頭を振った。
（やべぇ……眠い）
一度背筋を伸ばして眠気を追いやり、再び書類を読もうとした時、ふと窓が風に揺れて木の枠を鳴らした。
手許の書類から瞳を上げる。
視線を感じたからだが、扉は開いていないし、室内には誰もいない。
「――」
気配は、背後の窓からだ。
すっと立ち上がり、くるりと後ろを振り返る。
レオアリスとちょうど向かい合うように――
窓の外から顔が覗いていた。
にこりと笑って、ひらひらと手を振っている。
レオアリスの面に過ったのは、驚きではなく、呆れた色だ。
「……二階の窓だぞ、ここは」
そこに居たのは、とびきり綺麗な少女だった。
高い位置で一つに結い腰の辺りまで伸ばした髪はレオアリスと同じ漆黒だが、艶やかでしっとりした光がある。
陶器のように白く透ける肌、丸みのある額、整えられた目鼻立ちは職人が精魂を込めて作り上げた芸術品のようだ。
何より印象的なのは、長い睫毛に縁取られた大きな瞳の、揺れる炎のような深紅。
彼女を目にして見惚れない者などいないのではないかとさえ思える。
その少女は今、窓の外で、身体をふわふわと上下に揺らしていた。
どうやら何かに乗って揺られているようで、時折窓の角の辺りに、青い色が覗く。
「何やってるんだか。ちゃんと表から入って来いよ、アスタロト」
呆れた、ただ親しげな口調でそう言いながらレオアリスは窓辺に寄り、細い格子の張られた硝子窓を押し開けた。
途端に風が短い髪を煽る。
「良く気付いたな、声かけようと思ったのに」
鈴を振るような愛らしい声で言い、少女――アスタロトは長い髪を掻き上げた。
「お前は気配が派手だからすぐ判る。アーシア、疲れないか？」
レオアリスは窓枠に手を置いて下を覗き込み、そこにいた飛竜に声を掛けた。
アスタロトは碧玉を連ねて磨き上げたような青い鱗の飛竜に乗っていて、そのはばたきに合わせて上下に揺れていたのだ。
中庭はそこそこ広いとは言え、建物ぎりぎりに空中停止するのは骨が折れるだろう。
問いかけられた飛竜は、鱗の色より明るく澄んだ青い瞳を閃かせた。
大丈夫、と答えたように見える。
ただアスタロトは言われてやはり気になったのか、ひょい、と窓枠に移ってそこに腰をかけると、飛竜の首を撫でた。
「いいよ、アーシア。ごめんね」
飛竜は頷いて、アスタロトを窓に残し、羽音とともに棟の屋根の向こうに消えた。
アスタロトがそのまま窓の縁を越えて室内に降り立つのを、レオアリスは呆れた様子で腕を組んだまま眺めている。

アスタロトは室内に入り、改めてにこりと笑って手を上げた。
「おはよう！　いい朝だな！」
「そろそろ昼だよ。そんな事より、正規軍将軍ともあろう者が毎回毎回案内もなしに窓から入ってくるか？　いい加減不法侵入で捕まえるぞ」
「いいじゃん、どうせここに来るんだから同じ事だ」
さっぱりと言い切り、アスタロトは陶器のような白い頬に笑みを乗せて首を傾げた。
並ぶと身長は五尺七寸ほどあるレオアリスよりやや低く、全体的にすらりと細い。
そう、すらりと細い。色々。
それはともかく真っ直ぐな黒髪がさらりと流れる様は可憐だが、言動はあまり可憐では無いようだ。
「正面から尋ねたら、お前んとこの部下も気を使うだろ？」
「使わせてもらった方が有難いんだけど」
「まぁまぁ、いちいち細かい事を気にすんなよ！　胃に穴が開くぞ！」
アスタロトはかなり男前に、レオアリスの背中を叩いた。
ここら辺でおそらく、彼女に見惚れていた者は瞬きを繰り返す。
「あれ、幻聴が聞こえたかな？」と――
それはともかく、レオアリスが呼んだとおり、アスタロトは正規軍将軍、その人だ。
四大公爵家の一角であるアスタロト公爵家の若き当主。当年十六歳。
国内は王家を最高位として、四大公と呼ばれる四つの公爵家、十の侯爵家、及び九十九家の諸侯がそれぞれの領地を治めていた。
また、国の政務を司る機関として、内政を司る内政官房、治水、土地、生活を司る地政院、財務、商工業を司る財務院、そして治安、軍務を司る軍部――正規軍に大別される。
王の意思のもと、それぞれ内政官房を北方公ベール、地政院を東方公ベルゼビア、財務院を西方公ルシファー、正規軍を南方公アスタロトの四人の公爵が長として所管していた。
アスタロトが公爵家を継承し正規軍将軍に就いたのは二年前、十四の年の春の事で、若過ぎると言われるならばレオアリスよりこのアスタロトの方がそれに当る。
ただ、公爵家当主に向かってそれを言える者は少ないだろうし、何よりアスタロトにはアスタロト公爵家と正規軍将軍を継ぐべき――継がざるを得ない、明確な理由があった。
アスタロト公爵家の直系のみに受け継がれる能力であり、正規軍将軍を歴代に亘って担う能力だ。
アスタロトは炎を従える。
それは法術ではなく、生来持つ、この世界でも稀な能力だった。
全てを焼き尽くすほどの炎――故に『アスタロト』は『炎帝公』と呼ばれる。
目の前のアスタロトもまた姿こそ可憐な少女だが、歴代の炎帝公達に勝るとも劣らない炎を有していた。
炎の能力が為せる故か、その性質は踊る炎の如く奔放で型破りだ。
レオアリスとアスタロトが出逢ったのは王都ではなく二年前、まだ十四になるかならないかの頃――レオアリスが近衛師団に入るよりも前の事で、それ故に本来の立場とは全く異なる部分で、友人同士だった。
何より近い年齢の者が少ない軍という組織の中では、同じ年齢という事だけでも、特別な意味を持っているのだ。
アスタロトはレオアリスの執務机の上の書類をひょいと覗き込み、すぐに不味いものでも口にしたように眉をしかめて顔を背けた。
勝手知った部屋の中央の長椅子に歩み寄り、ぽん、と腰かける。
「相変わらず真面目に仕事してるねー」
書類――いや、仕事嫌いのアスタロトらしい口振りだ。
「任務時間中だからな」
つい先ほどまでは眠気に負けそうだったのだが取り敢えずそれは口にせず、さも当然のように返すと、アスタロトは膝から先を子供のように揺らしていたずらっぽい笑みを広げた。
「寝そうだったくせに」
しっかり見られていたらしい。

「……静か過ぎるんだよ、この部屋が。それで、何の用なんだ？」
取り繕うのは諦め、レオアリスは長椅子の対面に座った。アスタロトもそれ以上突っ込むつもりはないらしく、切り替えるように唇に指先を充てた。
「ん、それがね、変な噂を聞いて……」
言いかけたところで、廊下の扉がコンコンと二度ほど音を立てた。
扉を開けて廊下から入ってきたのは、軍には珍しい女性の隊士だ。二十代半ば、緋色の豊かな髪を軍服の背に波打たせている。
軍服の襟元には、中将位を表す銀の横二本線が刺繍されていた。
レオアリスの部下でクライフの同僚、左軍中将フレイザーは翡翠色の瞳をレオアリスに向けた。
「上将、失礼します、そこで公の……あら、いらしてらしたんですね、アスタロト様。失礼いたしました」
フレイザーはにこりと笑って敬礼を向け、それから廊下を振り返った。
「どうぞ、アーシア」
フレイザーの後から入って来たのはあの青い飛竜――ではなく、少年が一人。レオアリス達と同じ十六歳ほどの、優しげな顔をした少年で、髪は濃紺に近い青い色。
アスタロトはにこりと笑ってアーシアを手招いた。
「ありがとうフレイザー。悪かったなアーシア、二度手間させて」
「とんでもございません。フレイザー中将、ありがとうございました」
「どういたしまして」
何故か主人だけ先にいる事にも、フレイザーは全く気にする様子もなく笑みを返す。アスタロトの突然の登場は今に始まった事でもないからだ。
「すぐお茶を運ばせましょう。ごゆっくり」
そう言うとフレイザーは廊下に消え、それを頭を下げて見送ってから、アーシアはアスタロトの座る長椅子の横に立った。
アーシアは長い間――もう十三年もの間、ずっとアスタロトの傍に仕える、彼女のお気に入りの従者だ。
アスタロトはその十三年の間に、彼の年齢に追い付いてしまった。
「すみません、お話の腰を折ってしまいましたか？」
気配りに長けた少年は僅かに首を傾げ、アスタロトとレオアリスを見比べる。
「平気、ちょうどこれからだったから」
にこにことアーシアに笑みを返し、再びアスタロトはレオアリスに向き直ると、首を傾げた。
二人の会話からすると、話は随分重要な事のように思えた。
「えーっと、何て言ったっけ」
「……噂がどうとか」
「そうそう、変な噂があるんだよ」
アスタロトは真剣な色と、少しばかり興味深そうな光を深紅の瞳に湛えてレオアリスを見つめる。
「城下を、夜行（やぎょう）が回ってるって」
「夜行？」
言葉の意味がなかなか掴みがたく、レオアリスはその単語を繰り返した。
「何かね、派手な衣装着た奴らが夜中に街の中を歩くんだって」
ひらひらと両手を広げて揺らしてみせ、それからアスタロトは白く滑らかな頬に指先を当て、ひたと視線をレオアリスに据えた。
「何だと思う？」
レオアリスが眉を寄せる。
「何だと思うって、それだけじゃ良く判らねぇだろ。もう少し筋道立てて説明しろよ」
「今、祭りであちこちから旅芸人の一座が来てるだろ？　それじゃないかって話だ」
「旅芸人？　ああ――」
レオアリスは思い起すように視線を天井に向けた。

夜行とは、そういう事か。
旅芸人達は各地を周り様々な出し物を見せて、観客を楽しませる事を生業（なりわい）にしている。その中には華やかに飾り立てて通りを練り歩く類いのものもあった。
特に今の時期、王都は旅芸人達で賑わっている。
「収穫祭絡みなのか。今ちょうど真っ只中だもんな」
「うん、行こうよ、祭。屋台とか一杯あるよ。食べ歩きしたいなぁ」
「お前は軒並み食い尽くすだろ。他に迷惑がかかる」
この美しい少女は見かけに寄らず、非常に大量の食事を食べるのだ。ちょっと想像がつかないくらい食べる。
それでいてやはりすらりと細い。色々。
それはともかく今は何を思い浮かべているのか、半分口を開け、うっとりと瞳を細めている。
「大丈夫、一軒一皿にするから。それでも下層を一周すればお腹いっぱいになるし、色々食べれて楽しいよね。国内一周旅行するみたいだし。あ、でも朝から抜いとけば良かったかなぁ？　今日朝食べちゃったんだ」
「そんなんで飯を済ますなよ。第一今日って今晩か？　ずいぶん急に――っていやいや、話がずれてるから」
「ずれてないよ」
レオアリスが疑わしそうに瞳を細める。
「まあ落ち着いて、話は最後まで聞け」
その鼻先に指を突き付け、アスタロトは何やら得意そうに顎をつんと持ち上げた。
「だから祭を見に行こう」
「……。――途中が全部すっ飛んだけど」
膝の上に腕を載せたまま、レオアリスははぁ、と息を吐いた。
「すみません」
傍らでアーシアがはにかんだ笑みを浮かべる。アスタロトの突拍子もない言動を、こうしてアーシアが微笑んで詫びるのはいつもの事だ。
一見微笑ましい情景だが――それで反省しているというより、勘弁して、という意味合いが強い。
改善して欲しいとは思いつつも、まあ何となく、レオアリスも慣れっこになってしまっていて、あっさりそれを受け入れた。
「まあいいか。それより」
本題だ。
深夜に行列を成して歩き回るとは、あまり穏やかではない。そもそも見る者などいないだろう。
「その夜行ってのが噂になってるっていうのは？　夜歩くからってだけか？」
「ううん」アスタロトは首を振った。「攫う」
「攫う？」
更に穏やかではない言葉に、レオアリスが膝に腕をついて身を乗り出す。
「って噂。若い娘をね」
だいぶ年上のような口振りでそう言った。
「ここんとこ、下層で失踪者が続いてるんだよ。まああそこは元々色々あるけど、届け出がこの五日で一日一件出てる」
「一日一件？　五日で？　多過ぎる……知らなかったな」
「うちの管轄だから。師団は城下の事件には関わらないだろ？　まだ正式に案件固まった訳でもないし、表沙汰にしてないんだ」
「なるほどね――。なら、失踪にその夜行とやらが関わりあるとは判ってるのか？」
「だから噂なんだ。噂の出どころは良く判らないけど、失踪のあった家の周辺で良く聞かれる。そもそも、最初の失踪者の家の辺りでの目撃情報が一番古そうだから。まあ失踪が全部誘拐とは限らないケドね」
アスタロトはちょっぴり唇を尖らせ、対してレオアリスは何とも気まずそうな、いや、気恥ずかしそうな顔をした。
「まあ」

レオアリスも言葉を濁した。
自らの意志での出奔――有体に言えば家出も有り得る。
レオアリスもアスタロトも、二年前にやった。その途中で出逢ったのだ。
それはともかく、一日一件も失踪の届け出があるとは、実際深刻な事態だった。アスタロトがこんな話をするくらいだから、正規軍は本腰を入れて捜査をするつもりなのだろう。
しかし、そう言えば何故、アスタロトはこの話をここに持ってきたのか。その疑問とともに、ふと思い当たるものがあった。
「……失踪の発生場所は？　下層での失踪って言ったけど……他でもあったのか？」
「昨日までは連続して下層。けど、今日は上層でもあった」
「――西外門か」
「そう。それで夜行は、今日の未明、西外門あたりでも見られてる」
彼女がここに来て、滅多にしない仕事の話をしたのも納得できる。
グランスレイがあの後すぐに正規軍西方第一大隊中将のワッツに尋ね、ワッツが大将に上げたのだろう。
「法術の事か」
「うん」
アスタロトはこくりと頷いた。
「それでお前に聞きたいんだけど、法術の気配って、どんな感じだった？」
「残り香程度だったからな……」
レオアリスは今朝の状況を思い描くように瞳を細めた。
法術を使えば何らかの形跡が残る。法術士であればその跡を見て取る事ができるが、ただ気配は、それほど長時間残る訳でもない。
消えてしまえば、初めから捜すつもりで見なければ、法術士でも気付かないだろう。
「いや――待てよ……」
時間が経てば消えてしまう。レオアリスが気付いたという事は、術が使われたばかりだったか、それとも。
「夜行が目撃されたのは明け方か？」
「いいや。深夜に近いかな」
あくまで夜行が法術に依るものと仮定して、だが、法術の気配が朝まで残っている理由は幾つかある。
「ひょっとしたら、法陣か、それに近いものがあったのかもしれない」
「現場を見たら、もっとはっきり判る？」
「とは思うけどな」
「じゃあ、ちょっと見てよ」
アスタロトはあっさりと言ったが、レオアリスはさすがに頷きかねた。
「それは不味くないか？　正規の管轄に口出す事になる。第一正規軍の法術士がいるだろう」
「今まで、現場を見たのは下手すりゃ失踪の翌日だったり、それに法術士も出してなかったから、法術の気配を感じ取ったヤツがいないんだ。当然うちの法術士にも確認させるけど、お前に見てもらって判る事があるかもしれないじゃん」
「けどなぁ」
「派手な割には手がかりがなかなかなくてさ、今日のお前の情報は結構大きいんだ。家族達も娘が消えてだいぶ参ってるみたいだし、できるだけでいいから協力してよ。正規軍将軍として、近衛師団大将に協力依頼。口出しとか言わせないように、ちゃんと西方には言ってきたから」
アスタロトはにこりと笑った。どうやら最初にそう話を決めてから、レオアリスへ持ってきたようだ。
「……まあ、それで役に立つなら」
「ホント？　ありがとう！　いつでも都合のいい時に行って。それと、夕方は下層に聞き込みに行くからよろしく」
「聞き込み？　そんなのお前じゃなくったって」
正規軍将軍自らがやる事とは思えないのだが、アスタロトは自分で何かをやるという事の方にすっかり気が向いている。

「気になるだろ、夜行って。どんなものか見て、正体暴いて、その上で失踪者全員無事に連れ戻す。それに祭なら聞いて回るのにぴったりだし、ついでに祭も楽しめるし」
どちらが主目的なのか判らない口調でそう言って、アスタロトは満足そうな様子で立ち上がった。
「じゃあ、夕方くらいにまた来るから」
アスタロトは扉に向わず、来た時と同じように窓を開けた。レオアリスの呆れた声が後を追う。
「廊下から帰れ」
「気にするな。どっちが利便性が高いかってだけの話だ。アーシア、行こ」
「はい。失礼します、レオアリスさん」
ぺこりと頭を下げ、アーシアは窓から身を乗り出して、ひょい、と跳んだ。
四角い窓の枠からアーシアの姿が落下して消え、次いで羽ばたきの音と共に、濃紺の鱗をした飛竜が浮上する。
「全く……」
レオアリスは溜息を一つ吐きつつも、中庭から飛び立つアーシアとその背のアスタロトに手を振った。
アスタロト達の姿が棟の屋根の向こうに消えた後、レオアリスは扉を振り返った。
「さて、と。グランスレイは反対するだろうな……」
ただ行くなら早い方がいい。法術の気配はもう無くなっているかもしれない。
そろそろ昼の休憩時間に差し掛かり、出かけるにはちょうど良かった。
廊下に出たところで、角を曲ってきたクライフと行き会った。
「あれ、上将、アスタロト様が来てたんじゃないんですか？」
「ああ、たった今帰った」
「すれ違わなかったですが――窓からっスか。玄関の所で一目見ようって出てくるのを待ってる奴等がいたんですが」
クライフはにやりと笑って「残念だったな」とまだ玄関前にいてアスタロトが出てくるのを待っているだろう隊士達に同情を寄せた。
「次回からは中庭で待ってた方がいいって言ってやらなきゃな――それは？」
クライフが持っている書類を眼で示す。どうやらクライフはその書類をレオアリスへと持ってきたようだ。
「一応、今朝の拾得物の中身です。それほど確認の必要もないと思いますが、机の上に置いときます」
「判った。何か所有者を特定できそうなものは入ってたか？」
「いやぁ、これと言って。持ち主は声からして女だと思うんですが、女っぽい持ち物もないし。まあ水晶が幾つかあったようですけどね」
「水晶？」
クライフは親指と人差し指で長さを示して見せた。
「一寸くらいの欠片です。俺も見たけどたいした値打ちモンでも無さそうですよ。それ以外は小銭程度の金と、それから地図ですね。これじゃわざわざ取りに来ないかもしれないな」
「ふうん……」
遠く、正午を報せる時計台の鐘が鳴る。クライフは書類を脇に挟んだ。
「上将は？　昼行きますか？」
「いや、アスタロトに頼まれて、朝、西方が立ってた館をちょっと見に行ってくる」
「あそこを？　行ったらあんま面白く無さそうですけどね、正規の管轄じゃ」
「まあ、な。その前にちょっと」
隣室の扉を気が進まなさそうに指差すレオアリスを見て、クライフも苦笑した。
「副将もアスタロト様の頼みじゃ仕方ないって言いますよ。俺も行きましょうか？　上層」

「いや、一人の方が刺激しなくていいよ」
「了解。お疲れ様です」
クライフが書類を置きにレオアリスの執務室に入るのを見てから、レオアリスはグランスレイの執務室の扉を叩いた。

五

正午過ぎ、この時刻の上層の大通りを一筋入った辺りは普段なら人通りが少ない。大通りには食事を出す店があり混み合うが、そこから路地に入るとほとんど店が無いからだ。
主要な通り以外でも馬車が通れるようゆったりと道幅が取られ、通りの左右に歩道が設けられているのが上層の特徴だった。レオアリスが歩道を歩く間にも、個人所有の馬車が二台、通り過ぎた。
この時間、太陽がほぼ真上から降り注ぎ通りは明るいものの、通りの両側に並ぶ建物の重厚な壁と固く閉ざされた青銅の扉は、用のない者を拒むように感じられる。
ただ、今レオアリスが歩く通りの先には人だかりができていて、目的の館はすぐに判った。

正規兵達はレオアリスの姿を見ても驚いた様子は無かった。アスタロトが事前に連絡をしていたからだろう。
玄関前に立っていた三名は大将位に対する敬礼を向け――しかし、その面には来訪を歓迎している訳ではないという思いが、隠す事もなく浮かんでいる。
「任務を邪魔するようで悪いが、少し確認させてもらいたい」
「どうぞ。お話は伺っております」
前へ出て、案内する素振りを見せたのは隊の小隊長だろうか。二十代半ばほどで、軍服を見ればやはり小隊長を示す紀章があった。
「どこをご覧に？」
レオアリスは瞳を細め建物全体を見上げた。
もう法術の気配はないと言っていい。朝のあの時でさえ、ごく微かな残り香だったのだ。
「そうだな……」
「ごゆっくり、いくらでも捜して頂いて構いませんよ」

視線を戻すと、小隊長は薄い笑みを浮かべてレオアリスを眺めていた。
「さすが近衛師団はずいぶんゆとりを持ってらっしゃっるようで」
そこには他の管轄に首を突っ込むとは、という含みが込められている。
レオアリスは敢えて平然と肩を竦めてみせた。
「俺だけはな。他は忙しいんだ」
「ああ、だから供もお連れにならず、お一人で。まさか剣士殿ともあろう方がお一人で来るなんて、何か隊内に問題でもあるのかと思いましたよ」
「至って平穏だよ」
出掛けに相談した際、グランスレイはやはり賛成ではなかったが、アスタロトに頼まれては断る訳にも行かないと、渋々頷いた。
誰か同行させようと言ったが、それは止めた。
極力、近衛師団の立場での関わりを出さない方がいいと思ったからだ。
「俺は偶然気付いただけだから、任務じゃなく単なる証人的な立場での協力に過ぎない。ところで、入っても？」
「――どうぞ。屋敷の主に先ずはお引き合わせします。くれぐれも余り刺激しないでくださいよ」
「手間をかけて申し訳ない」
レオアリスが言い返してくると思っていたのか、肩透かしを食らったような顔になって小隊長は扉を示した。
小隊長とレオアリスが邸内に入る姿を追って、誰のものか、小さな舌打ちが聞こえた。
「あんなガキが大将なんて、近衛はどうかしてる」
「剣士ったって、剣士は軍にゃ向かないっていうじゃないか」
「戦闘種ってよ……戦闘狂だろ、薄気味悪いぜ」
「よせよ、聞こえたらお前斬り殺されるぜ」
素早く囁き合う声と抑えた笑い。
小隊長は聞こえなかったかのように扉を閉ざしたが、口元に薄笑いを浮かべている。
レオアリスにしてみれば、批判は気にならない。
というよりは、気に掛けないようにしている。
自分の状況を考えれば、当然あるものだろうと理解はできる。
ただ、近衛師団大将としては正面切って批判を受け入れていると取られるのは避けるべきで、そこが難しい。
かと言って、下手に不快な表情でも見せれば余計つつかれる。
あと数年、相応に年齢が上がれば、批判も少し鳴りを潜めるだろうか。
（年齢だけ理由にしても仕方ないか）
そもそも剣士であることはこの先もずっと変えようがない。だから年齢のこと以上に、自分がこの立場に相応しいと認められるよう努力を重ねていく必要がある。
何より、王を守護する近衛師団として、相応しく。
批判を受けて仕方がないと言っているだけでは、自分をこの大将に任じた王の意思すら裏切る事になってしまう。
それは絶対に嫌だ。
王の期待に叶う存在でありたい。
その願いがどこから来るのか、故郷の村にいて王の姿を見たことが無かった時でさえ――レオアリスの中にそれは核のようにあった。
「――こちらです。二階へ」
レオアリスの沈黙をどう思ったのか、小隊長はどことなく視線を逃がすと、先に立って玄関広間の正面にある階段を昇り出した。
邸内は主の財力を感じさせる内装で、優美な曲線の手摺を持つ階段を昇った二階の、廊下の左奥に主の部屋があった。
廊下の反対側の奥には正規兵が二人立っている。おそらくそこが失踪した娘の部屋なのだろう。

案内されたのは応接間のようだった。一階に正式な応接間があるのだろうが、ここは主人がごく親しい客と談笑する為の、小ぶりのものだ。色彩鮮やかな絨毯の上に、椅子が幾つか置いてある。
ここにも正規兵が壁際に三名ほど立っていて、屋敷の主は蒼白な顔を伏せるようにして中央の椅子に座っていた。
五十歳半ばほどの主はレオアリスの姿を見て訝しそうな顔をしたが、名乗ると改めて軍服を確認するように見つめ、次第に瞳に希望の光を浮かべた。
「剣士殿――、で、では貴方が……近衛師団も娘を捜してくださるのですか！？」
近衛師団も、という言葉の先には、王も、という意味が含まれている。
それをぴりりと感じ、レオアリスは改めて気を引き締め、慎重に口を開いた。
「正式な任務ではありませんが、娘さんを見つけ出せるよう、できる限りのご協力はします。少し、邸内を拝見してもよろしいですか？」
「もちろん――！」
主は咳き込むように言って、何度も頷いた。
「では何か手掛かりでも？」
「ここを朝通りかかった時に、気になった事があります。それを確認して、何か判れば確実に彼等に伝えます」
レオアリスは正規兵達を確認するように振り返り、これには彼等も真剣な面持ちで頷いた。
主はその場を離れようとしたレオアリスの手を押さえ、ぐっと握った。
正面から視線が合い、主の青ざめた瞳の光にレオアリスは息を詰めた。
微かに震えているその手に、痛いほどの力が籠められている。
「どうか――、どうか娘を、あの子を無事に――」

主の部屋を出て、廊下を真っ直ぐに娘の部屋へと向かう。その間にも、特に法術の気配を感じる事はなかった。
娘の部屋はいかにも少女らしい、可愛らしい部屋だった。ここにいる正規兵は幾ばくか気後れした様子で、レオアリスもやはり彼等と同じように、捜査の為とは言え踏み込むのは躊躇われた。
少女らしい部屋だからというだけではなく、こんな出来事には相応しくない場所だと、そう思える。
小さな前室と、その奥の部屋には白い天蓋のついた寝台。窓辺に掛けられた日除け布は薄桃色に白い小さな花を散らしている。
背の低い衣装棚に、化粧台の上には化粧品より人形やぬいぐるみの方が多く乗っていた。思ったよりも随分若そうだ。
年齢を尋ねると、すぐに答えが返った。答えたのは室内に居た、四十歳くらいの兵士だ。
「十三歳と言っていました」
「十三――」
まだほんの子供だ。
レオアリスは室内をぐるりと見回した。日差しが明るく室内を染め上げ、法術の気配は全くない。
朝よりも近付いたはずがこれでは、協力をしたくてもしようが無いと、そう思えた。
「いなくなったのに気付いたのは、朝になってからか？」
やはり先ほどの正規兵が頷いた。
「そのようです。家人が起しに来て、部屋に居ないのに気付いたそうで。それが朝の七刻ぐらいでしょう」
「その時の様子は……何か変わった事とか」
「窓が開いていたそうです。その、露台への窓です」
「窓――」
その正規兵が指差した窓は、通りに面して設けられていて、言葉通り

露台に繋がっている。それは今も開いていた。
「露台……露台か」
そう呟いて、レオアリスの漆黒の瞳にぱっと光が閃いた。
「見ても？」
扉の前にいた小隊長が面倒そうに肩を竦める。
「どうぞ。しかし全く痕跡はありませんよ。侵入した跡や、降りる為に縄を括り付けたような跡も。我々だって確認しましたがね、もう一度見ても改めて見つかるものなんて」
「それは、多分その通りだ」
ただ、レオアリスはもう一つ、はっきりと思い出した。
あの時、何かが光を弾いていて、それがレオアリスの眼を止めたのだ。
窓硝子が太陽を反射させているのかと思ったが、そうではなく、露台の辺りで何かが光を弾いているのだと――
肩に纏った長布を翻しレオアリスは露台へと部屋を横切った。その様子に、年配の正規兵が後を追う。
「何か――」
レオアリスは左右に広い露台をざっと見渡し、正規兵へ顔を向けた。
「光を弾きそうなものを捜してくれ。大きさや形状は何でもいい」
「光、ですか」
年配の正規兵は不思議そうな顔をしたものの、すぐに下を向き、それから白い御影石を貼った露台に身を屈めて捜し始めた。レオアリスも膝をついて、視線を低くする。
何をしているのかと、小隊長やもう一人の正規兵も、顔を見合わせて窓辺に寄った。
一軍の大将が地面に手をついて捜査をするなど、まず有り得ない。
笑おうとしたが上手くいかず、逆に二人とも同じように露台に目を凝らした。
ほどなく、しゃがみ込んでいた年配の正規兵がレオアリスを振り返った。
「これは？　割れてますが」
硝子戸の影になった辺りを指差す。
欠片を合わせれば小指ほどの大きさの、薄い乳白色の水晶が、白い露台の窪みに落ちて割れていた。
「水晶か――」
レオアリスはその前に屈み、革手袋をはめたままの指先で、一番大きな欠片を拾い上げた。
陽光にかざすと、水晶は内部できらりと光を屈折させ、反射させた。
ふっと漂った、ごく微かな、法術の気配。
「多分触媒だ。水晶……」
どこかで――、いや、ついさっき聞いた。
クライフが指で大きさを示して見せた――
「大将殿？」
膝をついたまま黙り込んだレオアリスの顔を覗き込むように、年配の兵士が問いかける。
「いや。有難う」
レオアリスは立ち上がり、水晶の欠片を小隊長に手渡した。
「これを法術院の分析に。アスタロト公へは後からご説明するが、俺が感じ取った気配はおそらくこれだ。こいつの出元を捜すといいだろう。そこから辿れるかもしれない」
「承知しました」
レオアリスの瞳を見てその重要性を感じ取ったのだろう、小隊長はそれまでの反発を一時忘れてすっと頷いた。
小隊長が水晶を大切に布に包むのを見ながら、レオアリスはこの後すべき事を考えていた。
クライフの示した水晶。
この朝に、下層の人ごみで、ひったくりに盗られた鞄に入っていたものだ。
おかしな事に、あの場で誰も、持ち主だと名乗り出なかった。
（偶然か、それとも）

あの鞄に入っていたものが、この水晶と同じ物だったとしたら
レオアリスは少し足早に、館を後にした。

六

バン！　と安っぽい机が鳴った。
ゆらゆらと部屋の陰が揺れる中、机を叩いた男はそれでも怒りが治まらないらしく、息も荒く目の前の女を睨み付ける。
ただ声を抑える事だけは忘れていない。
「どういう事だ？！　何やってる！　あれを持っていかれたら」
女は臆する事無く、男を睨み返した。女は二十代半ば、豊満な胸を大きく襟刳りの開いた服で強調し、顔にはくっきりした化粧を刷いている。
男は四十歳前後で、ひょろりと背が高く髪の生え際も後退していてパッと見冴えない印象だが、剥き出しの腕には幾つも傷跡あった。
二人とも余り真っ当な商売をしているようには見えない。
「しょうがないだろ、ひったくられたんだからサァ！　それを師団のヤツが手に取るなんて誰が思うんだい」
「その場で取り戻さねぇテメェが馬鹿なんだ。素知らぬ面してりゃ何もねぇ」
昼間から窓の鎧戸を閉めきった薄暗い部屋に、一つだけ灯した蝋燭の灯りがぼんやり室内を照らしている。
光と影は、二人の僅かな動きでゆら、ゆら、と揺れた。
「相手は中将と剣士だよッ、中身を改められて、下手に関連付けられちゃ」
「あんなモン、見た程度じゃ判らねぇよ。術を使わなきゃただの石っころだ」
女は高い位置にある男の顔を突き上げるように食って掛かった。
「だったらアンタが行って来なよ！　その間抜け面晒してさァ！」
「こンの、アマ」
打ち付けようと腕を振り上げた男を、別の声が阻んだ。
「煩いぞ。彼女達が目を覚ます」
きし、と卓の一角が鳴り、人影が動く。

「落ち付けよ、ウルド、エマ。煩いのは好きじゃないんだ」
口調は穏やかだったが、二人はすっと青くなって口を閉ざした。
諫めたのは卓の一角に、それまで黙って座っていた三十前後の男で、細い手足には幾らも力は無さそうだ。
病を得ているのか、本来整っているだろう顔は青白く頬も痩け、眼は落ち窪んでいる。
現に彼は、二人の人影に両側から支えられるようにして座っていた。服装からすると支えている二人は女のようだ。恭しく、男の肩に手を置いている。
二人の顔は蝋燭の灯りの外にありよく見えないが、整った口元は笑みを象っていて、片時も崩れないその笑みはどこか薄ら寒さを感じさせた。
今、男が歪めた唇には、彼女達と同じ形に、無機質な笑みが浮かんでいる。
「取り敢えずは、新しい娘を探すのが先だ」
冷えた響きだった。微かに、きし、と軋む音がする。
「あ、ああ――判ってるさ、ユンガー」
ウルドは少し狼狽えて頷き、その感情をすり替えるようにまたエマを睨んだ。
「全く、上層の娘なんか攫って来やがって、下手すりゃ足がつく状況だってのによ」
既に娘の館を西方軍が調査しているのは彼等も知っていた。
予定通り、下層地区だけを狙っていれば、さほど目立たずに仕事を済ませられたはずだ。
「もう少しまともな術使えねぇのか」
「あたしを馬鹿にすんなら、その口焼いてやるよ。そしたらいくら間抜けなアンタでも術がどんなモノかくらい理解できるだろ」
「ンだとォ」
「いい加減にしろと言っただろう」
あくまでも落ち着き払った様子で、ユンガーはエマに光の無い眼を向けた。
「エマ、君の術は役に立っている。私はあの娘は気に入った。まるで人形のようだ」
エマは勝ち誇った色の中に、一瞬だけ――恐怖を浮かべた。
ウルドが忌々しそうに口を挟む。
「今度は渡す相手を間違えるなよ」
「ふん、アンタの店のモンに言いなよ、ウルド。下層にあんなお嬢サマが来るとは、前もって言っておいてもらわないとアイツ等だって判らないと思うけどね。アンタの判断が悪いんじゃない」
普通なら下層の店で買い物などしない上層の娘が来るのは、今が収穫祭だからだ。
「ちッ」
ウルドは舌打ちして唸り、どさりと椅子に腰を落とした。
「ねェ、邪魔ならあたしにちょうだいよ。あの娘、とっても可愛らしいじゃない」
ぺろりと唇を舐めて笑ったエマを、ウルドは苛々と小突いた。
ユンガーは気に入ったと言ったのだ。
「馬鹿言ってンじゃねぇ。いいからお前は新しい娘を見繕って来るんだ。今度はきちんとな。それから、店には二、三日は知った顔以外通すなって伝えな」
「汚い手で触んないでよ。ふん、威張りやがって」
エマは不満そうに身体を一振りし、暗い廊下に出ていった。
扉が開いた間だけ、昼の白茶けた光とちゃぷちゃぷと水が岸を叩く音が部屋に入り込み、すぐに扉の木の板に閉ざされた。
陽光がこの部屋の床を照らした束の間、部屋の壁にぐるりと取り囲むように並んでいる人影が、ぼんやりと照らし出される。
「邪魔されるのは困る。まだ納得していないんだ。もっと――もっと理想的な素材が欲しい。それができないなら」

底冷えしたユンガーの声に、ウルドは少し慌てたように、卓の上に身を乗り出した。
「まあ待ってくれ。足がつくったって、あんな水晶どこにでもある、そうそう判りゃしねぇ。あと二、三人見繕うのだって余裕だよ。どうしてもヤバくなったら王都を出ちまえばいい」
ウルドは両手を持ち上げユンガーを制するように突き出しながら、引きつった笑いを浮かべて立ち上がった。
「あんたの望み通りさ、人形師（ユンガー）」
そそくさと扉を開けて外に出る僅かな間に、ウルドは壁に視線を走らせた。
立ち並ぶ十数名の人影が、ウルドに視線を返す。
房飾りの付いた帽子、鮮やかで優雅な衣装、華やかな色とりどりの仮面。
仮面の奥の、無機質な、硝子玉の瞳。
瞳には生命の光が無い。
人形だ。
それはどれも皆、良く出来た、まるで今にも動き出しそうな――
だが、人形だった。
壁に並べられた人形達がうっすらと笑みを刻んだまま、暗がりからじっとウルドを見つめていた。

七

硬質な音を立てて、鞄から水晶が転がる。
執務机の上にあの鞄の中身を広げ、レオアリスは椅子に深く腰掛けたまま、それらに視線を注いだ。
小銭の入った財布、王都の地図、そして乳白色の一寸程度の水晶が三つ。身元が判る物は何もない。
水晶は見かけがあの露台に落ちていたものと酷似しているものの、法術の気配は感じられなかった。
果たして同じものなのかどうかは、今の段階では何とも言えない。
ただ、アスタロトからの回答は早かった。
他の四件の現場からも、同じ水晶が見付かった、と、そう伝えてきたのはつい半刻前だ。
「これも、関連してるか――？」
分析に回して、何か判るだろうか。
扉が叩かれ、顔を上げるとグランスレイが扉を開けた。
「上将、三刻から会議の時刻です。そろそろ総司令部へ」
そう言いながら、グランスレイはレオアリスの手元に目を止め、怪訝そうに近付いた。
「それは？」
「上層の現場から、これと同じ物が見付かった。正確には近い物か――館の露台に、法術の触媒らしい水晶が落ちてた」
指先で持ち上げた水晶は、背後の窓からの陽光を受け、微かに光を蓄めている。
「触媒？　では、それが」
「いいや。これは今朝、例の盗難にあった荷物から出てきたんだ。その場で引き取り手が出て来なかった物だ」
そう言って水晶を置き、レオアリスはグランスレイの意見を諮るように、その謹厳な面を見つめた。
「関わりがあると思うか？」

「――この状況では判断は難しい処ですが、引き取り手が現われなかったというのは、確かに引っ掛かりますな」
レオアリスは頷いた。
「結果関わりが無くても、一通り調査はすべきだと思う。これは西方軍に回す。西方軍から法術院に依頼するだろう。ただ……」
一度置いた水晶を、再び取り上げる。乳白色のそれをじっと覗き込めば、内部で屈折した柔らかな光が踊る。
あの部屋――攫われた少女の部屋に満ちていた、柔らかな昼の光。
憔悴し、微かな希望に縋りついた瞳。
『どうか、娘を――』
レオアリスは顔を上げ、真っ直ぐグランスレイを見た。
「グランスレイ。今回の件、もう少し協力するつもりだ」
初めは確認だけのつもりでいたが、あの部屋と、憔悴しきった父親の様子を見て、その気持ちは変わっていた。
そして今手元にあるものは、事件を解く手がかりになるかもしれない。
「一つ手元に残して、少し様子を見ようと思う」
「しかし、あまり表立って関わるのは」
当然グランスレイは懸念を示して眉を寄せた。
「判ってるさ。アヴァロン閣下へも今回の経緯をご説明した上で、アスタロトかワッツを通じて情報提供するだけに止めるよ。ただ、できる限り協力をして、できるだけ早く、無事家に返したいんだ」
攫われた少女達がどのような状況なのか、そもそも何の目的で攫われたのか判らないが、一刻を争う事態である事は間違いない。
グランスレイにも二人の娘がいる。レオアリスが感じた事は良く理解できたのだろう、暫く黙っていたが、ややあって頷いた。
「それがいいでしょう」
レオアリスが緊張の解けた、ほっとした顔を見せる。
グランスレイが是と言うか、否と言うか、それはこの立場で物事を判断する上で、大きな基準だ。何よりグランスレイの近衛師団での経験は、レオアリスの軽く十倍の年数になる。
一方でグランスレイは、そんなレオアリスの様子を見て笑みを抑えた。
彼が反対してもおそらく、レオアリスはこっそり行動するのだから。
「では、隊内にも事件に対する警戒を周知し、街中で不審な動きがあれば隊士達にも対応させる事にしましょう」
「有難う。――会議だったな」
レオアリスは笑みを零すと、一旦鞄の中身を仕舞い、立ち上がった。

八

「すごいねぇ。やっぱり夕方の方が人が多いよ」
アスタロトは込み合った通りを歩きながら、辺りを見回した。
夕刻になって、下層の通りは様々な屋台や露店が立ち並び、それを目当てに訪れた人々で混み合っている。
いや、混み合っているというのは少し可愛らしい表現で、実際のところは歩くのも困難なほど人が犇めき合っていた。
「国中から人が集まってるみたいだよな」
レオアリスは新鮮な空気を補充しようというように、空を仰いで息を吸い、吐いた。通りの左右に並ぶ三階建ての建物の向こうに、茜色から藍色に染まっていく空が見える。
「お前、王都を初めて見た時もそれ言ったよね。あの時は祭でも何でもなかったけど、祭と間違えて」
くすくすと可笑しそうにアスタロトが笑ったのは、王都を初めて見た時のレオアリスの感想が面白かったからだ。
ただ、人里離れた北方の辺境で育った人間が初めて王都を見れば、誰でもそう思うだろうほどには、普段の人通りも多い。
「そんな古い話……」
レオアリスは振り返って、あれ、と辺りを見回した。今話していたばかりのアスタロトがいない。
「どこ行った？　ア――」
アスタロト、と呼ぼうとして、口を閉ざした。
こんな所でその名前を呼んだら騒ぎになるだろう。ただでさえアスタロトはすれ違う人々の注目を集めて、そのせいで通りを歩くのが更に困難なのだ。
先ほどまですぐ横を歩いていたから、まだ近くにいるはずだ。厄介なのは、通りにすっかり人の流れが出来上がっている事だった。
坂を上る者は右、下ろうとする者は左側を通っていて、逆流しようとするのは、正直言って迷惑だ。
「すいません、ちょっと……失礼」
何だ何だと睨まれながら、立ち止まれば押し流されそうな人の波を何とか横切るように抜け、レオアリスは露店の並ぶ路肩に出た。
「――いた」
予想通り、三つほど後方の露店に立ち止まっているアスタロトの姿がある。
店の主からこんがり焼けた玉蜀黍（とうもろこし）を差し出され、嬉しそうに噛りついたところだった。
「何やってんだ、唐突に」
レオアリスが苦労して露店の前まで辿り着くと、アスタロトは悪びれもせずににこにこ笑って見せた。
「だっていい匂いしたんだもん。食べる？」
「いや、俺は別にいい。っていうか、今は仕事だろ、一応」
「いいじゃん、お腹空いてるんだし」
「せめてひと声掛けてからに……」
「兄ちゃん、兄ちゃん」
露店を挟んでひと声掛けられ、レオアリスが振り向くと、店の主がにょきりと手を伸ばした。
「お代」
「――」
玉蜀黍一本分の代金を支払い、レオアリスは再び歩き出しながら、アスタロトを振り返った。既に玉蜀黍は食べ終えている。
が。
「お前、金は？」
レオアリスの鋭い質問にも、アスタロトはけろりとしている。
「ないよ。いつもはアーシアが払ってくれるし」
「……アーシアいねぇじゃねぇか」
「うん。誘ったんだけど、用があるって」
「それはさっき聞いたけどなぁ、そーいう意味じゃあ無くって」

「どういう意味？」
「金が無いんなら注文すんな。俺が捜しに来なきゃお前は無銭飲食……」
「あっ、美味そう！　おっちゃん、りんご飴ちょうだい～」
瞳を輝かせたアスタロトが、するすると路肩の屋台に吸い寄せられていく。
「――」
ふー、、、と長い溜息を吐き出す。
何でアーシアは一緒に来てくれなかったのか、と、心底思った。

結局アスタロトがそうして屋台に吸引されたのが五回は重なった頃、漸くレオアリスは事態打開の方法を思いついた。
取り敢えず、手当たり次第に何種類もの食べ物を買い込み、アスタロトに握らせる。
周囲の人々は笑っているが、それを気にしていたら前に進めない。
この場合、通りを進めない。
「さて、食ってる間に歩くぞ。まずは最初の失踪現場辺りで、例の噂を聞き込まなきゃな。西方軍ではあの水晶でどこまで探れそうだ？」
「はられんれんわはんらい」
「……飲み込んでからでいいよ」
アスタロトはごっくんと串焼きの肉を飲み込んだ。
「――まだ全然判んない。何せありふれた物だしね。宝飾品扱ってる店だけでも王都に何軒あるやら」
「店か……地政院の営業許可から当りを付けるかな」
「ひょれほあひはほへ」
「判んねェっつうの」
ごっくん、と蒸したじゃがいもを飲み込む。
「それも有りかもね」
ちょうど通りかかった街の角には旅芸人達が陣取り、見物の人だかりができていた。
背伸びして見透かせば、二人一組の曲芸師だ。もう一人、弦楽器の演奏者が軽妙な音楽を奏で、曲芸師がくるりと身を翻すごとにわっと歓声が上がった。
件（くだん）の夜行とは違いそうだ。
どの角でも似たような輪ができていたが、それらしい者は見当たらない。
というよりは、この中からその夜行とやらを捜し出す方が難しい。
砂利道の中から小石を拾い上げようとするようなものだ。
「地政院は明日にでも行ってみるか……アスタロト、悪いが俺も少し関わるぜ」
「たすはふよ、おはえひはわふいへほ、うひほいは、へんはへへいっはいへ」
「あー、そりゃまあ現場が先だよな、気にすんな」
「判ってんじゃん」
「あー」
一々突っ込むのが面倒くさくなったのだ。
とにかくアスタロトの言うとおり、西方軍は現場の調査を優先すべきだろう。
「現場には手を出すつもりはないけど、側面を洗ってみる。考えられるのは商店と、後は今王都に入ってる旅芸人の一座か。旅芸人って、許可を下ろすのはやっぱり地政院だったよな？」
「え？　えーと、そ、そうじゃないかな。該当しそうな店を抜き出したら教えて」
「判った。――この辺りか？　最初の失踪現場は」
レオアリスが足を止めたのは、下層南西のマレル地区に入った辺り

だ。
商人や職人が多く住む中層にも近く、以前は各地から運んで来た品々を扱う店が多く並んでいた。
王都を縦に走る幾筋もの運河の内、数年前に使用されなくなった古い運河が近くを流れている。
別の新しい運河に機能転換した為、今はこの辺りは商業地区から住宅地へ姿を変えているが、旧運河沿いは使われなくなった倉庫が残り、どことなく寂れた雰囲気が漂っていた。
「レオアリス！」
唐突に、アスタロトは切迫した声で通りの反対を指差した。
「何だ？！」
何事かと振り返り、レオアリスはアスタロトの指差す先に視線を走らせた。
通りの人混みはまだ途切れる事なく続いている。
それぞれの会話や足音が作り出す騒めき、旅芸人達が掻き鳴らす楽の音。
特に怪しい動きはない。
「何が――」
「あれ食べたい！　珍しいぞ、あれは」
「――……ああ、団子」
アスタロトの示した先にあったのは、串焼き団子の屋台だった。
「……もう食い切ったのか？」
「ご馳走様でした」　アスタロトはぴょこんとお辞儀をし、きらりと光る瞳を上げた。
「お代わり」
「――」
四大公爵家当主。正規軍将軍。炎帝公。
「大丈夫かな、この国……」
「何」
「いや……」
独り打ち消すように首を振った。
副将軍タウゼンは経験豊富な古老で、アスタロトを良く支えている。
それに他の三公が磐石（ばんじゃく）で、何より、王が統治しているのだ。
「……帳尻は合ってるか……」
ちょっとくらい緩い場所が無いと、張り詰めてばかりでは糸も切れてしまう。
「何か失礼なこと考えてないか？」
「そんな事は無い。あれでいいんだな？」
「うん」
アスタロトは串団子を焙っている屋台を見て、嬉しそうに頷いた。
「――ほら」
屋台の男から串に刺した団子を受け取って、レオアリスはアスタロトを振り返った。
いない。
代わりに通りすがりの中年男性に怪訝そうな顔を返された。
「……またかよ。今度はどこ行ったんだ……」
というより、一体全体何をしにここに来たのだったか。だんだん本来の目的が判らなくなってきた。
いや、アスタロトの本来の目的とは、間違っていないか――
レオアリスはほかほかと湯気を放つ串団子を見て、しみじみ肩を落とした。
「食おう」
ぱくりとくわえると、アスタロトを探すべく、人の波を見渡した。

レオアリスが通りを横切り屋台に向かっている間に、アスタロトは道端に寄って待つ事にして、建物の壁に寄りかかった。
ぱっと目を引く美しい少女に、通行人達がちらちらと視線を送っている。
「本当に人多いなぁ」
屋台だけではなく、所々に設けられた広場では、旅芸人達が日を通して様々な技を繰り広げていた。
「私も混じって火ぃ吹こうかなぁ」
レオアリスが聞いたら目眩を起こしそうな事をのんびり呟いた時だった。
「ねぇ、お嬢さん」
忍びやかな声とともに、そっと腕を押える手があった。
振り返ると、女が一人、アスタロトが寄りかかった壁のすぐ傍の、脇道への入口に立っていた。目深に被きを下ろし、柔らかな香を纏っている。
「――何か用？」
女はそれには答えず手を離すと、すう、とその手を揺らしてアスタロトを誘い、路地の暗がりに退いた。
香の匂いに引かれるように、自然とアスタロトは路地に入った。
女が艶(あで)やかな紅い口元を綻ばせる。
あの女――エマだ。
エマはアスタロトを見つめ、驚きと、とろけるような光を瞳に浮かべた。
「何て綺麗なコ――、ねぇ、あんたお守りはいらない？」
「お守り？」
アスタロトがエマの近くに寄ると、エマはするりと腕を伸ばし、アスタロトの白い頬を撫でた。
「ちょ」
「あんたのこの陶器みたいな肌を、ずっと輝かせるお守りよ。本当に、何て綺麗な肌だろう。透けるようだわ」
話している間も頬を撫で、感極まったようにうっとりと息を吐く。
「ああ、この唇も、大きな瞳も、艶やかな髪も、素敵だわ――お人形さんにして飾っておきたいねェ」
甘く絡み、じわりと這い上がるような声で、両手で頬を挟んだまま、なおも良く見ようというように顔を寄せた。
「綺麗な娘さん……。年取って衰えるなんてもったいない。あんたも今のまま、ずっと美しいままでいたいでしょう？」
「ちょっと、は、放してくんないかな」
エマは反対に、アスタロトの腕を取り、肌に手を滑らせるように撫でた。
「んぎゃあ！」
「あんたに永遠をあげる。ユンガーがあんたを見たら、真っ先にそうするよ。ああ、でもあんたはあたしの傍に置きたいわ。どうしよう」
エマは焦れるように身体を捩り、アスタロトの手を握ると、手の中に何か小さな硬いものを握らせた。
「あんたを今のまま」
「放せってばー！」
握り締められた手を振り解(ほど)こうとした時に、漸く救いの声が掛かった。
「アスタロト」
路地の入り口に、アスタロトの姿を捜し当てたレオアリスが呆れ顔で立っている。
「ここにいたのか。お前いい加減にしろよ、何度も――」
「レオアリス！　助けてぇ！」
「はぁ？」
アスタロトの向こうを確認するように覗き込み、エマの姿を捉える。
「誰だ？」

レオアリスの顔を見て、エマはぎょっとして身を震わせた。
「朝の――」
一言洩らし、次の瞬間には身を翻して通りの奥に駆け出した。
アスタロトの手に押し付けていた何かが地面に落ち、脆い音を立てて砕けた。
アスタロトとレオアリスの眼が、砕けたそれを確認する。
水晶だ。
「……待て！」
「俺が追う」
レオアリスは駆け出そうとしたアスタロトの肩を抑えて横をすり抜け、エマの後を追った。
路地の奥がちかりと光る。
「――炎だ！」
アスタロトが叫んだのと、レオアリスが右手を振り抜いたのは同時だ。
路地の奥から雪崩出た炎の塊が、レオアリスの手元から走った青白い閃光とぶつかり、二人の手前で砕けた。
風が髪を煽り、炎が閃光に切り裂かれて散る。
レオアリスの手には、いつの間にか一振りの長剣が握られていた。暗い路地を照らすように、刀身が青白い光を纏っている。
レオアリスの――剣士の、剣（つつぎ）。
そのまま女を追い掛けて路地を駆け、二、三度角を曲がった所で足を止めた。
路地はそこで行き止まりになっていたが、既に女の姿は無い。
今通ってきた路地は、他に曲がる所のない一本道だ。
レオアリスは瞳を細めた。
まだ明確に残る、法術の気配。
「法術――あいつ、法術士か。この短時間で移動するなんて、結構高位だな」
「――この私に炎を仕掛けるなんて、いい度胸じゃないか」
追い付いたアスタロトは薄っすら笑みさえ浮かべながら、レオアリスの横を通り越し、路地を見回した。
「絶対に、倒す！」
「倒してどうするんだ。捕まえるのが先決だろ」
「いいや、倒す！　何か腹立つし！」
妙に頬を撫でてきた手を思い出し、アスタロトはぶるりと身を震わせた。
アスタロトの憤りの理由は、当然レオアリスには判らない。取り敢えず聞き流して袋小路の壁に近付き、赤茶けた煉瓦に手を当てた。
（法陣は無いか。最初から逃走経路を用意してた訳じゃないんだな。却って厄介だ）
他の痕跡を探す為に、視線をゆっくり周囲へ巡らせ――
ぴたり、と動きを止めた。
ばっと上空を見上げる。
建物に囲まれたここから見えるのは、既に暮れきった空だけで、あとは煉瓦の壁と屋根の庇（ひさし）。窓もない。
だが一瞬だけ、刺すような視線を感じた。
「――」
もう何の気配もない。
「アスタロト、何か感じなかったか？」
アスタロトは耳を傾けるようにじっと佇んでから、首を振った。
「――いや。何？」
「誰か見てたな」
アスタロトは再び周囲に視線を投げた。紅い瞳が陽炎のように揺らめく。
「あの女かな」
「判らない」
「小隊を呼んで、すぐこの場所を調べさせよう」

アスタロトの言葉に頷き、もう一度壁を見上げてから、レオアリスは元来た路地を引き返した。
「さっきの水晶を回収しておこう。相手はどんな奴だった？　顔を覚えてるか？」
「思い出したくない！　気持ち悪いよぅ」
「何だ？　気持ち悪いって」
アスタロトはまた憤慨しながらついて来る。
「ペタペタ撫で回されたっ」
「はぁ？　何だそりゃ」
「何か変な事言ってさぁ」
路地の入口辺り、先ほどアスタロトが立っていた場所に、まだ水晶の欠片が落ちていた。
膝を付き、レオアリスは砕けた水晶を拾い上げた。
乳白色――同じ物だ。
「で、あの女は何て言ったんだ？」
「永遠をあげるとか、ずっとこのままでいるとか、訳の判らないこと」
「永遠――？」
レオアリスは考え込むように、膝を付いたまま口元に手を当てた。
永遠を、あげる。
長命を保つ種族は幾つか存在する。剣士もその一つだ。
だが、永遠を有するものなどない。
永遠をあげる。
誰が、どうやって？
「法術士か――。今朝のって言ってたな」
レオアリスを見た時に、あの女はそう口走った。
つまり、鞄の持ち主という事だ。
「確定だ。繋がってる」
立ち上がり、アスタロトの傍に寄ると、その手の上に水晶の欠片を置いた。

エマは荒い息を吐いて路地の壁に寄りかかった。
先ほどの場所からそう遠くはない区画だったが、路地の出口が面している通りは全く違う。
ただでさえ迷路のような下層の裏路地は、こうして離れてしまえば見つけられる心配は無い。
「全く、何だってここにまで剣士なんかがいやがるのさ、忌々しい」
そう言いながらも、身体はまだ震えていた。右の袖が二の腕の半ばで切れ、皮膚にも薄く赤い線が走り血が滴っている。
エマが作った炎の渦を切り裂いて届いた、風の刃。
ぞっとした。
離れた場所から、法術を破って――あれが、剣士の剣だ。
咄嗟に転移の法術で逃げたのは正解だった。
「それに、アスタロトだって？　まずい、まずいよ」
苛々と親指を噛みながら、薄暗い路地を行ったり来たりして呟く。
「ああ、でもあの娘（こ）、本当に欲しいわ――アスタロトだからって、手に入れられない事はないもの、びびんなくたって」
本当に、あの美しい少女は気に入った。今までも、ユンガーの人形でも見た事が無い。
「どうにか、あたしだけのものに」
『エマ……』
低い声が忍び寄り、エマはぎくりとして身を震わせ、声のした方を見回した。
上の暗がりを見上げ、ひゅっと息を飲む。
路地を囲む壁の途中に、光る眼が浮かんでいた。
「ユ、ユンガー」
眼の持ち主は、人の形をしていた。

薄暗がりにいて判りにくいが、華やかな色彩の衣装を纏った女だ。
まるで蜘蛛のように、頭を逆さまにした四つん這いの格好で壁に貼りついている。
二つの瞳がギラギラと光を帯びてエマを捉えた。
ギギ、と壁を掴んだ手足が鳴る。
鳴っているのは、彼女の関節だった。
『あの娘、気に入った』
「み、見てたのかい」
じり、と後退り、反対側の壁に背中を当てて止まった。
「まあ待ちなよ、今日はちゃんと下層の娘に水晶を渡して来たんだ。うんと綺麗な娘さ。あんたもきっと気に入るよ。今夜連れに行こう」
エマは矢継ぎ早に並べ立て、無理矢理笑みを浮かべた。
「大体、見てたんならあんたも判ったろ？　剣士がいるし、軍が動いてるよ。今夜娘を手に入れて――そしたらずらかっちまった方がいいじゃない」
ギチギチ、と音が降りてくる。
『いいや――気に入ったんだよ、彼女が』
荒い息を吐くエマの前に、女は逆さまになったまま、顔だけをぐるりと回して突き出した。
美しい顔が、目の前で笑う。
瞳には生命の光は無い。
エマの前にいるのは、人形だった。
エマはゆっくり息を吸い、吐き出した。
「――わ、判ったって」
驚くべき早さで壁を伝い、人形は屋根の向こうに消えた。

第二章　「人形師」

一

街に灯りが揺れていた。
正規軍兵士達が掲げる灯火が、路地の間を流れて行く。
寝静まった街にゆらゆらと揺れる幾つもの灯りは、日中とはまた違った、あたかも無音の祭のようだ。
「静かなもんだ。昼が賑やかだから逆にかな」
西方軍第一大隊左軍中隊の兵士は深夜の通りを見渡し、隣にいる同僚に話し掛けた。彼等は一班、十名で下層地区を巡回している途中だった。
この夜から普段よりも警備が増強され、通常は一班のみで巡回する区画を倍の二班が当たっている。結構な警戒態勢だ。
ただ、比較的のんびりした様子で、傍らの兵士も頷いた。
「そうだなぁ、特に何にも起こりそうにないぜ」
「でも今回の件、術士が関わってるって炎帝公はおっしゃってたんだろ？　実際昨日の夕方遭遇されたらしい」
「小隊長の話じゃ、女だったらしいぞ。けど女が何で女ん攫うんだ？」
「一人じゃないんだろ」
「俺見たことあるんだよな、攫われた娘」
「マジか？　どこでだよ」
「二件目がうちの近所なんだ。美人で評判だった」
「人買いじゃねぇのか？」
そんな話をしながら巡回を始めてから一刻近く、大通りを細い路地の近くに差し掛かった時、路地から物音が聞こえた。何かが軋む音だ。
「誰だ、そこにいるのは！」
一番手前にいた兵士が鋭く糾(ただ)し、手にした灯りを向けた。
丸い光の輪が差しかけられ、路地の奥で人影が揺れる。華やかな衣装の裾。
女だ。
こんな深夜に、こんな路地には相応しくない装いだ。何ともいえない奇妙な薄ら寒さを感じ、兵士達は腰の剣を抜いた。
「そこの女。手を上げてゆっくり振り向いて顔を見せろ！」
女は兵士達に背を向け路地の暗がりに立ち尽くしたまま、動く様子はない。
兵士達は眼を見交わすと、一人が用心深く近寄り、女の肩に手を掛けた。
とたんにがしゃりと音を立て、女が崩れ落ちる。
「うわっ」
「な、何だ？！」
ぎょっとして飛び退き、灯りを近付けて覗き込む。
「――こりゃ、人形だ」
「人形？　本当だ……何だ、驚かせやがって」
女――人形は路地に倒れ、無機質な横顔を覗かせている。心なしか、白い陶器の頬は微笑んでいるようだ。
「薄気味悪いな、こんな所に」
「旅芸人達が邪魔で捨ててったんじゃないか？　収穫祭もそろそろ終わりだしな」
「ほっとけ、人騒がせな。行こうぜ、朝までに外壁まで見て回らねぇと」
兵士は多少非難混じりの息を吐いて立ち上がった。
人形の倒れている路地から灯りが遠退き、再び夜の闇が落ちる。
「まあこれだけ巡回してれば事件も起きないだろう。今夜は中隊一つ出てるし、南方とかもそれぞれ出てるしなぁ」
「捕まえたのはコソ泥くらいか？　一晩で二人。そっちの方が問題だよ」
兵士達は顔を見合わせて笑い、また広い通りを歩き出した。

彼等の足音が遠退き、路地が再び静まり返った頃、倒れていた人形が軋む音を立て始めた。
両手がぐるりと回って地面に手をつき、上半身を起す。
ゆっくりと立ち上がると、初めはカタカタと手足をぎこちなく揺らし、次第に滑らかな動きに変わった。
足を踏み出し、手を差し伸べるようにして、回る。踊るように回る。
キリキリ、キリキリと微かな音が流れている。
その音に誘われるように、回る人形の向う、路地の影の中から次々と、新しい人形達が現れた。くるくると回るごとに広がる華やかな服の裾が、路地に赤い花を咲かせる。
滑らかな陶器で作られた白い面が上がり、硝子玉の美しい瞳に微かな光が宿った。
口元がぎこちなく、柔らかく笑みを刻む。
どこかで、水晶が彼女達を呼んでいる。
リン、と鈴の音が響く。路地が一層の静寂に包まれた。
水晶の呼び声を追って、夜行は通りを歩き出した。

五つの失踪事件が同一の犯人、或いは組織が起しているものだと判って、正規軍は警戒を強め、夜間は中隊が十名ごとの班に分かれて街を巡回していた。
西方軍だけではなく、他の東、南、北方軍も同様だ。
それでも翌未明、六人目の少女が攫われた。
下層の、西地区の娘だった。
現場には割れた水晶が落ちていた。

「またか」
レオアリスは握った拳をもう一方の手で包み、低く呟いた。
アーシアが頷く。
「今朝の未明の事です」
彼の説明の中での状況は、これまでと変わりないものだった。違うのは、軍が警戒をしていてなお攫われたという点で、そこが一番大きい。
もちろん、全ての道に兵士を配置する事など不可能だろう。
そうは言ってみても、正規軍の忸怩（じくじ）たる思いは状況から伝わって来た。
今正規軍は臨時の軍議を召集し、対策を検討している。アスタロトは軍議に出席している為、アーシアが代わりに伝えに来たのだ。
「それで、アスタロト様からレオアリスさんに、改めて地政院の件をお願いしたいと」
傍らに立っていたグランスレイが、確認するようにレオアリスの顔に視線を向ける。
「地政院を？」
レオアリスはグランスレイの問いに頷いた。
「夜行が旅芸人に関わりがあると想定して、一応今王都に入ってる旅芸人を調べてみようと思ってる。滞在許可書から当れるだろう。他は、水晶を扱ってる店とか――ただ、思い付き程度で確証は無いんだ。そもそも地政院に登録してなきゃ話にならないからな」
こんな事件を起こす以上、その可能性は低い。だから正規軍は、現場の調査を優先している。
「午前中は空いてただろ？　この後にでも行ってくる」
「……承知しました」
僅かに懸念の色は覗かせたものの、グランスレイは反対はせずに頷いた。

レオアリスが地政院に向い、グランスレイは自室に戻った後、暫く今回の件について思案を巡らせていた。
アスタロトからの依頼は口頭であっても、正当な依頼と変わりはなく、解決の為の協力を惜しむものではない。昨日近衛師団総将アヴァロンに報告した際も、可能な範囲で協力せよとの指示は受けている。
しかし、レオアリスが何の支障もなく動ける状況には無いのも確かだ。
まだ大将として五ヶ月しか経ってはおらず、若過ぎる事や彼が有力な後ろ盾を持たない事への――
そしてもう一つ、ごく少数ではあるが、剣士である事そのものへの――周囲の不満、懸念、軽視は少なくない。
今は足場固めの時期だと、グランスレイはそう思っている。
（――公には一度、書面での要請を依頼すべきだろうか）
二人の間では口頭で済んでも、組織としては不都合も生じる。正式な書面を以て依頼があれば、近衛師団としての組織的な対応もできる。
逆に近衛師団から正式な依頼を要請して余計な口出しと取られるのも面倒だが――暫く迷った末に筆を取ろうとした時、扉が叩かれた。
「失礼します」
声と共に、すらりとした長身の青年が扉を開けた。
金髪の中性的な面差しは氷のような印象があり、女性達にさぞ騒がれるだろう非常に整った外見をしている。ただ蒼い瞳には鋭利な知性が感じられた。
二十代前半と歳は若いながら、隊の戦術、戦略の考案と提言を担う参謀部の一等参謀官で、クライフ達と同じ中将だ。
また彼は、四大公爵家に次ぐ地位にあるヴェルナー侯爵家の次男という、比較的貴族の子息の多い近衛師団であっても、かなり珍しい出自を持っていた。
ヴェルナーはグランスレイの執務机の前に立つと、手にしていた数冊の綴りを机に置いた。
卓上に出してあった近衛師団の紋章入りの便箋を見て、形の良い眉を上げる。
正式な文書を送付する時に使用するものだ。
「急ぎの案件ですか？　改めて出直しますが」
「いや、先に聞こう」
グランスレイは首を振り、便箋を脇にどけた。ヴェルナーは軽く頷き、三冊の綴りを示す。
「布陣案を二点、それから内務に提出する申請書類のご確認を。申請を終えれば事務官の配置については、数日中に内務の承認が下りる予定です。今回の人事では各隊毎に二名のみですが、来月には正式に配置されるでしょう」
「早いな――いや、漸くか」
グランスレイはこれまでを思い出して苦笑を浮かべた。
事務官配置の要望はこれまでずっと申請し続けていたもので、一向に進展する気配が無かった。
近衛師団に関わる任免は一切を王が取り決めるが、人員定数などの諸雑の規定については内務に一定の権限がある。
要は予算との絡みだが――それはともかく、この青年が内務との折衝を担ってからの進展は早かった。
ヴェルナーが口元に皮肉めいた笑みを浮かべたのは、内務官の対応へのものだ。
「現状を仔細に説明しましたからね。状況が理解できないとは言わせませんし、理解したら付けざるを得ないでしょう。当然一隊のみの話ではなく師団全隊での人員配置になりますから、まあ二、三隊にも貸しが出来た事になります」
見た目の秀麗さとは裏腹に――いや、比例してと言うべきか、この青年は頭が切れる。
国内最高峰、王立学術院をその過程中首席のまま終え、そもそもは内務――国政の中枢を担う内政官房に進むと目されていたのはグランスレ

イも聞き及んでいた。
わざわざ軍を選んだ理由は聞かないが、グランスレイは彼の調整能力や政治的手腕を高く評価している。
レオアリスの例ではないが、ヴェルナーもまた、僅か三ヶ月前に入隊したばかりだ。
それを幹部候補として間を置かず参謀部に配置し中将に取り上げたのは、事務面での機能改革への期待が大きい。そしてそれを彼は二ヶ月で実現してみせた。
ただ、グランスレイにはもう一つ、彼を第一大隊に採り、また早急に地位を整えた意図がある。
そうした思惑は当人には不快なものだろうと思っていたが、どうやら彼自身はグランスレイの意図を理解した上で、それを面白がっている節もあった。
グランスレイはちらりと壁際に置かれた時計に目を向けた。
先ほどレオアリスが出てから、まだ半刻も経ってはいない。
「ヴェルナー中将」
退出しようとしていたヴェルナーは扉の前で振り返り、グランスレイの言葉を促すように視線を向けた。
「一つ、頼みたい事がある」

二

地政院は百を超える部署を抱える、国家機関最大の組織だ。東方公が長を務め、主に治水や土地、農業、生活面を取り仕切る。
旅芸人などが王都で滞在し公演しようとすると、まず地政院で滞在許可を得、その後財務院で営業許可を得る必要があった。
王城の東側、一階から四階まで様々な部署が入っていて、廊下はいつも人の行き来が絶えない。ただレオアリスが訪ねた時は午前中の早い時間のせいか、室内はまだ二人しか客はいなかった。
受付にいた若い地政院官はレオアリスの軍服と襟元の記章を見て驚き、中にいた上官に慌てて声をかけた。
近衛師団の将校と聞いて、奥の席から五十がらみの小太りの男がせかせかと出て来る。
「大変お待たせしました――わたくしが審査室長の」
愛想笑いを浮かべつつ腰の辺りまで頭を下げて顔を上げ、男は眼にした相手の若さに目を見張った。
ただすぐにそれが誰だかに気付くと、愛想笑いは何とも複雑な笑みに変わった。
「これはこれは……第一大隊の大将殿」
レオアリスが名乗る前に男――審査室長シャンブルは眉を上げた。
若造が、という意識がその面にあからさまに透けて見える。
「こんな雑然とした場所に、いきなり何のご用で？」
「旅芸人の滞在許可の件でお伺いしたい」
シャンブルは問われた内容を検討するように唇を湿らせ、ややあって呆れの混じった笑みを浮かべた。
「近衛師団をやめて旅芸人にでもなるおつもりですか？」
シャンブルにしてみれば、非常に気の効いた冗談を言ったのだ。
もちろん、この相手に相応しく。
ところが少し、室内は静まり返ってしまった。
シャンブルは尚も笑いながら大袈裟に肩を竦め、部下達を睨むように

見回した。
周囲の事務官達はそれとなくシャンブルの様子を伺っていたが、慌てて笑みを見せるか書類に集中している振りをして顔を伏せた。
シャンブルはここで主導権を持っているのは彼だと認められたとばかりに、満足そうに頷いた。
当然だ。
こんな、彼曰く『どこの誰とも知れない、分不相応に大将の地位に就いた』者など、本来彼が相手にする輩ではないのだ。
「まあそれはともかく、近衛師団の大将殿が、供もなく一兵卒のような真似をなさる。嘆かわしいですな。王がお知りになったら何とお思いになるか」
受付にいた客や事務官達は素知らぬ振りを装いつつ、時折興味深そうにチラチラと視線を送っている。
近衛師団大将としての地位は地政院審査長の地位より高いが、王城の事情を知っている者からすれば、第一大隊大将への風評は賛否両論併せて周知のものだった。
しんと静まり返った室内の意識が二人に集中していて、彼等が何を注視しているのか、シャンブルは、またレオアリスも良く判っていた。
その上に立った会話だ。
「今回は師団というより――」
「ああ、しかし陛下のお気に召す為にはどんな事も必要ですかな。大将になるほどですから、相当色々と気を遣ったでしょう」
レオアリスは一度口を閉ざし、ゆっくり息を吐き出した。
この位の反応は、この二年の内にだいぶ慣れてきていた。慣れたからと言って腹が立たない訳でもないが、一々気にしていたら始まらない。
「こちらに伝わっているかは判りませんが、現在王都で起きている事件についての調査に情報が必要です。今回の収穫祭で王都へ入った旅芸人への許認可関係の資料を拝見したい」
「また性急な……通常はまず書面で申請を頂くものですよ。こちらにも色々手順というものがありましてね、出せといきなり言われてはいどうぞと、こうは行かない。まあ貴方はまだまだこの王都の習慣には馴染まれないようだから仕方がない。慣れ親しんだ辺境とは大分考え方も違うでしょう」
シャンブルにしてみれば、貴族や富裕層の出身ではない、いわゆる有力な後ろ楯のないレオアリスは、別に自分の出世を左右する訳ではい。
それは王都の、特に特権意識を持った官僚達の中では重要な基準だった。
「まあいずれは貴方でも王都に馴染まれるのでしょうが、なかなか貴方を理解するのは我々には難しい事でして」
そう言ってからシャンブルは失念していたと言わんばかりに、わざとらしく額に手を当てた。
「いや、これは失礼致しました。そもそも貴方の暮らしてきた環境からして我々とは違ったのでしたな」
室内はまた息を潜めて成り行きを見つめている。
シャンブルは少し顎を引き、口元を引き結んだレオアリスの顔を上目遣いに覗き込んだ。
「辺境の、何と申されたか……胡乱（うろん）な者達の中で育たれたのでは、根本的な常識からして違いますね。それを無理に我々に合わせて頂くのも酷な要求でした」
その言葉に、それまで冷静を保っていたレオアリスの瞳に怒りが宿った。
一瞬頭を過ったのは、自分を育ててくれた祖父達の穏やかな顔だ。一年の半分を深い雪に覆われる北の辺境。
決して楽に生きていける土地ではない。
「近衛第一大隊の隊士達も苦労の多い事ですな、大将殿。まずは辺境の小村の風習を理解しなくてはいけない」
ここで感情を表すべきではないと、そう思いながらも怒りを抑え切れず、レオアリスは拳を握り締めてシャンブルを睨み付けた。
「――何の理由があって、俺の」

「上将」
涼しげな声が少し離れた場所から掛かった。
レオアリスの怒りを逸らすのに充分な落ち着いた響きだ。
「遅れて申し訳ございません、他の件で手間取っておりまして」
レオアリスは振り返って、入口に立っている長身の青年を認め、瞳を見開いた。
「ロ――、ヴェルナー中将」
レオアリスの声に少し驚いた色が含まれたのは、この参謀官が来る予定は無かったからだ。
だがヴェルナーという名を聞いて慌てたのはシャンブルの方で、周囲にいた事務官達もさっと緊張を高めた。
ヴェルナー侯爵家は十ある侯爵家の筆頭であり、当主ヴェルナー侯爵は内政官房副長官を務めている。
ヴェルナーは穏やかな笑みを刷き、しんと静まり返った部屋をレオアリスへと歩み寄った。
上官へと丁寧に一礼してから、シャンブルへ面を向ける。
浮かべた柔らかい笑みとは裏腹の、蒼い瞳の底にある冷えた光に、シャンブルはたじろいで一歩下がった。
「もう既に審査室長殿は幾つか情報をくださったのでしょうね。多忙な地政院官がまさか無駄話に興じる訳もない。どのようなお話を？」
「い、いえ、まだ」
シャンブルは曖昧に首を振ったが、ヴェルナーは穏やかさはそのままに、重ねて問いかけた。
「そうですか？　しかし別室ではなく、この場で簡潔に済む程度のご回答だったのでは？」
何故、近衛師団大将をこの場に立たせたままでいるのかと、柔らかな、だが辛辣な問いだ。
シャンブルが何を基準にしているのか、ヴェルナーは良く理解していて、彼が『好む』言葉を散りばめた。
「今回はアスタロト公から直接依頼を受けた急ぎの案件でもあり、元々我が大将は簡潔を好まれる。貴方もそれはご理解頂いての事のようですが、肝心の情報がまだとは困りましたね」
「それは、その」
「当然、得た情報については全て、事務的ではあれ陛下にもご報告しなくてはいけません。管轄外の為に手続きに手間取って情報が間に合わなかった、とは、さすがに我々も報告する訳にはいかない」
「も、申し訳ございません！」
シャンブルはすっかり青ざめて恐縮しきり、先程までレオアリスに向けていた態度はもう影を潜めていた。
「今、別室に」
もつれるような口調で斜め前に座っていた事務官に別室の用意を告げ、事務官も慌てて立ち上がった。

別室に案内され、シャンブル達が資料を取りに出ていくと、レオアリスは息を吐き、切り替えるように苦い笑みを浮かべて参謀官を振り返った。
「丁度いい所に来てくれた。あのままだったら確実に喧嘩売ってたな」
そうなれば格好の話の種を提供していた所だ。
今日の夕方には王城中で話題になっていたに違いない。
こんな所で怒りを露（あらわ）にしても、単に自分の立場を更に悪くするだけでしかない。
「お前の物言い聞いてたら頭が冷えた。全く、一々腹を立てても仕方ないのにな」
「当然、腹を立てる権利はありますよ。まあしかし堪えて頂いたのも正しい選択です」
「いや、ギリギリだったけど」

まだまだガキだな、と年齢不相応の事を言って、レオアリスは反省の籠もった溜息を落とした。
ヴェルナーが可笑しそうな顔をしたのに気付き、改めて彼を見上げる。
「にしてもロットバルト、お前この為にわざわざ来たのか？」
ロットバルト、と呼ばれてヴェルナーは笑った。
任務中は姓に職位を付けて呼ぶのが通常だが、レオアリスが当たり前のように名で呼ぶ為に、今は他の中将達もそれに倣うようになっていた。
グランスレイも時折、姓ではなく名を口にする。
お陰で本来あるはずの筆頭侯爵家という近寄りがたさが薄れている。
「副将が心配されていますよ」
「お目付け役かよ」
「そんな所ですね。そもそも調査など、私にお命じになればいいものを」
ヴェルナー、――ロットバルトはそう言いながらも、もう一度笑った。
レオアリスは命じるよりも自分で行動する質だ。
グランスレイは時折それを嘆くが、実際にはレオアリスの気質を良く判っていて、苦言は呈するものの半ば諦めている。
「人を動かす事も大将の責務ですよ」
さすがに反論は無いらしく、レオアリスは視線を逸らせた。
シャンブルが戻って来るには暫く間があったが、それもそのはずで、三人ほどで十数冊もの綴りを抱えてきた。
「ご指定の、ここ三ヶ月ほどの滞在許可案件です」
目の前に積み上げられた書類の山を見て、レオアリスが思わずうんざりと息を吐く。
「この資料の中から探すのか……思ったより大仕事だな」
王都で商業権を得ている者は百を下らない。そして、次々入れ替わる。それがこの山だ。
ロットバルトも苦笑を浮かべながら山の一番上の綴りをぱらりと捲り、再びレオアリスへ視線を戻した。
「ですが視点は間違っていません。要はどこに比重を置いて調べるかですが――何か手掛かりとなる情報はお持ちですか？」
「明確なものが今一つ無い。夜行って形態が、今やってる旅芸人達のそれに近いってだけで――それ以外は水晶か。どこで手に入れたか判ればいいんだが、攫われた娘達の家族もそれは知らないと言ってるそうだ。ただ、全員収穫祭に行ってる」
「収穫祭ですか。下層全域、範囲が広すぎますね」
「そこだけじゃ絞り込めない」
この資料の山と同じ事だ。
「昨夕の件では？　接触したと伺いましたが」
レオアリスは腕を組んで壁に寄りかかった。
「術士ってのはほぼ確実だ。水晶も持ってたし、事件に関わると見て間違いないだろう」
「会話を？」
「アスタロトが直接話してるんだが――」
相手が妙に迫って来て、そればかり印象に残ってしまったようだ。
「て言っても女だったけどなぁ。わざとか？　捜査撹乱の為とか」
「単なる個人の嗜好でしょう」
ロットバルトはさらりと言った後、瞳を細めた。
「という事は、対象を嗜好で選んでいる場合も考えられますね。少しは手掛かりになる」
「嗜好がか？　とは言っても」
「これまで攫われた娘達の特徴に共通点があるかもしれません。そこから警戒すべき範囲をある程度予測できます」
「ああ、そうか」
それについて話が出た事はなかったが、もし少女達に共通点があれば、ロットバルトの言うとおりある程度絞り込んだ警備ができ、次の事件を防げる確率も上がる。

一歩前進しそうな気配に、レオアリスは寄りかかっていた壁から身を起こした。
「それは正規軍に伝えよう。――それと、女はユンガーって名前を口にしたようだ。正直にその名前で登録してるかどうか、可能性は低いけどな」
レオアリスは卓に近付くと綴りを取り上げ、表紙を右手の甲で軽く叩いてみせ、それを開いた。
「ユンガー？」
何か思い当たる節があるのか、ロットバルトはその名を繰り返した。
「まさか、知ってるのか？」
綴りに落としかけた瞳を上げて、レオアリスは驚いた様子でロットバルトを見つめた。
「いえ。ただユンガーとは、人形師を意味する言葉です。操り人形を古語でユングフラウというところから来ている呼称ですね。これと同様に、操り人形使いはユンガロと呼ばれます」
「ユンガー……人形師」
その言葉は意識に引っ掛かった。
永遠をあげる、と。
ずっと美しいままを保ちたいだろうと、そう聞いた。
明確ではない、ただ奇妙な薄ら寒さを感じ、レオアリスはもう一度それを繰り返した。
「人形師か」
漆黒の瞳に、それまでとは違った光が浮かぶ。
それはほんの少し、見る者を慄然とさせ、そして引き込むような光だ。
レオアリスの様子を見て、ロットバルトは後ろで控えていたシャンブルを振り返った。
「何人かでこの資料を、人形師或いは人形使いを中心に当たってもらえますか。名前は違っても構いません。それと西方のホーンハルト地域の地図があればそれを」
シャンブルが頷き、地政官の一人が素早く出ていくと、長い筒状に丸めた地図を持って戻る。
他にまた三人ほど事務官がやってきて、早速綴りを捲り始めた。
ロットバルトは受け取った地図を紐解いて卓上に広げ、一点を示した。
指先が示した場所は、ホーンハルト地域にある比較的大きな街だ。
「そこは？」
「人形作りを副産業としている街です」
「王都からは馬で半月ぐらいか、結構遠いな。副産業？」
副産業というのは少し中途半端に感じられる。
「人形作り自体が主産業にするには厳しいものですからね。ここで人形作りが盛んになったのは、この地域一体の主産業として繊維業があり、また周辺の土地から陶器の為の良質の土が得られる為です。この街の主産業は縫製ですが、西の基幹街道沿いの立地と流通の良さから、腕のいい人形師達が集まるようになりました」
「なるほど――もし人形師となると、その地域の出身者である可能性が高いって訳だな」
それにしてもさすが王立学術院首席、良くこれだけすらすらと情報を引き出して来るものだと、レオアリスは改めて感心した。
「現段階で複数の方向から絞り込めますね。まずは失踪者の特徴。名前、人形作りに関わるもの――素材、生地、それらの仕入れ先。そして出身地」
レオアリスは頷くと、卓の周囲で綴りを繰っている事務官達の傍に寄り、長椅子の背に手をついて彼等の顔を見回した。
「書類からは出身地も拾えるのか？」
「探せます。出身地の記載欄もありますし、登録の際は各都市の領事館発行の証明書の添付が義務ですから、そうそう偽りはできません」
彼等の回答にレオアリスは瞳を煌めかせた。
「よし、まずはそれを引っ張り出そう」
レオアリスは綴りを一冊手に取り、長椅子に腰かけた。

一刻ほどで三種類、それぞれ十数件の一覧が出来上がった。
人形に関わる旅芸人のもの、水晶などを扱う店、それから繊維や衣類を扱う店。
どれも王都内の場所は散っていて確たる決め手は無いが、ひとまずの手がかりとしては上々だろう。
これだけ早く抜き出せたのは事務官達の力が大きい。
「手伝ってもらえたお陰でかなり早く終わった。有難う」
向けられた軽やかな笑顔に、地政官達も自然と笑みを返す。
「いえ、お役に立てて良かった」
「また何か必要あれば寄ってください」
そう言ってから、その場にシャンブルがいた事に気付き慌てて上司を盗み見て、ほっと息を吐く。
シャンブルはロットバルトと話をしていて、部下達の様子には気付いていない。ロットバルトはと言えば、あくまで卒なくシャンブルと相対している。
「これほど早く手掛かりを得られるとは、さすがに地政院は情報管理が行き届いていますね」
もの柔らかな口調と笑みに、シャンブルは舞い上がった。何と言っても相手はあのヴェルナー侯爵家の子息、揉み手をして擦り寄らんばかりだ。
「滅相もございません、多少なりともお役に立てて光栄です」
「上将が地政院を調べると仰った時は、膨大な資料の中から情報を得るのは難しいとも思いましたが」
「いや、さすが若くして大将に就かれるだけはあります、我々も日々の仕事の価値を再認識させていただきました」
地政官達は互いに呆れた笑みを浮かべて顔を見合わせ、それからレオアリスににやりと笑ってみせた。

権力志向にある上司が部下から煙たがられるのは、いつの世も変わらないようだ。
作り上げた書類を整えてレオアリスに差し出す。
「これから捜し出せるといいんですが」
「きっと役に立つ。有難う」

地政院を出て王城の廊下を歩きながら、レオアリスはもう一度そこに並んだ店や該当者の名前にざっと目を通した。
「行き当たる可能性はあると思うか？」
言葉にしてはまだ疑問を含んでいるが、そう言いつつも、かなり近付く事はできると、そういう予感はある。
レオアリスの瞳に、このまますぐにでも一覧に載っている先へ向かいそうな光が踊るのを認め、ロットバルトは口元に苦笑を昇らせた。
「高いとは思いますよ。後は情報を正規軍に渡し、彼等が捜索する中で早ければ数日中に進展があるでしょう」
肯定してはみせたが、あくまで正規軍に任せる話だ、と釘を刺している。
さすがにこれ以上は、近衛師団が口を挟むべきではない。王の下命がない限り。
レオアリスは面にちらりと残念そうな色を覗かせたものの、すぐ仕方なさそうに頷いた。
「判ってる。これはこの足でアスタロトに渡そう」
そう言って王城の南棟に足を向ける。アスタロトが執務室にいるはずだ。
「ただ、いずれにせよ」
ロットバルトが瞳を細める。声には慎重な響きが混じり、レオアリスは瞳を上げた。

蒼い瞳と視線が重なる。
「彼等が王都にいるのは、そう長くないでしょう。祝祭に乗じているとすれば、この祝祭が終わるまで――あと三日」
地政院で得た情報がどれだけ生きるか、それとも的外れか。
どちらにしても、祝祭が幕を閉じる三日の内に捕らえなければ、うやむやのままに終わる事も考えられる。
「三日か」
短いな、とレオアリスは口の中で呟き、足を早めた。

三

アスタロトから一報が入ったのは、二日後の昼だった。
空を厚い灰色の雲が覆って薄暗く、今にも降り出しそうだ。
士官棟の中庭を吹き抜ける風も窓硝子を揺らすほど強い。
「西方の右軍が動くそうです」
グランスレイの言葉にレオアリスは鋭く瞳を上げ、差し出された書状を手に取った。
室内もまた暗く翳り、執務机の上には硝子の覆いの中で燭蝋の灯りが揺れている。
書状には地政院の情報に対する改めての感謝と、情報から絞り込んだ西のマレル地区の一角に今日の午後四刻に立ち入る事が記されていた。
もう三刻後の話だ。
「マレル」
三日前の晩、アスタロトが女に遭遇した地域だった。
予想以上に、あの時犯人達との距離は近かったのだ。
「動くのは右軍か」
「右軍中将のヒューイットは街中の展開に実績があります。しかし右軍の内、小隊一つ、百名のみですか……小規模ですな」
「まあ街中だからな。多くても動きにくいし、気取られる。百でも多いくらいだ。けど、相手の正体が見えないのが気になるのと」
あの路地で感じた視線。無機質で、気配が掴みにくかった。
そこが明確に表せず、レオアリスは首を振った。
「それに、法術士がいる。正規の法術士団は――とわあ？！」
二枚目をめくって、レオアリスは思わず妙な声を上げた。
それから額に手を当てて呻く。
「何考えてんだろう……あのバ、いや、あいつ……」
「上将？」
グランスレイが何事かと驚いて執務机に近寄る。
「自分で出るって」

「……公が、ですか」
グランスレイの声の響きも複雑だ。
椅子の背もたれに寄りかかり、レオアリスは溜息をついた。その代わり色々言葉を飲み込んだようだ。
溜息に同調するように、カタカタと窓が揺れる。
「そう言ってる」
呆れを隠しきれない様子のままレオアリスは書状をグランスレイへ戻した。
「総大将がいきなり出てどうするんだ。正規軍将軍って自覚が足りないんじゃないか？」
ひとの事は言えないのでは、という言葉をグランスレイは飲み込んだ。

「他人（ひと）の事は言えないでしょう、貴方は」
ロットバルトがあっさりと口にして、レオアリスは眉をしかめた。
士官棟から出た瞬間強い風が髪を巻き上げ、翳って灰色っぽく映る通りの舗装の上に、肩から纏った黒い長布をはためかせる。
「俺はそこまで無軌道じゃないだろ。第一アスタロトは正規軍の総大将だぜ」
「そうですか？」
返って来たのはそれだけだ。
「――まあ、アスタロトの意気込みは判る。俺の所にまで珍しく仕事の話をしに来た位だからな」
それに一昨日の祝祭での件もあって、自分が、という思いが強まってもいるのだろう。
確かに、アスタロトが出た方が早い解決に結びつく場合もある。
ただあくまで、広域の戦闘領域を確保しての話だ。
「街中は駄目だろう、被害が恐い」
「その気持ちは良く判りますよ」
充分、含みのある言葉だった。
何を含んでいるかと言えば、例えば訓練中、レオアリスがたまに剣を抜いた時などに、勢い余って演習場を壊したり――
「――何だ」
「いえ」
レオアリスの物言いたげな視線をさらりと躱し、ロットバルトは陰ってきた空を見上げた。
今はあと四半刻で予定の四刻になる頃合いだ。
「そろそろですね」
ちょうどその言葉を合図のように、ポツリ、と大粒の雫が足元の舗装に落ちた。すぐに雨音が石畳や街路樹の葉を強い音で叩き始める。
「降って来たな……面倒な雨になりそうだ」
雨足はあっという間に激しくなり、通りに薄い雨の幕を張った。
「外套を用意させましょう」
「いいよ。どうせ濡れる」
そう言ったもののロットバルトは士官棟の中に引き返し、レオアリスも玄関の庇の下に戻った。
見上げる空は不穏なほどに暗い。
激しく音を鳴らす雨に、アスタロトの炎でさえ掻き消されそうだと、ふとそんな事が頭に浮かぶ。
「――」
遠くで、雷鳴が響いた。

四

夜のように暗く閉ざされた空を何度となく稲妻が切り裂き、雷鳴が響いていた。
激しい雨が容赦なく身体を濡らしていく。
革鎧の胸当てや手甲、腰に佩びた剣の先からも、雫が滴り落ちる。
そのくせ、空気は妙に蒸し暑かった。革製の軽装とは言え、鎧の下に汗が滲む。
「あの建物だ、予定通り動け。一班は突入の準備をしろ。二班は廊下、三班は階段下で待機、残りは建物を囲む」
正規軍西方第一大隊中隊右軍中将ヒューイットは雨の幕の中で、雨音に掻き消されない程度に声を抑えて指示を出していく。張り詰めた空気の中、兵士達は整然と動いた。
目標はこのマレル地区の外れ、旧倉庫街と住宅街の境目に建つ古い建物だった。
この先を奥へ入って行くと、倉庫街に沿って運河がある。船が川を上下する為の堰が設けられているが、この雨が続けば堰を開けるだろう。
その運河やマレル大通りから離れているこの辺りは、以前は荷役関係者の一時宿泊施設が並んでいた。
しかし倉庫が使われなくなったせいもあり、今は打ち棄てられている。
目標の建物もそうした一時宿泊施設で、現在地政院への登録上では無人のはずだった。
「公、準備は整いました」
ヒューイットは路地を振り返り、右腕を鋭く胸に当てて敬礼を捧げた。
その面にはこれから行う任務へ向けたもの以上の、緊張の色がある。
それもそのはずだ。正規軍将軍――炎帝公わざわさのお出ましなのだ。
路地に佇んでいたアスタロトはヒューイットの視線を受けて頷いた。
兵士が差し掛けていた傘を手で軽く押して断り、激しい雨の中を数歩進み出る。
レオアリスが地政院から得た情報を元に丸二日、徹底的に聞き込みを行い、この建物に辿り着いた。
ユンガーという名前では辿れなかったが、もう一つの方面では反応があった。仕入れ面からだ。
ここ最近上質の布の買い付けが多く、しかも毎日違う布を届けさせる客がいる、と。
その割には届け先はこんな裏寂れた旧倉庫街で、建物に住んでいるのはその購入主のみのようだと、布を売った店の者も気味悪がっていたという。
『部屋はいつも鎧戸を閉めてて暗くて……それに、何だか気味の悪いほど精巧な人形があって――』
その言葉が決め手だ。
ただ、人形師と術士。
水晶と、攫われた少女達との関連は不明なままで、ともすれば余り趣味の良くない想像に辿り着く。
「人形師か――自分の人形だけ愛でてろってのの」
呟いて、アスタロトは黒い艶やかな髪が濡れるのも構わず、建物を睨んだ。
ヒューイットが片手を上げる。兵士達が雨の中を、素早く動き出す。
「建物の出口は全て押さえろ。出て来る者がいたら無関係に見えても留めおけ」
最初の一班が人気の無い建物の玄関を潜り、中庭に視線を走らせる。
四角く覗き込んでくるような壁と、そこの窓には人の気配は無い。
先頭に立つ少将のブレンが手を上げて合図すると、続いて二、三班も中庭に入った。開け放した玄関の向こうで、残りの兵士達が展開していく。

彼等は建物を囲み、ブレン達が対象を発見したら、呼び笛を鳴らして合図する手筈になっていた。
一回であれば『標的を発見』、二回で『交戦』、三回鳴らした時は『少女達の発見』だ。
「行くぞ、二階の一番端だ」
建物内へ入る扉は、中庭を挟んで今潜ってきた建物玄関の正面にあった。
ブレン達は雨の降りしきる中庭から雨音が壁面を叩く棟内へと入り、すぐそこにある古びた鉄製の螺旋階段を見上げた。
建物自体がしんと息を潜めたように静まり返っている。
兵士達は足音を抑え、螺旋階段を駆け上がった。

建物のすぐ横を流れる運河は、次第に水嵩を増し始めた。鍋に豆を流し入れるような水面を叩く雨音が、室内にまで響いている。
ユンガーは二人の女に両側から支えられて身を凭れ、雨音を聞くように閉じていた瞳を上げた。
「おいで」
低い呟きと手招きに、正面に居た別の女が歩み寄る。キリキリと微かな音が流れる。女は、精巧な、人形だ。
ユンガーを支える二人の女も、やはり精巧で美しい人形だった。
彼の人形がどのように動いているのか、人形はユンガーの顔に、自らの陶器の顔を近付けた。
ユンガーがその瞳を覗き込む。その奥に映るものを。
唇が笑みの形に歪んだ。
「彼女がいるな。自分から来てくれるとは、なんと嬉しい事だ」
人形の瞳の中に、雨に濡れそぼる建物と路地が映っている。

正規軍の兵士達と、その中にあって一際目立つ少女。
すぐ近くにいる事を思い、ユンガーは痩けた頬に愉悦の笑みを浮かべた。
「エマ」
ユンガーが囁くと、正面の人形の唇も同じ形に開いた。

『エマ』
目の前に居た人形の唇が動き、エマは忌々しさと恐れを含んだ瞳を向けた。
エマの髪や顎からも、雨の雫がひっきりなしに伝って落ちている。
『彼女を傷付けず、連れて来るんだ。髪の毛一筋もだ』
「――判ってるよ」
エマは少しぶっきらぼうに答えて下を見下ろした。
雨で煙る中にも正規軍兵士の動きは見て取れる。エマのお気に入りの少女も先ほどちらりと姿が見えた。
「でも炎帝公だ、傷付けずったって」
『戦えとは言っていない。そもそも私の人形と戦うのは、炎帝公と言えど難しいだろう』
どうかしら、と言う言葉をエマは飲み込んだ。
自意識過剰な物言いにも思えたが、実際にはエマは、彼の人形を恐れてもいたからだ。
下にいる人数程度なら、今いる十体の人形で十分抑えられる。
「それより」
『判っている。ちゃんと君の取り分もある』
「――約束だよ。できれば生きてる内がいいわ」
エマはうっとりと笑みを浮かべ、雨を滴らせて立ち上がった。

一班を率いて二階へ上がったブレンは、廊下奥の扉の前で、兵士を扉の左右に潜ませた。二、三班もまた、廊下と階段下に待機する。
正面に立った兵士が扉を叩く。耳を澄ましても、中からの返事は無い。
「開けろ」
ブレンの指示に、兵士は躊躇わず扉を蹴り開けた。
内側に弾け飛んだ扉を追って飛び込もうとした瞬間――目の前に立つ人影に気付き、兵士は思わず後退った。
「！」
剣の柄に手を掛け、一呼吸の後、再び――慎重に、扉に近付く。
華やかな服を纏った髪の長い女が、扉のすぐそこでうな垂れ、立っている。
両手をだらりと垂らし、灯りの無い暗い室内に浮かび上がるような姿は、ひどく気味が悪い。
「どうした？」
「誰かいるのか！？」
「い、いえ」
踏み込むのを躊躇っている兵士の肩を押さえ、背後にいたブレンが室内を覗き込む。
「女？」
「お前、ここの――」
眉を顰めつつもブレンは女に話しかけ、それから訝しんで俯いた顔を覗き、呆れと驚きの入り交じったように唸った。
「人形だ――」
拍子抜けして、兵士の一人が剣の先で人形の頭をつつく。ぐらり、と倒れかかり、慌てて手を伸ばして支えた。
「はぁ……気味悪いな。例の人形師って奴の持ち物か？」
兵士達は立ちはだかるような人形を避けて暗い室内に入った。人の気配は無い。
「灯りを」
ブレンの指示で、素早く角灯に火を入れる。
角灯を受け取り、箱状の硝子から零れるぼんやりとした光を部屋の中にかざして、一瞬ブレンは凍り付いた。
女の顔が、闇から突き出すように彼に向けられていた。
見開かれた硝子玉の瞳が、角灯の灯りをちらちらと映している。
浮かべた、硬質な笑み。
「……っ、何なんだ、全く」
腹立ち混じりの息を吐き、角灯を再びかざす。
他にも火が灯り、兵士達は浮かび上がった室内の様子を見て取った。
「うわぁ、何だこりゃあ」
数名が恐る恐る近寄り、そこにあったものを検分して唸る。
「人形です――全部」
室内のあちこちに、等身大の人形が立っていた。
手足は差し伸べられたり曲げられたり、思い思いの格好で静止し、まるで今まで踊ってでもいたかのようだ。
「全部女か……着飾った美人ばっかでも、こうも並んでたら気持ち悪いな」
「人形師ってのは、日がな一日こんなモンを眺めてんのかね」
「それでも人形だけじゃ飽き足らず、ってとこですか」
「かもしれん――。人形師はどこだ？」
見回した一人が、右手の壁に近寄った。そこに扉がある。
「こっちに部屋があります。――こりゃあ作業場だな……布やら服やら、やたら積んである。うわ、こっちも人形かよ」
「失踪者の物がないか探せ。二、三班には他の部屋や階もくまなく探すよう伝えろ」
「はっ」
悪趣味な室内の様子にうんざりしつつ、二名の兵士が布の山を仕分け始めた。

残った者達は、気味悪そうに、ただ興味を惹かれた様子で、この精巧な人形をためつすがめつ眺めている。
「全く」
ブレンもうんざりと息を吐き、壁に並んだ人形達を眺めた。
「無駄足か？」
失踪者に関するものが何も出なければ、見当違いに隊を動かした事になる。
「扉まで壊しといて……」
そう呟きかけて、ふとブレンは気が付いた。
先ほど蹴り開けた扉は、真っ直ぐ室内に弾け飛んだはずだ。
それなのに、あの人形は扉の正面に立っていた――
他の六体もの人形達も、室内に転がった扉に当って倒れる事もなく。
唐突に、嫌な予感が背中を這い上がる。
「……離れ――」
振り返りかけたブレンの声に、兵士の悲鳴が重なった。
扉の前にいた人形の両手がバネが弾けたように動き、覗き込んでいた兵士の首を掴んだ。
ごきん、と音がして、兵士は糸の切れた人形のごとく床に倒れた。
まるで彼の命を吸い取って生命を得たかのように、人形がゆるゆると身体を揺らす。
「し、少将！　こいつら」
慌てて剣を抜き放った兵士達は、まだ何が起ったか理解できないままに、そこにいた人形達が動き出すのを呆然と見つめた。

雨の音を貫き、甲高い呼び笛（こ）が鳴り響く。
アスタロトは深紅の瞳を二階の窓に向けた。
笛は一度止み、再び、高い音を発する。

交戦の合図だ。
だが二度目の笛の音（ね）は、長くは響かず、ぷつりと途絶えた。

五

交戦を告げる二度目の呼び笛の音が、唐突に途絶えた。
一瞬、続く音を待つように兵士達は息を潜め、雨の向こうに耳を傾けた。
「公」
ヒューイットの視線に、アスタロトが頷く。ヒューイットは停滞無く動いた。
「四、五班は内部で一班等と合流、状況確認と報告、その後一度中庭に退け！　展開している六班以下にも臨戦態勢を取るよう伝えろ！」
兵士達が素早く玄関を潜っていく。
ヒューイットの視界の端で、アスタロトの黒髪が揺れる。
アスタロトが建物の玄関へ歩いていくのを見て、ヒューイットは慌てて彼女の行く手を遮るように前へ出た。
「炎帝公？　どちらに」
「中で接敵だろ。私が行く」
「しかし」
「術士には貸しがあるしねー」
軽やかな、ただ余り笑えない口調でそう言って、アスタロトはヒューイットの肩を軽く押し、開け放たれたままの建物の玄関を潜った。
「公！」
玄関を抜けるとすぐ中庭だ。四、五班は既に棟内に入り、雨の降りそぼる中庭は無人になっている。
中庭を横切っていくアスタロトを、ヒューイットと六班を構成する兵士達が追う。
「公、合流して出て来るまで一旦お待ちを」
「出て来れる？　剣の音も、何も聞こえない。さっきも聞こえなかったな」
はっとしてヒューイットは建物を降り仰いだ。
確かに、交戦の合図は響いたが、剣戟の音は聞こえていない。
つい先ほど四、五班を踏み込ませたはずなのに、今も物音一つしなかった。
ヒューイットの顔にも、懸念と――不安が滲んでいる。静まり返った建物からは、音は何一つ聞こえて来ない。
悲鳴すら。
「おかしい……中で何が」
「退かせた方がいい、早く」
アスタロトが棟内への扉へ近付く為に一歩踏み出した時、突然、四方の窓硝子が一斉に割れた。
雨と共に、硝子の欠片と――、幾つもの黒い塊が降り注ぐ。塊は重く湿った音を立てて地面に落ちた。
ヒューイット達はアスタロトを囲み、背を合わせるようにして中庭中央に寄ると、剣を抜き放った。
「――くそ」
ヒューイットが呻く。
落ちてきたのは兵士だ。
いや、兵士達の身体の一部と言うべきか。
腕や脚、胴体、首――
四方の窓から投げ出された兵士達は、雨に打たれる路傍の石くれのように、アスタロト達の周囲にみな無言で転がっていた。
すっぱりと鋭い刃で断たれたような断面、それ以外は外傷が無いように見える。
それが示すもの――抵抗の痕跡が無い。
「こんな……」
検分の為に屈み込もうとした兵士を、ヒューイットの厳しい声が制止した。
「よせ。囲まれている」
その言葉に答えるように、クスクスと忍び笑いが響いた。
建物が笑いさざめいていると感じたのは、激しい雨にくぐもっている

せいと、中庭を囲む全ての窓から笑い声が流れているせいだった。
低い、忍びやかな、愉悦を含んだ幾つもの笑い声。
けれど笑っているのはたった一人だと判る。
一人の笑い声が輪唱のように流れ、中庭にいるアスタロト達の周囲を渦巻いていた。
「姿を見せろ！」
割れた窓辺に影が揺れる。
顔を見せたのは、白い面の、華やかな衣装を纏った女だ。
一人ではない。複数の女達が中庭を見下ろして笑っている。羽の付いた帽子に飾られた鈴がチリチリと鳴った。
「……十二名です。二階に七名、三階に五名」
兵士の一人が素早く告げると、ヒューイットは頷いて一歩前へ出た。
「何者だ！　貴様が人形使いとやらか？！」
ヒューイットは窓をぐるりと見渡し、再び声を張り上げた。
「ここは完全に包囲した！　攫った娘を返し、おとなしく投降せよ！」
笑い声がふと途切れ、代わりに左手の窓の一角に人影が揺れた。身構えたヒューイット達の目に映ったのは、男の上半身だ。
窓から乗り出すように上半身を突き出し、それからふわりと宙に浮いた。
中庭の兵士達が或いは込み上げる吐き気をこらえ、或いは怒りに歯を軋らせる。
それは建物に入った兵を率いていた、少将ブレンだった。
上半身だけ――胴から上だけの姿で窓の外に浮いている。
ゆっくり、まるで操り人形を動かすような動作で、上半身は中庭に下り始めた。
あまりの光景に半ば呆然とする兵士達の前で、今出てきた窓から慌てたように、何かが飛び出す。
下半身だ。
忘れていたと言わんばかりに、滑稽な仕草で足を動かし上半身を追った。

「――ふざけやがって」
怒りを含んで吐き捨て、ヒューイットはアスタロトを振り返った。
「公はお退りを。建物の外へお戻りください」
「バカ言うなっ！　お前達こそどいてろ、ヒューイット」
アスタロトの深紅の瞳にも激しい怒りが踊っている。
「私が行く」
「公！」
アスタロト達の様子を嘲笑うかのように、雨音に混じって低い男の声が流れた。
『私の趣向は気に入ってくれたかな？　君達が私を人形使いと呼んだのでね、少し彼等の真似をしてみた。彼等ほど上手くはないが』
声は正面の二階の窓から聞こえて来る。そこの窓から覗いている美しい女の口から、低い男の声が流れていた。
人形の口を通しているせいか、声は平坦で無機質だ。
だがそこに含まれた嘲りの響きははっきりと聞き取れた。
「卑怯者め、姿を」
怒鳴り付けようとしたヒューイットを、今度はアスタロトが止める。
アスタロトは人形を通してユンガーと正面から向かい合った。
「人形師だな！？　最低な出迎えしやがって」
ユンガーは人形の瞳が映すアスタロトの姿を眺め、愉悦の笑みを洩らした。
『いかにも――炎帝公、君を待っていた。早く君をこの眼で直接見たいものだ』
「中の兵士達はどうした」
『さあ――、彼女達が知っている』
アスタロトの周囲だけが、陽炎のように揺らめいた。
発する熱が降りしきる雨をそこだけ蒸発させ、放たれる熱にヒューイット達が僅かに退く。
「どこにいる。お望みどおり、お前の目の前に行って全部焼き尽くして

やる」
ユンガーは答えず、代わりに女の声が降った。
「自分から来てくれるなんて嬉しい限りねぇ、お嬢さん」
中庭を囲む建物の屋根の上に、人影が立ち上がる。アスタロトには見覚えのある顔だ。
「お前、この前の」
エマはどことなくうんざりした顔で、ユンガーの作り出した見せ物と中庭の兵士達を見渡し、アスタロトに瞳を据えた。
「ねぇお嬢さん。こんな悪趣味なこと、あんたが来れば終わるよ。ユンガーもあんたにはこんなひどいことしやしない」
エマの口調は宥めるように、いっそ同情的ですらある。
「ユンガーはあんたが欲しいんだから」
「――何言ってんの？」
不可解そうに睨み付けてくるアスタロトの深紅の瞳を受けて、エマは口の端を吊り上げた。
「人形作りの為にね。あんたなら最高の人形が作れるって」
アスタロトはその言葉の意味を飲み込み、拳を握り締めた。
「……今まで、娘達を攫ってたのは、人形作りの為か」
「そうよ。ユンガーの作る人形は、まるで生きてるみたいに美しいと評判だ。生きてるみたいにねぇ」
うっとりと響いたエマの含み笑いに、兵士の声が重なる。
「この野郎ッ！」
背負っていた弓を手に取り、矢を番(つが)えた。
弦が矢を放った瞬間、エマの手元から炎の筋が走る。炎は飛来する矢を一瞬で焼き、火勢を弱めずに更に兵士へ迫った。
アスタロトが兵士の前に手を伸ばし、炎を掌で受け止める。
炎は一度渦巻き、アスタロトの掌の中で小さな種火になった。
ぐっと握り締めると、そのまま炎は消滅した。
エマが笑う。
「さすがねぇ、あたしの炎なんて赤子みたいなモンだわ。でも、ユンガーの人形とは相性が悪いよ」
「人形なんて簡単に燃やせる」
「違うのよ」
エマの口元が笑みを刻むと同時に、割れた窓が枠ごと弾け、破片と共に女達がアスタロト達の目の前に降り立った。
女達――十二体の人形達が、中央に寄っていたアスタロトと十名の兵士達と、ほぼ向かい合うように囲んでいる。
剣を抜けばそれだけで届く位置だ。人形達は武器を持ってはいない。
アスタロト達に優位に見えて、だがエマはにんまりと笑った。
「これであんたは得意の炎を使えない」
アスタロトは目の前の美しい女――人形を睨んだ。
それは確かに、思わず引き込まれるほど美しく、完璧に作り上げられた人形だった。
白い陶器の頬、宝石のような硝子玉の瞳、赤く朱を刷いた唇。
動くのが当たり前と、そう思えるほどに。
だが微笑みは禍々しい。そして激しい雨にも流されず、纏い付いた血の匂いがした。
匂い立つ香水のように。
棟内に入った兵士は、およそ五十名――
アスタロトは怒ったように笑ってエマを見上げた。
「接近しちゃえば使えないと思ってんの？　――私を甘く見るなよ」
アスタロトの腕が上がり、目の前にいた人形の肩を掴む。人形が唐突に音を立てて発火し、瞬く間に炎に包まれた。
激しく叩きつける雨にも火勢を弱める事無く、炎は人形を焼いた。
白い陶器の頬がひび割れ、ぼろぼろと崩れる。
華やかな衣装が黒く縮れ、艶やかな髪が煽られて炎を散らす。
人形は笑みを浮かべたまま、松明(たいまつ)のように燃え盛った。

それでいてそれは、手を伸ばせば触れられる距離にありながら、そこにいる兵士達の衣服や、足元の草さえ焼く気配も無い。
「私の炎は対象だけを焼き尽くす。距離は意味ないよ」
高温の炎を意思一つで自在に操る――アスタロトが炎帝公と呼ばれる所以(ゆえん)だ。
さすがにエマの頬が緊張に引き攣って震えた。人形は成す術も無く燃えていく。
「何やってんだい、ユンガー、いつもみたいに」
『そう焦る事は無い』
クスクスと笑い声が流れる。
笑っているのは炎に包まれた人形だった。
『……君の炎は、どこまでが限界かな』
「何それ。限界なんて無いけど？」
激しい雨にも消えない炎を纏い付かせていながら、かしゃり、と無機質な音を立て人形が歩いた。
炎によって滑らかな動きが失われたのか、足を出す度に左右に揺れ、揺れる動きに合わせて火の粉が滴のように落ちる。
人形はアスタロトの横を抜け、兵士の一人と向かい合った。間には身体一つ分の空間しかない。
アスタロトの面に、微かな緊張が浮かぶ。対峙する兵士も、何かを堪えるように歯を食い縛った。
熱だ。
身体一つ分の距離で――人形を包む炎は、確実に兵士へ熱を伝えていた。
アスタロトの思考を読み取ったように、ユンガーが笑った。
『炎は熱を発する。直に燃え移る事は無くても、どこまで耐えられるだろうね。高温のあまり発火してしまうかもしれない』
更にもう一歩。
兵士は苦痛に眉をしかめながらも、ぐ、と足を踏張った。兵士の肌には火脹れができかけている。
人形が再び一歩近寄る。
「もういいよっ、さがれ！」
アスタロトは兵士の肩を掴んで引き離しながら、指先を弾いた。炎が四散し、赤い火の粉を散らして掻き消える。
ただ人形も燃え尽き、音を立てて崩れ落ちた。
『この位置』
別の人形が声を発する。満足そうなその響きに、一瞬、アスタロトの脳裏をひやりと警告が走った。
兵を退かせるべきだ、と。
そして、その警告を打ち消す、はっきりとした予感。
おそらく既に人形師の布陣は完成し、アスタロト達の退路は閉ざされている――
アスタロトは予感を振り切るように自分達を囲む人形をぐるりと見回した。
「……それが何？　結局燃え尽きちゃったら話にならないだろ。それに私の炎はこの程度じゃない」
『当然――君は間違いなく、もっと強い炎を扱えるだろう、炎帝公。一瞬にして彼女達を全て焼き尽くせる。――だが、条件がいるはずだ』
「いい加減馬鹿馬鹿しい。いつまでもお前とお喋りしてる暇はないんだ。さっさとおとなしく捕まれよ。それとも大切な人形全部燃やしてから引き摺り出してやろうか。泣いちゃうんじゃないの？」
『饒舌だな』
微かな、歯車が動く音が雨の音に混じって耳に届いた。
キリキリ、キリキリ……
アスタロトは視線をじっと人形に注いだ。音は人形の体内から鳴っている。
（……何？）
人形の身体の周りに、一瞬だけ、ごく細い線が見えたと思った時、不意にヒューイット達が喉を押さえ苦痛の呻きを上げた。

「どうした？！」
「こ……」
ヒューイット達は皆同じように、喉から見えない何かを外そうと指を慌ただしく動かしている。
そうする間にも、顔から次第に血の気が引き始めた。
「――止めろ！　何やってんだ！　止めないと」
『燃やしてみるか？　ただ一瞬でやらないと、先に首が落ちるよ』
「何を……」
はっとして振り返ったアスタロトの瞳に、今度ははっきりとそれが見えた。
兵士達の首からぷつりと湧いた赤い粒が、筋となってそれを伝ったからだ。つう、と宙を伝った赤い筋が、アスタロトの足元に滴り落ちる。
「――糸」
いつの間にか、腕や首にごく細い糸が巻き付いていた。それは兵士達の間を縦横無尽に張り巡らされ、人形の指先に繋がっている。
糸はゆっくりと食い込み、皮膚から滲んだ血が薄らとした線を浮かび上がらせていた。
（いつから……）
いつから糸が張られていたのか――
人形達が中庭に降りた時か、それとも窓が割れた時にか。
アスタロトは唇を噛み締めた。
人の気配があれば気付いただろう。
全く気配を持たない人形と、糸。
どれほど精鋭の部隊でも、気付かないままにあっさりと、その罠の中に入り込んでしまう。
『瞬き一つで手足を落せる。どんな状態になるか、足元に転がっている彼らを見れば判るだろう』

エマは屋根の上に立ったまま、中庭で繰り広げられる見慣れた光景に息を吐いた。
あれがユンガーの人形の、最大の武器だ。発見するのが困難な、細く強靭な糸。
必要に応じて張り巡らせ、獲物を捕らえ、或いは切り裂く。
そして、ユンガーの意志どおり従順に動く人形達には、人を切り裂く事への躊躇いは微塵も無い。
ここにいる全ての兵の首を落すのにも、一呼吸分の時間程度しか要さない。
それはアスタロトにも判っているようだった。そしてこの状況が何を示しているのかも。
ユンガーは炎帝公の炎でさえ、彼の人形達には通用しないと言った。
それは確かだ。
「――お嬢さん、おとなしく付いておいでよ。あんただって部下を見殺しにしたくないだろ？　あと半分とは言え、無事家に帰してやればいいのさ」
アスタロトはきつく頬を張り詰めたまま、エマと人形達を睨んだ。
焼き払うのは簡単だ。ただし、この場に居るのがアスタロト一人なら。
兵士達の首に巻き付いた糸は、そのまま彼等の命を握っている。
人形を燃やそうとしても、燃え尽きるまでに糸が彼等の命を絶つ。
かと言って一瞬で人形達を焼き尽くすだけの炎を用いれば、その高温に周囲が耐えられない。
先ほどユンガーは、わざわざその事をアスタロトに証明してみせた。
アスタロトの瞳に怒りと、それ以上の戸惑いが揺れた。取るべき手段が見当たらないせいだ。
まるでこの場を覆う糸が、全ての動きを絡め取ったように思える。
『彼等を助けたければ』
ユンガーはわざとらしく区切り、愉悦の笑みを零した。
『君が私の元に来る事だ。簡単な事だろう』

「――」
アスタロトはじっと憤りを堪えるように立っていたが、やがて周囲を見回し、溜息を吐くと、無造作に一歩踏み出した。
「公！　お止めください！」
焦りに満ちたヒューイットの声が後を追う。
「我々の事など気になさる必要はありません！　公の御身を」
「平気平気。私が行って、攫われた娘達をちゃんと連れ戻してくるよ」
アスタロトは視線だけを向け、気軽な挨拶をするように手を振って見せた。
「公！　――くそ！」
ヒューイットは右手の剣を振り上げ、自分の左手に巻き付く糸を断ち切ろうと振り下ろした。
ぎょっとしてアスタロトが手を伸ばす。
「やめろ、それは！」
鈍い音と共に剣が弾かれ、代わりにヒューイットの左手首から血が噴き出した。
アスタロトは素早く剣を取り上げ、それから血を迸らせているヒューイットの左手首を掴んだ。アスタロトの掌が高熱を帯びる。
「傷を焼いて血を止める。我慢しろよ」
そう言いながら、アスタロトは剣に視線を走らせた。鋼鉄の白刃の、糸に打ち下ろした辺りに、刃毀れと亀裂が走っている。
「――他のヤツも、こんな真似しようとすんなよ。お前達は無事に戻すんだから」
「我々が全て倒れても貴方をお守りするのが務め、公、どうぞ――」
「おんなじだよ」
手にしていた剣を地面に置いて、アスタロトは顔を上げた。
「私とお前の命はおんなじ。誰かが助かれば誰かが助からなくてもいいなんて事は無い。だから、全部が助かるやり方をするだけだ」
ヒューイットの眼がアスタロトを追う。
「あ、一言忠告しとくけど、戻って兵を出そうなんて思わないでよ」
「しかし」
「どうせまた同じ事だ。それよりは私を信頼して任せろ。それと――」
ユンガーの人形達を相手にするのに、法術や通常の剣では間に合わない。
全ての糸を一瞬にして断ち切れるものでなくては。
アスタロトはヒューイットの顔をひたと見つめると、そっと、ヒューイットにしか聞き取れないほど微かに告げた。
「王から、剣を一振り借りてきてよ」
ヒューイットはアスタロトの瞳に浮かんだ意図を読み取り、頷いた。
『もういいかな。では、エマが君を案内する』
アスタロトは目の前の人形の瞳を正面から見据えた。
その向こうで見ているだろうユンガーと対峙する。
「ユンガー、兵を解放するときっちり約束しろ。私を騙したら、いつでもお前と人形を消し炭にしてやるからな」
一歩も退かない意思を見せながらも、それはこの場でユンガーが勝利を収めた事を物語っていた。
人形は陶器の頬にくっきりとした笑みを浮かべた。

アスタロトが導き入れられたのは、先ほどの建物からほど近い、運河の傍にある倉庫のどれかのようだった。まだ弱まる気配のない雨が水面を叩く音が聞こえる。
エマは扉を閉めると、アスタロトの瞳を覆っていた布を解いた。
室内は鎧戸が下ろされ、灯りも職台に蝋燭二本が揺れるだけだったが、もともと雨雲が陽光を閉ざしていたせいと瞳を閉じていたおかげで、暗い室内の様子をすぐに見て取る事ができた。
四間四方の広い室内の真ん中に長方形の卓がぽつりと置かれ、卓上に

蝋燭を立てた燭台が一つある。
その灯りの輪の中に、男の姿が照らし出されていた。
痩せて頬のこけた、三十代前半の男だ。頬がこけていなければもっと若く見えるかもしれない。
本来なら整っているだろうその顔には、蝋燭の幽かな揺らめきも手伝って、生気が失せている。
その横に二人、彼を支えるようにして女が立っていた。あの中庭で嫌と言うほど良く見た姿だ。
まるで生きているように見える、精緻な人形。
彼の後ろの壁にも――良く見れば部屋の壁際にも、ぐるりと人形が囲んでいた。
「お前がユンガーか」
ユンガーは笑みを浮かべて頷いた。瞳だけが異様な光を帯びてアスタロトに向けられる。
「その通り」
ユンガーは椅子の上で身を起こし、座ったままながら慇懃にお辞儀をしてみせた。
「お会いできて光栄に存じます、アスタロト公爵」
周囲の人形達も、ユンガーに倣い、優雅にお辞儀をする。薄暗がりに異様な光景だ。
キリキリ、と微かな糸を巻く音を聞き取り、アスタロトは眉をしかめた。この人形達も、糸が使われている。
「光栄とかどうでもいいけどね、ていうか気持ち悪いし」
そう言うとつかつかと近寄り、卓を挟んでユンガーと向かい合った。
「娘達はどうした。無事か、無事じゃないか、答え次第でお前の命運は決まるぞ」
たった一人でこの場にいても全く動じる様子の無いアスタロトが可笑しいのか、ユンガーは俯くようにして笑みを浮かべた。
どうあっても優位は揺るがないと、ユンガーは確信している。
彼の人形達がある限り。

「無事だ。今のところは」
「よし、じゃあ帰せ」
端的過ぎる言葉に、ユンガーは今度は肩を震わせて笑い声を立てた。
「帰せと言われても、困るね」
息を付き――それは笑うだけでも疲れるからか――、ユンガーは再びゆったりと椅子の背に凭れた。
「私にも目的がある。人形を作るという大切な目的がね」
「そんな身勝手な目的、私が知るか」
凭れたまま、ユンガーは瞳だけをアスタロトに向けた。
「身勝手というが、そもそも人形師とはそういうものだ。人形に命を与えるのが我々人形師の役目だから」
その、さも当然という口調に、アスタロトは苛々して唇を噛んだ。
「人形を作り続け、魂を注いでいくごとに、その対象が次第に深まって行く。最初はどれほど美しい瞳を作り出せるか――、その次は陶器の頬にあたかも血の通ったような色を差すにはどうすればいいか。髪の艶は。唇に吐息を息付かせるには。誰もが人形を人に近づける為に心血を注いで没頭する」
「どうでもいいよ、そんなの」
「極めた人形師の人形は、最後の仕上げに唇に朱を差せば微笑んで動き出すという」
「単なる理想だろ。人形が全部動き出したら子供が逃げ回って商売にならないじゃんか」
「そう、まあそんな事は理想だが、そうであるべきだと考えられてきた。――ところが私は才能があってね」
アスタロトの様子を可笑しそうに眺め、ユンガーはゆったりした口調にじわりと熱を灯した。
低く囁く。
「私の作る人形は本当に動いた」
カタリ、と音を立て、周囲の人形達が動き出した。
華やかな衣装の裾を揺らし、室内をゆらゆらと歩く。

「最初に人形が動き出した時――その時の驚きと喜びを、今でも明確に思い出せる」
ユンガーの熱に浮かされた瞳が宙を見つめる。アスタロトには理解しがたい、狂気を孕んだ瞳だ。
「初めはただ動くだけだったが、次第に言葉を理解し、私が命じるままに動くようになった」
人形達はアスタロトを囲むように卓の周りをゆるりと回る。
まるで舞踏会のようだ。
「素晴らしい光景だった――微笑むのだ、私の人形は」
ばん、とアスタロトは卓を打った。ユンガーの瞳が焦点を結ぶ。
「どうでもいいよ、そんなの。だからって娘達を攫う理由にはならない」
「理由か――」
ユンガーは高ぶった気分を落ち着かせるように瞼を伏せ、伏せたまま笑みを浮かべている。
「簡単だよ。物足りなくなった」
「何だと」
「木で骨を組み、陶器の肌を与えるだけでは、それ以上人には近付かない。もっと美しく、精巧な人形を――」
「だからって、人を」
「せっかくの美しい者がむざむざと衰えるのも惜しい。だから私が、永遠に美しいまま留め置いてあげようと思ったんだ」
あっさりと、微塵も疑い無くそう言った。
「私の技術なら、生命の美しさ、その一瞬を永遠に留めておく事ができる――。最初のうち何例かは失敗したが、今は失敗もしなくなったよ。この通り」
ユンガーは両手を広げ、自分を支える二体の人形を示した。
まるで生きているように見える、精緻な人形――
いや。精緻な人形に作り替えられた、人間だ。
「素晴らしいだろう」
背中を冷たいものが走るのを感じ、アスタロトは卓に置いた手を握り締めた。
二体の人形の頬に浮かんだ、物言わぬ笑み。
硝子玉の瞳は美しい色を湛えながらも、何も映していない。
「……最低だな」
アスタロトは唇を噛みしめ、漸くそう吐き出した。ユンガーが身体を起こし、卓に両肘を付いて手を組む。
「さっきも言ったとおり、娘達はまだ傷一つ付けてはいない。王都ではゆっくり時間が取れなくてね、ここを出てから処理するつもりだ。だが、君が逃げようとしたり、彼女達を逃がそうとしたら、容赦なく首を落とす。少しもったいないが、君が居ればまあ惜しくはない」
「――」
「君は私の手で、今のまま、美しいままに生きる事ができるんだ。素晴らしい事だろう。――永遠の命を得るんだ」
アスタロトはしばらく黙ってユンガーを睨み据えていたが、やがて息を吐いた。
「私は永遠なんて欲しくないね。本当に綺麗なものっていうのは、命が移り変りながら見せる、その一瞬一瞬にあるんだ。作り物じゃ表わせない」
ユンガーは失望したように肩を竦めた。
「もっと喜んでくれると思ったが――まあいい、いずれ感謝するよ。エマ。彼女を奥の部屋に。丁重に扱うんだ」
エマの手がアスタロトの腕を掴む。
「逃げようとしちゃだめよ。法術でちゃんと見張れるからね」
「私が逃げようとしなくても、軍はすぐお前達を見つけるさ。さっさと逃げた方がいいんじゃないの。でも娘やこんな大量の人形連れてたらすぐばれるけど」
ユンガーは笑みを返した。
がちゃりと鍵が開き、男が一人入ってくる。アスタロトは初めて見る顔だ。

（まだ仲間がいたのか）
男はアスタロトを見て驚いたように眉を上げ、ヒュウと口笛を吹いた。
「こりゃすげぇ、あんたどうやったんだ」
「口をつつしみな、ウルド。公爵様だよ」
エマは鬱陶しそうにウルドを睨んだ。
「はは、どうせもうすぐ物言わぬ人形だ、もったいねぇ」
「ウルド。どうだ」
低く問われ、ウルドは少しうろたえて唇を舐めた。
「あ、ああ――何とか持ってきたぜ。ちと値は張っちまったが間に合ったからいいだろう。この雨だ、深夜か、遅くても明け方には堰が開く」
「判った」
ユンガーは頷き、アスタロトを見上げた。そこには満足そうな、勝ち誇った色がある。
「もう王都に用はない。今夜中に出る。君は救援を呼んだようだが、残念ながら間に合わないだろうね」
「――」
「おいで、お嬢さん」
エマに背中を押されて部屋の奥の扉へと歩きながら、アスタロトは鎧戸を閉ざした窓に視線を向けた。
光はほとんど入って来ないが、まだ夕刻に近いはずだ。
まだ時間はある。ただ、ユンガー達の逃走手段は判らず、伝える術（すべ）もない。
（ヒューイット、上手く伝えてくれよ）
あと数刻の内に、全てが停滞なく動かなければ間に合わない。
もちろん、いざとなれば自分一人でもどうにかするつもりでいたが、少女達を傷付けずに取り戻す為にはアスタロト一人だけでも、通常の軍がいたとしても難しい。
あの糸を問題にせず断ち切る事ができなくては――
それができるのは、一人だ。
（頼むから管轄だの何だの、めんどくさい事言わないでよね）
「何考えてるか知らないけど、まあ諦めなよ。ユンガーは本当に、あんた一人いりゃあ他は平気で殺しちまうよ」
エマは扉を開け、アスタロトに入るように促した。
窓もある、普通の部屋だ。
アスタロトの視線が窓に向けられているのを見て、エマは笑みを浮かべた。
「窓は無理さ。ちゃんと術をかけてるよ。開かないし――探索の術も効かない」
「……お前は何であんな男に付き合ってんの？」
「あたし？　あたしは綺麗な女の子が好きなのさ。ユンガーはあたしにも人形で遊ばせてくれるし。ああ、でもあんたはさすがにもったいないわ」
エマはアスタロトの腕を取って豊満な身体を寄せ、口付けをしようというように顔を近付けた。
「あたしのものになるなら、あんただけでも助けてあげる――」
「遠慮する！」
アスタロトは慌ててエマの腕を振り払った。
「何よ、そんなに嫌がらなくたって。珍しくもないでしょ」
髪を掻き上げ、エマはにんまりと笑った。
「でもそういう事よ。人形の方が好きに遊べるもの」
アスタロトを部屋に残し、エマは廊下に出て振り返った。
「あんたが人形になったら、うんと着飾らせてあげるわ」
扉が閉ざされ、足音が遠退く。
鍵を掛けた様子も無かったが、把手を回そうとしても、飾りのように動かなかった。

六

平伏するヒューイットを前にして、西方軍第一大隊大将ゴードンは怒りに顔を赤く染めた。
軍議の為の部屋には十数人が座れる卓が置かれているが、今いるのは四名のみ、窓を叩く雨音が言葉を縫って室内に響く。
「よくも貴様等だけがのうのうと戻ったものだ。自らの役割を何だと思っている」
「申し訳ございません、咎はいかようにも受ける所存です」
「貴様の命一つで足りると思うか！」
「申し訳ございません――」
ヒューイットは弁解もなく、ただひたすら平伏を続けている。
正規軍総司令部の一室、楕円形の長い卓に西方軍第一大隊大将ゴードンと西方将軍ヴァン・グレッグが座っている。
卓の対面には正規軍副将軍タウゼンが座り、ヒューイットの報告を聞いている間ずっと、事態を推し量るように唇を引き結んでいた。
あのマレル地区の戦闘から一刻、ヒューイットは兵を退いてすぐここへ来た。
アスタロトが自ら敵の手の内に入って、既に一刻。
「公をお守りする為に身命を張るのが我等の役目だろう、それを」
「もう良い」
タウゼンが組んでいた腕を開き、ゴードンは口を閉ざした。
「しかし、副将軍閣下」
「ここでヒューイット一人を叱責しても始まらん。もとより公は兵を犠牲にして良しとする方ではない。お前もそれは良く知っていよう」
「閣下、ですが、だからこそ我々が」
「そもそも、公のご気性を知っていながら、正体の判らない相手に対して公ご自身が出向かれる事を止めなかったのは、我等の失策だ」
タウゼンは立ち上がり、ヴァン・グレッグとゴードンの横を過ぎてヒューイットの前に立つと、厳しい視線を落とした。
「ヒューイット、貴様はまだ機会を全て失った訳では無い。貴様とてこのままでは終われまい。右軍中隊全隊を率いてもう一度人形師を捜し出し、必ずや公を無事お救いするのだ」
「――ッ」
ヒューイットは更に平伏し、それでいて顔を伏せたまま返答を躊躇った。
右軍中隊、凡そ千名の兵を動かせとタウゼンは言い、それは通常の市街地作戦であれば十分過ぎる数だ。
失地を回復する、最後の機会を与えられる事でもある。
だが、それでも確実に、兵に損害が出る事がヒューイットには判っていた。
ユンガーの手にある人形が先程のあの数、およそ十体であれば、中隊の五分（ぶ）から一割。
それを一割で済むと捉えるか――
いや、確実な一割だ。
一割が死ぬ。
タウゼンも戦況の報告から判っているはずだ。判っていて、ある程度の損害を想定した上で指示を出している。
この状況下に於いて、タウゼンの選択は間違いではない。正規軍副将軍として取るべき選択だろう。
――だが、アスタロトの意思とは違う。
あの時アスタロトは、徒（いたずら）に軍を動かすのではなく、ただ一つある、確実な方法を指示した。
『王から剣を借りてきてよ』
正規軍にとってそれは名誉に関わる事でもある。
他者の――近衛師団の手を借りるという事は、自らの力不足を曝け出す事を意味している。
それでもタウゼンの選択をそのまま受ければ、アスタロトがあの場で

兵を助ける為にした事が意味を失う。
「すぐに態勢を整えて向かえ」
タウゼンは未だ頭を上げないヒューイットを見て、訝しそうな視線を向けた。
「どうした」
「恐れながら――」
ヒューイットは息を吸い込んだ。今この状況でこんな事を口にするのは、ヒューイット自身の地位と軍での未来を閉ざしかねない。
だがアスタロトの意思と、ヒューイット自身の目にした現実からは、打開策はそこしかない。
「閣下、私の分を逸していると承知で申し上げます！　現時点で近衛師団第一大隊に協力の要請を！」
呆気に取られ、次いで椅子を蹴たてて立ち上がったのは大将ゴードンだった。
「ヒューイット、貴様、何を――正規の面目を潰す気か！」
ゴードンは激怒したが、それも当然と言える。
そもそも今回の件は近衛師団が関わる要素はなく、正規軍がその責務の範疇において解決すべきものだ。
それを一度隊を出しただけで近衛師団に救援を求めるなど、他の方面軍から謗りを受けるのは目に見えている。
「面目よりも、結果を重視すべきです！」
「黙れ、ヒューイット！　元はといえば貴様の用兵の甘さが招いた事だ！」
「それについては否定致しません。しかし、公は、王より剣を借りよと仰せになりました。それ以外に――」
タウゼンは動じた様子も無く低く呟いた。
「剣士か」
タウゼンの語尾を掴み損ねないように、ヒューイットは膝を乗り出した。
「そうです。五班五十名を殺戮せしめた人形の糸を断ち切るには、通常の剣では通じません。中隊を出せば捕えられましょうが、兵や娘達に被害が出るでしょう」
ゴードンが追い払うように腕を振る。
「もういい、退れ！　貴様には追って処置を下す！　公の救出には中軍を当てる」
「大将、どうかご検討を」
「退れ！　そのまま官舎に戻り、五日間の自宅謹慎を命じる。行け！」
「――」
ヒューイットは三人の顔を順番に見つめ、その上に意見を差し挟む余地が無いのを見て取り、唇を引き結んだ。
頭を低く下げ、黙って退出する。

ヒューイットが出ていった後の扉を眺め、ゴードンは自分を落ち着かせるように息を吐き、ヴァン・グレッグとタウゼンに向き直った。
「申し訳ございません、閣下。あれも本来は優秀な男、数日頭を冷やせば自らの軽率な発言を悔いるでしょう」
ヴァン・グレッグがゴードンに顔を向ける。
「炎帝公は確かにヒューイットにそう指示したと思うか？」
「……それは、この場では」
ヴァン・グレッグはゴードンから視線を外し、今度はタウゼンの面を計るように見つめた。
「閣下、いかがなさいますか。彼が公を救う為に動く事に関しては、疑念はありません」
ゴードンも口をつぐみ、タウゼンの横顔を注視する。
本当は、アスタロトが指示した事を疑っている訳ではない。
アスタロトならばそう指示するだろうと、タウゼン達は自ら信奉すらしている将軍の気質を判ってもいる。
ただ、アスタロトは政治的な事への関心が低く、平時であればそうした考えに対して、タウゼン達が理を説いてみせる所だ。

正規軍の面子とは、単に個人の意地の張り合いとは違う。
激しく窓を叩く雨の音が束の間、翳った室内を満たす。
「陛下に対し、正規軍の無能を晒せと？」
低く呟いたタウゼンの表情は、苦悩に近く張り詰めていた。
やがてタウゼンは息を吐くように、ゆっくり言葉を吐き出した。
「――今、余計な動きをしている猶予は無い」

総司令部を出て、激しい雨に瞬く間にずぶ濡れになりながら、ヒューイットは足早に歩き出した。
厩舎で自らの飛竜に乗り、叩きつける雨を気にせず、西へと飛ぶ。
五日間の謹慎――謹慎の明ける五日後には、事件は終わっているだろう。
結末はアスタロトを無事救い出しユンガーを捕えはしても、兵と攫われた少女達は命を落とす。それはアスタロトの望む所ではない。
けれど、例えヒューイットが近衛師団第一大隊に協力を要請したところで、個人の独断など近衛師団第一大隊にとって著しく不利益な内容でしかなく、彼等が容れるとも限らない。
中将の権限を逸脱した上で結果不調に終わるのなら、いっそ今から戻って陳謝し、もう一度自ら隊を動かし、ヒューイット自身の命で責任を取った方がましかもしれないが――
行くべきか戻るべきか――ヒューイットが迷いを振り切る前に、飛竜は目的の建物に着いてしまった。

七

雨粒が窓硝子にぶつかっては筋を引いて落ちていく。
先ほどからずっとその繰り返しで止む気配が無い。
「上将」
グランスレイに呼ばれ、レオアリスは窓の雫を追っていた視線を戻した。
グランスレイは扉を開けて入ってきたところで、立ち止まって一礼した後、厳しい眼差しをレオアリスに向けた。緑の瞳には普段とは違う光がある。
「何かあったか？」
「西方第一大隊のヒューイット中将が面会を求めています」
「ヒューイット中将……？」
呟くと共に、レオアリスの表情が厳しくなる。
ヒューイットは今回の捕物に赴いていたはずだ。
アスタロトも――
何故そのヒューイットが、わざわざ自分を訪ねて来たのか。
ざわりと胸を駆け上がるように、嫌な感覚が走った。
「通してくれ」
グランスレイが頷いて一旦下がる。
入れ替わるように、左軍中将フレイザー、中軍中将クライフ、右軍中将ヴィルトール、そして一等参謀官中将であるロットバルトが執務室に入った。グランスレイが呼んだのだろう。
三人の左中右軍中将と参謀官がこの場に顔を揃えた事で、レオアリスの感じた懸念をグランスレイも感じている事が判る。
中将達は一言も発さず、レオアリスの執務机の左右に立った。
ほどなくグランスレイに伴われ、ヒューイットが入室した。雨の中を外套もなく訪れたのか、全身ずぶ濡れだ。
「何だァヒューイット、ずいぶんななりじゃねぇの。雨ん中泳いで来たか？」

一番手前に立っていたクライフはにやりと笑って迎えたが、ヒューイットが黙ったままなのを見て肩を竦め、おとなしく真面目な顔を作って口を閉ざした。
「正規西方軍第一大隊右軍中将、ヒューイット殿。今回の発言は双方記録させていただきます。近衛師団総司令部、内政官房、及び王に対して、求めがあれば提出します。よろしいですね」
フレイザーが片端の文机の前に腰掛け、ヒューイットに声をかける。重要な打合せや面会の時は発言を記録しておくのが慣習だった。
「結構です」
ヒューイットは頷き、改めて執務室の中央に膝を付いた。
室内に揃った中将達と、その奥に立って振り返った副将グランスレイの姿――そして執務机の前に座る近衛師団第一大隊大将の姿を見て、ヒューイットの面に浮かんでいた緊張の色が更に高まる。
これまでヒューイットはレオアリスと直接話した事は無かったが、改めて目の前にして、その若さに驚きを覚えていた。
アスタロトも同年ではあるものの、正規兵にとって彼女は特別であり、当然だ。
目の前の少年は近衛師団大将と認識するには余りに若く――だが、その漆黒の瞳は真っ直ぐヒューイットに向けられていた。
その瞳の光が、ヒューイットの中にあった迷いを拭い去った。
アスタロトが王から借りよと言った剣（つるぎ）。
それは間違い無く、この少年、いやこの剣士の事だ。
剣士の剣はあの糸を断つだろう。
「事前の打診もせずの訪問、失礼致します。西方軍第一大隊右軍、中将ヒューイットと申します。大将殿には初めて直接ご挨拶をさせていただきます」
ヒューイットはぐっと頭を伏せたまま、少し早口で続けた。
「突然ではありますが――、お聞き戴きたい事があり、罷り越しました」
「――聞こう」
端的な、明確な返答が返る。
ヒューイットは一度、密かに深呼吸をした。
上官たるゴードン、そしてタウゼンの許可もなく勝手な行動を取れば謹慎どころではなく、除隊処分、良くて降格を免れない。
それを理解した上で、ヒューイットの口調は淀み無かった。
マレル地区での目標との対峙、そして経緯を順を追って語る。状況を説明するヒューイットの言葉を、レオアリスは黙って聞いている。
ヒューイットの来訪と意図をどう思っているのか、じっと注がれる眼差しからは計る事ができないが、落ち着いた瞳の奥に、時折揺らめく色がある。
正規軍の行動への興味と、ユンガーと人形達への好奇心。
惨状への憤り。
心地よさを感じるほどに真っ直ぐな、少年らしい感情だ。
「人形師は自らの人形を操り、人形達は糸を武器にします」
「糸？」
「細く強靭な糸を張り巡らせ、気付かない内に捕えられていました。剣では切れず骨すら断つ糸です」
知らずレオアリスの瞳の色を分析していたヒューイットは、その中にふと過った光に、ぎくりと息を飲んだ。
感じたのは身を切るような戦慄――だが、一瞬で消えた。
再び視線を向けた瞳には、ヒューイットの感じた戦慄を覚えさせるものはない。
「どうした」
口を閉ざしたヒューイットに、グランスレイが訝しそうな表情を浮かべる。
「いえ――、我々右軍は先行した五班、五十名をほぼ失い、ユンガーの糸に捕えられた時点で、趨勢（すうせい）は決していました」
ヒューイットの指揮だけでは、残りの五十名も戻らなかっただろう。

「公が、おいでにならなければ――」
ヒューイットはぐっと息を詰めた。
「ですが、我々の為に」
語尾を震わせたヒューイットの耳に、ごく小さな呟きが引っ掛かった。
「あの馬鹿、相変わらずだな」
押さえ込んだ感情を示すように、顎の下に組んでいた両手の指先には白く力が込められている。
今更ながら、ヒューイットはアスタロトとレオアリスとが親しい友人同士だった事を思い出した。
膝を詰めたのは、そこに可能性を見い出したからか――
友人の為であれば、自らの不利も顧みず、動く、と。
「――どうか、公の救出と攫われた娘達の救出に、大将殿のお力をお借りしたく、こうして無礼を承知でお願いに参った次第です」
「それはタウゼン副将軍閣下の指示か」
グランスレイの問いに顔を強ばらせて唾を飲み込み、ヒューイットは首を振った。その肩から、彼の緊張が透けて見える。
「閣下の指示は頂けておりません――公は王から剣を借りよと……こちらを訪れたのは、私の独断です」
誤魔化す事はできたかもしれないが、ヒューイットははっきりと告げて顔を上げた。
タウゼンの指示は無い。
その事に躊躇うように顔を見合わせたのはフレイザー達中将で、レオアリスの視線はまだ真っ直ぐにヒューイットに注がれている。
近衛師団は王の下命無くは隊を動かす事はできない。その状態でヒューイットの要請を受ければ、最も謗りを受けるのは近衛師団であり、この若い大将だ。
レオアリスの今の立場であれば、特に。
「しかし、今」
「ヒューイット中将」

穏やかな面のまま、容赦なく口を挟んだのは右軍中将ヴィルトールだ。
「その状況で我々の大将に要請する事の意味は、判ってるんだろうね」
ヴィルトールは普段からもの柔らかな口振りで人当たりもいい。
だが、今は視線の奥に、ヒューイットを射るような光があった。
「――承知してこちらを尋ねています」
クライフが笑みを浮かべる。ヒューイットへの牽制とでも言うべき空気が室内を覆っている。
「笑えねぇ冗談だぜ、ヒューイット。お前の言う通り受けりゃあ、上将は責を問われて下手すりゃ罷免だ。そうなれば王都に留まる事もできねぇ。そいつを承知してるって？」
「私の進退をかけて、それを避けたいと考えている。だが、あの糸を断ち切るには通常の剣では無理だ。改めて兵を向けても被害が出るのは必至」
「だからって普通はてめェの管轄内で収めるだろ。他人に責任おっつけて自分達の身の安全かよ」
「公は我々兵を救う為に自ら敵の手中に入られた。兵に被害を出すのは公の意思に反する」
ぴり、と張り詰めた空気の中で、レオアリスは組んでいた両手を解いた。
その仕草に張り詰めた空気が変わる。
中将達はレオアリスに視線を向けた。
「糸か……珍しいものを使うな。確かに厄介だ」
レオアリスは傍らのグランスレイの顔を見上げた。
「今聞いた状況通りなら、アスタロトの炎じゃ噛み合わない。軍を出してもただ損害を増やすだけだろう」
「――そう思います」
グランスレイが厳しい面持ちを崩さないまま頷く。
レオアリスは視線をその隣のロットバルトに移した。冷徹にこの場を見据えていた蒼い瞳が、当然のように視線を受ける。

「場所を改めて特定する必要がある。だがのんびり探してる暇は無かったな」
「良くて祝祭が終わる明日まで、残り一日弱でしょうね。ただそれも当初の目算です。こうなった以上は身を潜めるか、王都を出るか――いずれにしても今から足が着くほど派手に動く事はないでしょう。ですが、追う方法はあります」
「どうやって追う？」
「一番確実なものは逃走手段ですね。大量の人形や攫った少女達をどう運ぶか」
「絞り込んでくれ」
「承知しました」
「捜索の方は私がやろう」
ヴィルトールが歩み寄り、ロットバルトが頷く。
「お願いします。想定できる行程を幾つか弾きましょう」
「じゃ、俺もそっちに加わるか。下層にゃちっとは顔が利く」
クライフがにやりと笑い、フレイザーは肩を竦めて見せた。
「普段どこに顔出してるんだか。でもこういう時は役に立つわねぇ」
「いつもって言ってくれ」
俄かに動き出した室内を見て、ヒューイットは目をしばたたいた。
「で、では――」
今までのヒューイットを牽制するような空気が、さっと拭い去られたように思える。
まだ膝を付いたままのヒューイットへ、レオアリスは真っ直ぐ視線を向けた。
「当然、引き受ける」
「し……しかし、正式な要請では、その」
「大丈夫、俺も考え無く動く訳じゃない。まずは王の許可を頂く。正式な手順を踏んで動けば心配無いだろ？」
「――」
そんなに簡単な事のはずが無い、とヒューイット自身ですら口にしそうになったが、その前にレオアリスは立ち上がり、執務机の前に出た。
「グランスレイ、まずはアヴァロン閣下にお会いしたい。これからお時間を取って頂けるか申し入れてくれ」
「すぐに」
グランスレイはアヴァロンへの面会を申し入れる為に、扉へと向かった。
「捜索程度なら事前に動いていても問題無いだろう。隊を動かすのは控えるとして、悪いがまずはヴィルトール達で当りだけ入れてくれ」
「では、二刻後、七刻に一旦報告を入れます」
余りにあっさりと受け容れられた事に驚きが先に立ち、思わず立ち尽くしていたヒューイットの肩をクライフが叩いた。
「悪ィ悪ィ、ちょっと脅しただけだって、マジにすんなよ。公の為に上将が動かねぇわけねえだろ。ま、お前の覚悟が見たかっただけだ」
ヒューイットはいきなり、レオアリスの前で床に手を付き頭を伏せた。驚いてレオアリスが瞳を見開く。
「ヒューイット中将？」
「申し訳ございません！　公は大切なご友人でもあられる――それを、お守りもできずおめおめと生き延びた私が、どの面を下げてお願いなど――！」
実際は王の下命を得たとしても、近衛師団側からの要請が謗りを受けないはずはない。
ほんの僅かだが、レオアリスは返すべき言葉を探した。
「――確実に被害が出るって判ってて兵を出すのは極力避けたいだろ。他に手があるなら尚更」
組織というものを考えるなら、もしかしたら黙ってやり過ごすべきなのかもしれないが。
どうせそんな事は、元から考えていない。
「一番可能性の高い奴がすべき事をすればいい。それだけだ」
それから、するりと年齢相応の姿に戻り、溜息をついた。
「大体、アスタロトがひょいひょい首を突っ込むからこうなるんだ。将

軍らしさが欠片もねェ」
「ロットバルト、今の発言、記録しとく？」
フレイザーがそっと目配せをし、ロットバルトは肩を竦めた。
「完全に墓穴を掘った発言ですしね。後々不利になる可能性が高いでしょう。削除で」
「聞こえてるよ、聞こえてる」
「あら」
レオアリスの視線にフレイザーが口元を押さえる。
「俺とアスタロトとじゃ立場が全く違うだろ。将軍ってのはただ思うままに突っ込めばいいって訳じゃないんだからさ。最終的な指揮命令責任を負ってるって事を考えねぇと」
フレイザーは再び首を傾げた。
「今の発言も削除？」
「いや……、後日改めて確認して頂く為にも、記録しておいた方がいいかもしれませんね」
「面白いな、お前等……」
言い返す言葉が浮かばず、レオアリスは視線を逸らせた。
ヒューイットが立ち上がり、右腕を胸に当てる正規軍式の敬礼を向ける。
「私は、もう一度タウゼン閣下の説得に向かいます。兵を出す前に、近衛師団への協力要請を出していただかなくては」
そう言い掛けた時に、執務室の扉が開いた。
入って来たのは総司令部に行ったはずのグランスレイで、手に一通の書状を持っている。
「早いな、アヴァロン閣下には」
「上将」
張り詰めた声の響きに、レオアリスは何かを感じたのか背筋を伸ばした。
同様にグランスレイはレオアリスの前で一礼し、書状を差し出した。
「王の召命が下りました」
レオアリスの面差しが鋭く引き締まる。
それでいて、喜びに似た光が頬に透けるように差した。
恭しいと言っていい仕草で書状を開き、そこに書かれた文面に視線を落とす。
激しい雨音さえ掻き消す、緊張。
レオアリスは書状を読み終えると、その瞳をヒューイットに向け、笑みを刷いた。
「ヒューイット中将、貴方は自らの意思と責務を貫いた。正規軍は貴方と同じ判断をしたぜ」
書状を丁寧に畳んで机の上に置き、壁に掛けていた漆黒の長布を身に纏った。
「これから陛下にお会いする。正規軍から近衛師団に、協力要請が出た」

八

地政院の河川管理官は叩きつけてくる雨にずぶ濡れになりながら、運河に架かる橋の欄干に捕まって足元の水面を覗き込んだ。
運河の岸壁に刻まれた目盛りを見る為だ。
暗い橋のたもとを長い柄の先に付けた角灯で漸く照らし、傍らの同僚を振り返る。
「危険水域まであと一尺弱ってとこですね、だいぶ水嵩が増してきてます。今夜は堰を開けないと溢れますね」
目盛りの赤い線の位置まで水がくると、運河が氾濫する危険性がある。
彼等はここ、王都下層ラドヴィック地区を流れる新運河の水量の監視の為に雨の中を回っていた。
年配の管理官も頷く。
「よし、もう商船の運航も止まってるだろう。街門の管理部に今後は入れるなと通知しよう。管理官長の許可取って船を流されないように逃がして、開けるとしたら準備が整うのが早くて四刻後かな」
「明け方まで保つかもしれませんが、その方が安全ですね」
今は夕方も六刻を過ぎ、昼過ぎから降り出した雨はまだ強い雨脚を保ったままだ。
足元の運河は雨水を貯え、ゆっくり、しかし確実に水嵩を増していた。
王都内外に造られた運河は、この国の重要な血脈だ。各地方を流れる河川を繋ぎ、大量の荷の運搬を容易にしている。
国内に張り巡らされた街道と、運河。
ここまで整えられた輸送路は他国ではまだ見られない。
土地の利、豊饒な土、高い軍事力、それらがこの国を安定させている要因だが、安定の上に立つ長期の繁栄の理由の一つには、国内の輸送基盤を整え、高めた事がある。王の賢政の一端を示すものでもあった。
王都は中心に行くに従って傾斜がかかり、なだらかな山のような姿をしている。荷の運搬の為に造られた運河も当然傾斜が強く、それだけでは船が上る事は不可能に近い。
その為に、運河には一定間隔で堰が設けられている。この堰で水量を調節し、水位を上下させて二つの区画の水面の高さを合わせる事で、船の通行を可能にしていた。
だから基本的に運河に自然の流れは無い。一定の水位を保つ為の排水機能はあるが、排水量を超す雨が降り続けば、やがて溢れてしまう。
今日のような激しい雨が長く続く日は、船の運航を止めて堰を解放し、水を強制排出する必要があった。
「じゃあ一刻余裕を見て十一刻に開けよう。お前は管理官長に報告して準備を始めといてくれ、私は様子見ながら歩いて街門まで連絡に行ってくる」
「判りました。一刻ですね」
時間を確認しあい、二人は片手を振って橋の上で別れた。
年配の管理官は橋の右手、ラドヴィック地区側の岸壁を街門に向かって歩き出す。
少し行った所で管理官はふと足を止めた。ラドヴィック地区の反対側にもう一つ運河があるのを思い出したからだ。
「そうだ、旧運河も開けないとな――マート！」
叫んで手を振ると、橋の向こうで同僚が振り返る。彼等の管轄はこの新運河だけではなく、マレル地区の旧運河も含まれている。
「マレルの旧運河も俺達だ！　忘れずに一緒に開けるように伝えてくれ！」
「旧運河ですね、判りました！」
マートも大声で手を振り返し、二人はそれぞれの方向へ足早に消えた。
降りしきる雨が運河や建物を叩く。
その音の中に、別の微かな音が混じった。
キリキリと、歯車が回るような音だ。
先ほどまで二人が話していた橋の、建物の路地の暗がりから聞こえて

くる。
暗がりの音はしばらく雨に紛れて聞こえていたが、やがて遠ざかっていった。

「堰が開く」
ユンガーは人形に身をもたせかけたまま、笑みを浮かべた。
目の前の人形は管理官達の会話を伝え終わり、かくりと首を垂れた。
全て彼の計画どおり――いや、この雨やアスタロトを手に入れた事は計画の内ではなかったが、計画を補うように進んでいる。
「じゃあ今晩だな」
卓の向こうでウルドが身を乗り出す。ユンガーはゆったり頷いた。
「今晩、十一刻に王都を出る。用意を整えておいてくれ」
「娘達はどうすんの？　騒がれたら不味いよねぇ。ぎりぎりまでここに置いとくかい」
エマは顎をしゃくって娘達を閉じ込めている階上を示した。
「そうだな。騒がないよう眠らせてから船倉に移してくれ」
「判ったよ。あのお嬢さんも？」
「彼女はいい。娘達が寝ていれば、一人で連れ出しようもないだろう」
「ま、さすがに五人担いでは行けないわね。やろうとしそうだけど」
エマは笑って肩を竦め、「術の準備をする」と言って部屋を出ていった。
彼等が王都を出るまで、あと五刻、日付が変わる前に王都を後にし、しばらくはどこかへ身を潜める事になる。
一旦身を隠せば発見されにくく、発見されたとしても昼間の通り、正規軍を封じ込めるのは容易い。
全て上手く進んでいる事を確信して、ユンガーは笑みを浮かべた。

アスタロトはこの部屋の小さな窓を見上げた。ここへ来てから既に二刻は経っただろうか。
その間何も動きが無く、ここまで来た目論見が外れたような状況で、正直に言えば少しだけ、焦る気持ちが強くなってきていた。
「まだかな――」
先ほどから何度も部屋の中をくるくる歩き回り、椅子に座ってみたり壁を叩いてみたりしている。
壁を叩いたのは隣に誰かいないかと思ったからだが、叩き返してくる気配はまだ無かった。
「もう」
短い溜息をついて、再び椅子に腰かけた。この椅子一つしかこの部屋には無い。
「丁重に扱うなら、椅子だけじゃなく長椅子とか寝台とか、美味しい紅茶とか、美味しいお菓子とか用意してよね」
こんな時にあれだが、ちょっとお腹が空いてきた。美味しいお菓子と紅茶を思い浮かべたら、アーシアの事が思い出された。
「アーシア、心配してるだろうなぁ。ヒューイットは上手く話したかな」
アーシアが心配しているのは自分のせいにしても、ヒューイットがタウゼン達に話をする事ができたか、それがずっと気になっているのだが、さすがにこの状態では確認のしようがない。
ヒューイットやタウゼン達を信頼するしかなく、ただそれに関してはアスタロトは自信があった。
（何が一番重要か、答えは一つしかないし）
単純過ぎると言われようが、それが真実だ。形式や面子なんて命より軽い。
それに彼女の副将軍タウゼンは、形式だけに拘るような狭量な人物で

はない。
だから、近衛師団への通達やこの場所を捜し出すのに多少時間がかかったとしても、待っていれば必ず、レオアリスはここに来るはずだ。
来た時に、自分がどう動くべきか、考える必要があるのはそれだけ。
（ちゃんと考えなきゃ。できれば女の子達と一緒の部屋に入りたいんだけど）
彼女達がどこにいるのか、アスタロトが今いる部屋では話し声も、泣き声すら聞こえて来ない。
（抜けて探しに行けたらなぁ。炎で扉を焼いてもいいけど、ユンガーがキレて娘達に手を出すのも駄目だし）
捕えられた少女達、兵士達――これ以上誰一人傷付けずに事件を終わらせる義務が、アスタロトにはある。
「じゃないと来た意味ないもんね」
それが出来なければ、それこそ正規軍将軍を名乗る資格は無い。
「あんまり待たせないでよね、レオアリス」
今レオアリスが耳にしたらそれこそ切れそうな事を言って、アスタロトはのんびりくつろぐように両手を頭の後ろに組んだ。

「――何か、腹立って来た」
レオアリスがぼそりと呟き、グランスレイは首を傾げた。
「どうかされましたか」
「いや……」
この昼のアスタロトの行動を思い起こし、今後の対応を考え、ついでにアスタロトを見付けた時の彼女の第一声を想像してみたら、何となく腹が立っただけだ。
（絶対遅いとか良く来たなとか言うんだ、決まってる）
どうせ心配したのが虚しくなるくらい元気な様子で。
容易に想像できる。
だから、問題無い。
頭を一つ振り、濡れた髪から雫を落としながら、レオアリスは王城の玄関の階段を一段飛ばしに昇った。
王の召命を受け、レオアリスはグランスレイと共にすぐにここ王城を訪れていた。
近衛師団隊士が警護する巨大な玄関扉を抜け、大広間を真っすぐに横切り、更に正面の大階段を昇る。
「とにかく、王のご下命をいただいて、出来る限り早く動きたい。じゃないとあいつ、何をしでかすか判らないからな」
少しぶっきらぼうな口調に、グランスレイは階段を上がりながら数段上を行く上官の横顔を眺めた。
ただ、そこに覗いている感情は、口振りとはまた違う。
「一刻も早く、公をお救いしましょう」
「別にあいつは心配ないだろ、仮にも炎帝公だぜ。それより攫われた娘とか、そこらの建物とかが心配だよ」
「そうですな」
他の部下達ならここぞと突っ込んだだろうが、グランスレイは生真面目に返した。
「ですがやはり心配でしょう」
そう真面目に問われると、意外と困る年頃だ。
「そりゃ、まあ――」
何となく照れ隠しのように言葉を探していると、廊下の向こうから三人ほど、王城の女官がやって来るのが見えた。
深草色の女官服を身につけた女達はレオアリス達の一間ほど手前で立ち止まると、裾を軽く持ち上げ丁寧にお辞儀した。
一番前にいた女官が顔を伏せたまま静かに告げる。
「失礼致します、近衛師団第一大隊大将閣下。お迎えに上がりました。控えの間へご案内致します。陛下がお呼びになるまでそちらでお待ちください」

レオアリスがすっと緊張を纏ったのが、後ろにいたグランスレイにも良く判った。
彼の身を覆う緊張は召命を受けた時からずっと感じていたが、王の名を聞けば否が応にも高まる。
グランスレイもそれは同じだが、レオアリスの感覚はグランスレイ達の感じ様とはどこか――根源的な部分で違った。
女官は二人を控えの間へ案内すると、手回し良く揃えていた近衛師団の軍服を差し出した。
「お待ちの間に濡れたお召し物をお着替えくださいませ。今お召しの物は乾かして後日お持ちいたします」
王の眼前に雨に濡れたままの軍服で上がるのは礼を失する。レオアリス達がこの雨で濡れるのを避けられないと、そう予想していて始めから手配していたのだろう。
きちんとレオアリスとグランスレイの身に合うものだ。
「ありがとう」
心配りに礼を述べると、女官は微笑んで恭しくお辞儀をし、部屋を退いた。
濡れた軍服を着替えていると、感じていた緊張感はじわりと密度を増してきた。王の前に立つ事への緊張だ。
王に直接謁見し、直に言葉を交わす機会は、近衛師団大将という立場であってもそれほど多くはない。
通常の朝議などへの参列はしても、軍の大将級ではまだ、求められない限りそうした場で発言する事は殆ど無かった。
何より、幾度その眼前に身を伏せたとしても、その度に王の纏う空気に圧倒される。
この国で、王はある意味別種の存在だった。
建国からの長い賢政――西海バルバドスとの大戦を経た後の三百年に亘る賢政、大戦の百年、そしてそれ以前から、王の治世は続いている。
王家ではなく、一人の王の。
王が有する、法術とは異なる能力、また国土を遍く見通すと言われる慧眼。
王を前にした時、誰もが畏怖と畏敬と、時には戦慄すら覚える。
そしてレオアリスが最も強く覚える感情は、喜びだ。
グランスレイがレオアリスの上に自分達と違う感情を見出だすものが、正にそれだった。
レオアリス自身気付いている。
心の奥底から沸き上がるような歓喜。それは身の裡の剣が覚える慶びでもある。
初めて王に見えた時から――いや、まだ北の辺境で王都やそこに座す王の姿を思い描いていた時から、レオアリスの中に深くその想いはあった。
長く待つほどもなく、先ほどの女官が扉を開けた。
案内されたのは通常臣下への謁見が行われる謁見の間ではなく、王が政務を行う為の執務室だった。
廊下の奥の重厚な両開きの扉の前に、男が一人立っている。身長は六尺四寸近くの引き締まった体躯に、短い白髪と、僅かな空気の動きすら読み取るような鋭い瞳。
「閣下」
レオアリスは一度その場に立ち止まり、左腕を胸に当てて頭を下げた。
近衛師団総将アヴァロンだ。
近衛師団総将は常に王の傍近くに控え、王の守護者たる証として、近衛師団の中でさえ唯一、王の紋章が描かれた長布を纏う。
近衛師団総将となる者は心技体共に優れた者でなければならず、アヴァロンは既に六十を過ぎた外見ながら老いを感じさせないどころか、王の守護者として相応しく視線一つで周囲を圧する迫力があった。

「王へは既にご説明している。おそらくすぐにご下命があるだろう」
レオアリスは僅かに息を詰め、頷いた。
レオアリスの全身を覆った緊張を見て取り、アヴァロンが口元を緩める。
「そう緊張せずとも良い。陛下はそなたに会う事を好まれる」
瞳に抑えがたい喜びの色を浮かべたレオアリスの様子に笑い、アヴァロンは扉を開いた。
すっと頬を撫でるのは、扉の内側から流れ出るような張り詰めた空気だ。自然と身が引き締まる。
この国の――、彼等の王が、そこにいる。
室内は灯りを落とされ、静寂が満ちていた。
吐く息の微かな音でさえ散らすのを躊躇うような静謐さ。それはこの王が纏う空気によるものだ。
広大な国土を安定させ、長期に亘って治め続ける王が纏うのは、決して勇猛さや叩きつけるような苛烈さではなく、息を潜め、身を震わせるような静謐。
澄んで凪いだ深い湖のような思慮と叡智を思わせる。
レオアリスは毛足の長い絨毯を踏んで部屋の中央に進み、片膝を付いた。
左腕を胸に当て、深く顔を伏せる。
「近衛師団第一大隊大将レオアリス、召命により御前に参上致しました」
王は執務机の上に落としていた視線を上げ、椅子の背に身を預けるように身体を動かした。
空気が揺れる感覚が肌に伝わる。金色(こんじき)の双眸が静かに注がれる。
身の裡の剣が鳴動するのを感じ、レオアリスはゆっくりと息を吐いた。
束の間の沈黙の後、王は口を開いた。
低い静かな声の響きやその表情からは多くの感情が伝わってくる訳ではないが、明確な意思の力がある。
「タウゼンから状況は聞いた。華やかな人形とその技は人の眼を楽しませてこそ相応しい。そしてこの世に永遠など在り得ず、永遠の時に意味は無い」
長い時を経て尚、王の面は過ぎてきた歳月とは無縁のように、あたかも漸く四十の壮年に届くほどの歳に見える。
それでいながら、永遠など無いと言う。
全てを見透かすような、黄金の瞳。
「レオアリス。事の経緯はそなたの方が詳しかろう。すべき事は一つ」
どくりと鼓動が鳴り、剣が鳴る。
「第一大隊を動かすか、そなたが出るか、それはそなたの判断に任せよう」
ぐ、と引かれるように、レオアリスは頭を伏せた。
「我が名の許(もと)に、全てを在るべき場所へ収めよ」
王からの勅命――この瞬間に、今回の件は近衛師団の正式な任務となった。
「勅命、謹んで承ります」
左腕を胸に当てて恭しく礼を捧げ、それからレオアリスは漆黒の瞳に光を刷いて立ち上がった。

第三章　「マレル旧運河」

一

黒い羽が風を切って暗い街を飛ぶ。
艶やかな羽は降りしきる雨を吸って重たげだ。漆黒の羽を持った一羽の鳥が、王都下層、マレル地区を中心に、雲に覆われた空と濡れた建物との間を飛んでいた。
三日前の夕方、祝祭でアスタロトとレオアリスが法術士の女に遭遇した路地。つい四刻ほど前、正規西方軍の一隊が人形師達と対峙した建物。
その上を駆け抜け、再び旋回して戻ると、黒い鳥は建物の窓から二階の廊下に入った。湿って重い羽を揺する。
（思ったより見えにくいし動きも重い――この雨はきついな）
鳥は小さな丸い金色の瞳を廊下の暗がりに向けた。
雨の匂い。使われなくなった建物の、埃っぽく黴臭い匂い。
その中に交じる、流されたばかりの血の匂い――
むせ返る――
暗がりでさえ見分けられる血の跡。
正規軍がこの場を片付けて行った後も、殺戮の痕跡はまざまざとこびり付いていた。
怒りが、腹の底の方から湧いてくる。
そして、アスタロトがあした行動を取った気持ちはレオアリスにも理解できる。
（だからって突っ走りすぎだけどな、あいつはいつも）
既にここには痕跡しかない。人形師や法術士、ましてや人形の気配すらない。
鳥は再び羽を震わせて飛び立った。
（どこだ――？）
良く知ったアスタロトの気配すら感じ取れないという事は、法術なりで目隠しをしているのだろう。
再び沸き上がる苛立ちを、レオアリスは努めて押さえ込んだ。冷静に対処するのが近衛師団大将としてのなすべき事で、そもそも今感情を昂ぶらせては、視界が切れる。
翼は再び矢のように風雨を切った。
アスタロトが連れて行かれたとして、それほど遠い場所ではないはずだ。
大通りに出れば人目に付く。
可能性が高いのは、運河側――。黒い鳥は旋回し、旧運河に沿って並ぶ古い保税倉庫群を横切る。
雨が降りしきり、視界が悪い。
意識を集中して視界を確保しようとしたが、逆に一瞬、視界が二つの線を重ねたようにぶれた。
（そろそろ、限界だ）
あまり長時間続けるには、まだレオアリスは未熟――いや、もう向かない。
それを察したように、心配そうな声で黒い鳥が鳴いた。
（まだ、もう少し――）
そう言い聞かせ、立ち並ぶ倉庫群を抜ける。
できれば一軒一軒全ての倉庫を覗いていきたいが、さすがにそこまで保ちそうに無い。
（くそ、ちょっとぐらい手掛かりがあったって良さそうなもんだ）
運河――、船――商業船と思しき中型の帆船が一艘、水嵩を増した水面と帆に受ける風に、大きく船体を揺らしている。
船首に飾られた獅子の頭を模した船首像が、船体が揺れるのに併せて上下していた。
運河を渡るべきか、もう一度倉庫街を飛ぶべきか、迷ったところで視界が回った。
ぐん、と意識が引かれる。袋の中に放り込まれて思い切り振られたような、強烈な浮遊感があった。

レオアリスは二、三度瞬きを繰り返した。
雨に濡れた街の光景は消え、まず視界に入ったのはいつも通りの執務室の壁と、何やら会話をしているグランスレイとロットバルトの姿だ。
「戻っ――」
身を起した途端に強烈な眩暈が襲って、レオアリスは咄嗟に机に両手をついた。
ぱん！　といっそ小気味よい音を立てて掌が机を打ったものの、幸い頭を打ち付ける前に止まり、机上に広げた図面が視界いっぱいに広がった。
「危ねェ」
机を叩いた音に、グランスレイ達が振り返る。
ロットバルトは執務机に寄ると、レオアリスが身を起すのを手伝って顔を覗き込んだ。
「大丈夫ですか？」
「問題ない。時間切れで弾かれたっつうか、上手く出れなかっただけだから」
レオアリスはもう一度背もたれに寄りかかり、明るい天井を仰いだ。少し長く飛ばし過ぎた。
「あー、目ェ回った……気持ち悪ィ」
「便利なのか不便なのか……」
そう呟いたロットバルトの呆れた視線を横切り、黒い鳥がレオアリスの膝の上に降り立つ。しっとりと濡れた羽を嘴で繕いながら、丸い金色の瞳でレオアリスを見上げた。
レオアリスは手を伸ばして艶やかな羽を撫でた。先ほどまで雨の中を飛んでいたのは、この鳥だ。
「お疲れさん、カイ」
この鳥は祖父に貰った伝令使――巷では使い魔と言った方が通りがいい。
遠方へ伝言を伝えるのが伝令使の主な役割だが、特にこの使い魔――カイは「物見」の能力も持っていた。主と視点を繋げてあらゆる場所を探索する事ができる、高度な能力だ。
術を深く修得していればもっと苦もなく扱えるのだろうが、残念ながらレオアリスの技術は王都に来て以来上達していない。
剣士として覚醒――いわば身の裡に眠る剣が目覚めて以来、レオアリスにとって術を使うのは以前より少し困難になったようだった。
それはともかく、レオアリスは既に明確な視野を取り戻した瞳を執務机の上に広げた図面に向けた。王都下層の図面だ。
「何か見えましたか」
グランスレイが問い掛け、レオアリスは眉をしかめた
「難しいな――見えたのは普通の光景だ。倉庫に運河、帆船。この雨のせいで街にもあまり人は出てないし――まあ一度見ただけで時間も足りなかったから仕方がないが、もう少し手がかりらしいものがあればな……。クライフ達から、何か報告は？」
王の下命を受けた段階から、三名の中将達はそれぞれ数班を率いてマレル地区の周辺を当たっている。
ただ、二刻が過ぎた今のところ、芳(かんば)しい情報はまだ無かった。
既に時計の針は八刻を指している。
レオアリスがカイを飛ばしたのは、彼等の捜索の手を補う為と――隊士達をマレル地区の倉庫街に入れるのを避けた為だ。
万が一突発的に戦闘になる事をなるべく回避したい。
まずは情報だけ――そしてできる限り正確な情報が欲しかった。
「新しくフレイザーから一点。やはり服飾関係の店で新たな情報があったそうですが、納品先が今回の昼の建物と同じで、それ以上は判らないとの事です。ただ、仕入れに来た男の名前は判りました。ウルドという男だそうです。今、クライフの中隊とヒューイット中

将の隊がその男の線で当たっています」
「そのウルドって男が全体の仕入れ役か」
人形師と法術士の女、ウルドという男、その三名の中でそれぞれ役割があるようだ。
「状況からすると、こういう追跡を想定していわゆる本拠地とは別に納品場所を作ってる訳だろ。それが一つとは限らないよな」
「そう考えられます」
グランスレイの眉根に刻まれた皺を数えつつ、レオアリスは腕を組んだ。
「別の場所を見つけても簡単には踏み込めない……俺もあんまり手の内は見せたくないしな」
糸を切るのはおそらく、レオアリスの剣には容易い。ただユンガーという男が見せた戦い方を考えると、機会を逸すればアスタロトと同様、レオアリスにとっても不利だ。
レオアリスが関わる一番の目的は、兵や攫われた娘達に被害を出さない事に尽きる。
「踏み込むのは一回のみ、確実に当りを引かないとまずい。何か確証になるものが無いかな……」
じっと図面に視線を落としたレオアリスへ、ロットバルトが問いかけた。
「その事ですが、上将、先ほど帆船があったと仰いましたね。それが気になります。どのような物でしたか？」
「帆船？　……ああ、確かにあった。商船風の、中型で足の速そうなヤツだったが」
レオアリスは先ほどカイの眼を通して見た光景を辿るように、図面の上で視線を流した。運河に船が係留されているのは当たり前の光景だ。そう思ってふと、視線を止める。
マレル地区の運河。
「――今は使ってない旧運河か。それにしちゃ、現役で動いてるような船だったな。帆も張ってたし」
「当りを付けるのに一番確実なのは逃走経路と申し上げましたが、現段階で一番可能性が高いのは船です。搬送力が高く足が速い」
「けど、王都を出る時に街門で一旦荷を検（あらた）めるだろう。そこでバレたら船じゃ逆に動きが取れないぜ」
「確かにその危険性はありますが、それは陸路でも変わらないでしょう。特に今は、船を利用するのに有利な条件が揃っています」
「条件？」
レオアリスは執務机の上に肘を乗せるようにして身を乗り出した。ロットバルトが図面上で運河を示す。
「運河の構造はご存知でしょう。今日のような雨で水嵩が増せば、運河を仕切る堰を開放し、水位を安全域まで下げます。その際、船の通行は止め、開放された水流による被害を避ける為、運河上にある船は船渠や、運河とは切り離せる係留区に移されるのが通常です」
「帆を張ってるって事は、これから船を移すところか、それとも――奴等の逃走手段だって可能性が高いって事か」
暗い運河の水面に、白い帆を張り揺れていた帆船。船首像の獅子の頭が脳裏にくっきりと浮かぶ。
「基本的に今の時間は、緊急の要件で無い限り商船は運航しません。この時間運河を通行しようとすれば、運河の運行管理所に別途申請が必要です。何の問題もない商船であれば申請を出しているでしょうね。申請を出していなければ、人形師の船という確率は高くなります」
「堰が開くのに乗じて、一気に街門まで下れる――」
街門も堰と同様、放出される水を避ける為に開け放す。
いわば、流れに乗ってしまえば、検閲を受ける事なく街門を抜け、王都を出る事ができる。
レオアリスは瞳に鋭い光を宿し、立ち上がった。
「すぐに絞り込めるか？」
「地政院に堰の開放の有無と時間、旧マレル運河を運行する申請が

出ているかを確認しましょう。それと今、ヴィルトール中将に逃走経路を中心に当たってもらっています。船の条件を伝えて絞り込んでもらいます」

二刻後――クライフは既に捜索から戻り、レオアリスの執務室にいた。ヒューイットもまだ正規軍の指令部に戻らず、結果を確認する為にこの場に控えている。

地政院では堰の開放を確認した。解放されるのは今晩、十一刻――もう後一刻も無い。

ただ、まだマレル地区の船が確実に人形師の物か、それが確認できておらず、今はヴィルトールとフレイザーの捜査結果を待っている状態だった。

「おっせぇなぁ、ヴィルトールの奴。早くしねェと堰が開いちまうぜ」

クライフは扉を開けて廊下を覗き、それから室内をうろうろと歩いた。隊を出すなら、あと四半刻の内に動かさなければ間に合わない。

「上将、いっそ先に出ませんか」

それに答えたのはロットバルトとグランスレイだ。

「先走って動いた結果が見当違いとなったら、余計状況が悪化しますよ。我々の動きに気付けば次は同じ手段を取らないでしょう」

「落ち着いていろ。ヴィルトールとフレイザーの二隊で当たっているのだ、必ず探し出せる」

クライフは二人の顔と、それからレオアリスの表情を見て、反論せず壁際に寄りかかった。

レオアリスの上にはクライフと同様、少なからず焦燥があり、ただそれをじっと抑えているのがクライフにも判る。当然、グランスレイやロットバルトも平然と待っている訳ではない。

正規軍と人形師との戦闘から既に六刻――時間は十分すぎるほど経ってしまっている。

今待っている情報ですら、もしかしたら見当違いかもしれないという焦りも大きい。こうしている間にも、人形師達は別の方法で王都を出ようとしている事も考えられる。

もしかしたら攫った娘達は切り捨てて身軽になり、平然と街を出るかもしれない。

（いや――、それはほぼ無い。目立つ人形がある）

船を使うのが一番確実だ。欲しいのは確証――

レオアリスは何度目か、壁際の置時計に視線を投げた。

静まり返って張り詰めた室内に、時計の歯車が回る音がやけに大きく響く。

カチカチというその音が、残りの時間を切り刻んでいるようにも、時が永遠に同じところを刻んでいるようにも感じられる。

降り止まない雨の音――

ふっとレオアリスは視線を上げた。

窓の外から流れる雨音に交じって、廊下を急ぎ足で渡る足音が聞こえ、すぐに扉が開いた。クライフが跳ねるように寄りかかっていた壁から身を起し、レオアリスも執務机の前に出る。

ヴィルトールは室内に入り、レオアリスの前へ行くと手にしていた書類を差し出した。

「遅くなって申し訳ありません。ですが見つけましたよ。確かに船を買ってます。中型の帆船で、獅子頭の船首像があります」

ぐっと室内の空気が引き締まる。

「購入したのはやはりウルドという四十前後の男です。相当急いでたらしくて、年季の入った船を言い値で買ってくれたと売った方はだいぶ喜んでましたよ。あれはかなり吹っ掛けたんだろうなぁ。ただ、年季が入っていても現役だし足が早い船だと言っていました。納船はもう済んでいて、場所は」

「マレル地区、旧西南運河」

「そうです」
レオアリスが後を引き取り、ヴィルトールは頷いた。ヴィルトールが手許の書類を見ながら、執務机の上に広げた図面の一箇所を指で示す。
「旧保税倉庫地区」
先ほどレオアリスが「物見」で見た地区と船の係留されていた位置だ。
「当たりだな」
レオアリスは顔を上げ、ぐるりと中将達の顔を見回した。全員が背筋を伸ばし、光を宿した眼差しを返す。
「堰の解放時間に合わせて、隊をマレル地区運河下流域と運河出口に配置しろ。クライフ、中軍を」
「承知しました」
「待ってくれ、クライフ」
それまで一言も発さなかったヒューイットが敬意を払いつつ、だが素早く踏み出し、右腕を胸に当てた。
「大将殿、その役割はぜひとも、正規軍中隊にお任せください。万が一帆船が王都を出た場合、今度は正規軍第二大隊の管轄に入ります。出口付近を固めるのは正規軍の方が連携が取りやすいでしょう」
レオアリスは躊躇い無く頷いた。
「判った。そこは正規軍に任せよう。師団は補佐に回す」
「有難うございます！」
「ただし、兵は船を止めるだけだ。船には近付かないように徹底してくれ。人形は俺一人で抑える」
ヒューイットが敬礼を向ける。
「よし――行こう。今夜で夜行も終わりだ。アスタロトが待ちくたびれてるだろう」
息を一つ吐き、レオアリスは靴を鳴らして廊下へと向かった。

二

「いつも思うが勿体ないねぇ。このまま売ってもいい金になるぜ」
ウルドは担いでいた少女を、揺れる船倉の床にどさりと下ろした。
エマの法術によって深い眠りに落ちているせいか、少女が目を覚ます様子はない。ただ少女の目元には憔悴と泣き腫らした跡がある。
攫われて来てからずっと閉じ込められ、恐怖はこびりつくように彼女達を捉えていた。眠っている方がましな状態とも言えるだろう。
エマはウルドを睨んだ。
「ちょっと、荷物みたいに扱うんじゃないよ。それに人形のがずっと高値で売れるさ。永遠に老いも変わりもしない。十年もすりゃこの子らだって感謝するかもね」
「ふん、口調がユンガーに似てきたなぁエマ。ま、俺は生身の女の方がいいね。十年くらい経った方がよ」
「あんたの趣味なんざ聞いちゃいないよ、そう真っ当でもないくせに」
エマも少女を下ろし、片手で豊かな髪を跳ね上げる。
「無駄口叩いてないで、さっさと残りの娘を運んでちょうだい。時間が無いよ」
堰の開く十一刻まであと半刻、残り三人の娘と――アスタロトを船に移さなければいけない。
「判った判った。そんであのお嬢ちゃんはどうするんだ？　まだ眠らせてねぇみたいだが、暴れてせっかくの船を焼かれちゃ困るぜ」
エマは少しだけ声を落とし、少しだけ眉を潜めた。
「いいんだってさ。ユンガーは観察したいんだろ――いつもの事さ。まあ娘を一人、脅しに連れてれば手も足も出せやしない」
ユンガーはいつも、人形作りに取りかかる前は、対象を観察した。
一つ一つの表情、仕草。
何をする訳でもなく、ただ観察する。
本来の性格や表情を丁寧に拾い上げ、人形の表情や仕草に活かす

為だ。
ウルドはうんざりと眉をしかめた。彼にしてみれば、ユンガーの趣味などさっぱり理解できない。あれを欲しがる相手がいるのだから、全く世の中判らないものだ。
そうは言っても商売が成り立つからこそ、ウルドはこの仕事を引き受けているのだが。
「お前、ユンガーとは長いんだろ。奴はいつからああだったんだ？」
ウルドはもともとエマとは昔馴染みだったものの、ユンガーと組んで仕事をするようになったのはここ一年ほどの事だった。
エマがウルドの商業網を頼ってきたからで、以前から王都とその近隣で裏の仲介業を営んでいたウルドは、ユンガーの人形を引き受けた。
だが、ユンガーの過去については全く知らない。
「長いったって五年程度よ。会った時にはもう今と同じように人形を作ってたからねぇ」
エマが初めて見た時も、人形はユンガーの横にいた。
今と全く変わらない、あの右側の人形だ。
ユンガーが最初に成功させた、人間から作り出した人形なのだと聞いた。
もう一体は何度か入れ替わったが、あの右側の一体だけはずっと変わらない。
何度か売って欲しいと請われているが、ユンガーは全くその気は無いようだった。むしろその要望は彼を怒らせるものだ。
あれだけは特別――
「まあ、俺は分け前さえ貰えりゃいいがね」
「そう思うならさっさと仕事しなよ。あと残り三人を運んでおいて」
「お前はどうすんだ、俺ばっかりに押し付けんなよ」
エマは紅い唇を吊り上げてみせた。
「あたしはお嬢さんを迎えに行くのよ。お友達連れてね」
アスタロトは完全に、待ちくたびれていた。
もう何刻経ったか判らないのに窓を叩く合図すら無い。だだっ広く何もない部屋は考える事しかできなくて、考えるだけで行動できない状態は辛い。
せっかくここまで来て、攫われた娘達は目と鼻の先にいるのにだ。
きっかけがあれば、助ける為に動けるのに。
「遅い――遅すぎる。アイツ何やって」
「何が遅いんだい？」
ふいに声を掛けられ、はっとして顔を上げると、いつの間に来たのか扉の横にエマが立っていた。
アスタロトは息を呑んだ。エマの後ろに影のように立つ一体の人形――そして、人形の腕に抱えられているのは、十三、四の少女だ。
眠っているのか、黒い真っ直ぐな髪が俯いた頬に落ちかかり、瞼を閉じているせいもあってあどけなさすら残っている。
エマが少女を連れている理由は、聞かなくても判った。
「――」
睨み付けたアスタロトの視線を、エマは笑みで受け止めた。
「おいで。これから王都を出るのよ」
アスタロトはそっと息を抑え、素早く窓を見た。時計など無く時刻は判らないが、深夜に近いように思える。
（何やってるんだ、レオアリス……）
エマは豊満な胸を強調するように腕を組み、満足気な笑みを浮かべた。アスタロトが軍の救援を待っている事などエマ達にはお見通しだ。
だが、これまでこの倉庫の周辺や表の船に、兵士らしき者が近付く気配は無かった。兵士どころか、雨のせいか人影すらない。
あと四半刻で堰が開き、船が出る。
王都を出てしまえば、エマ達の――、ユンガーの勝ちだ。

「残念だったけど、あんたの助けは来なかったねぇ。正規軍も頼りないじゃないか。大事な総大将がここにいるってのに」
嘲る言葉に対し、アスタロトは挑発するような瞳をエマへ向けた。
「正規軍が頼りないかどうか、試してみれば」
エマの赤い唇が上がる。
「ふふ、そんな言葉で待ったりしないわよ。あんたは正規軍の兵を犠牲にする気なんて無いんだろ。さあ、もう船が出る、おとなしく歩いてちょうだい」
「船――」
アスタロトは口中でその言葉を繰り返した。
予想していなかった事態に、アスタロトの面に少なからず驚きが走る。エマはアスタロトの驚きを見て取り、再び紅い唇をにんまりと吊り上げた。
「そう、船よ。この雨で運河の堰が開く。どういう仕組みか、あんたには大体判るでしょ？　王都ってのはホントにすごいよねぇ、きちんと考えられて造られてる。お陰で堰を開いてる間は何にも邪魔されずに船を出せる。この雨はまるでユンガーの味方をしてるみたいじゃないか、ねぇ」
だからもう諦めなよ、とエマは優しい声を出した。
「あと半刻後には王都とも永遠にお別れ――せめて別れを惜しんでおいたらいい。さあ、おいで」
同情たっぷりの言葉とは裏腹に、エマの後ろでは人形が眠っている少女の顔に手を掛ける。
一度はエマを睨み付けたものの、アスタロトは両手を握り締めて感情を押さえ込み、部屋を出た。
（船――）
非常に不味い状況だ。まだこの場所すら伝えられていない状態で王都を出てしまえば、ユンガー達を追う手がかりは途切れてしまう。
外部から完全に切り離され、助けの期待できない状態で、ユンガーの人形から娘達を取り戻さなくてはいけなくなる。
（私一人で、人形を抑えられるか？　娘達に傷を付けずに――）
ずっとそれを考えていたのだ。けれどどう考えても、昼間の状況から抜け出せない。
人形はおよそ二十体はいる。せめて人形達を一ヶ所に集めなくては。
（やっぱりユンガーを捕まえて、脅して解放させるとか）
それでもユンガーが娘を殺そうとすれば、アスタロトは手を下ろす他無い。
アスタロトはエマと人形に挟まれて、倉庫から表に出た。
外に出ると、あれだけ降っていた雨は小降りになってきていて、上空の雲が晴れてきているのが判る。もう今にも止みそうだ。
すぐ目の前には運河があり、暗い水の上に、白い帆を張った帆船が揺れていた。ぼんやりと浮かび上がるような姿に、心臓の鼓動が早まる。
周囲に意識を向けても、運河の水が船底や岸壁を叩くだけで、アスタロトの待っている音を聞き取る事はできない。
来ていないのか――間に合わなかったのか。
ここを見つけられなかったのか。
（そんなはずはない。レオアリスは絶対に来る）
エマがアスタロトの背中を押す。少女を抱えた人形がアスタロトの脇を抜け、船へと向かって歩いていく。
否応なくアスタロトも船に向かった。
「準備はいいか？」
地政院の運河管理官は堰の水量調節壁を開く為、一抱えもある円形の把手を掴み振り返った。
雨は漸く止んでくれたが、予想通り水位は大分上がっている。目

盛りの危険域まで、あと一寸、親指の先程度しかない。
もう一人の管理官も頷いた。他の堰も用意を済ませているだろう。
「ああ、丁度いい頃合いだ。合図の鐘と同時に開こう」
堰を開く時だけは、深夜であっても王都各所の時計台の鐘を鳴らす。
開く時間を合わせる為と運河周辺や王都全域への周知、また万が一、運河を通行しようとする者に危険を報せる為でもある。
待つほどもなく、すぐ近くの時計台が合図の鐘を鳴らした。
一つ。
管理官は両手に力を込め、重い把手を回し始めた。

三

濡れていて滑りやすそうだと思いながら、アスタロトは梯子に手を掛けた。
船体の腹の縁（へり）に立て掛けられた、二十段ほどの長い梯子だ。船の揺れに合わせて不安定に揺れるそれを登る。
身体を持ち上げて縁を乗り越える。降り立った暗い甲板の中程に、ユンガーの姿があった。
ユンガーは人形を両脇に従え、アスタロトへ笑みを向けている。
「浮かない顔だね。生まれ育った王都を去るのはやはり名残惜しいだろう。だが安心していい。私が君に傅（かしず）く充分な娘達と、永遠に変わらない美しさをあげよう。これまで作った娘達、全てを君に傅かせてもいい。――さぞ美しい光景だろうね」
「……お前は歪んでる。永遠に変わらないなんて、どこにもいないのと一緒だよ」
アスタロトはユンガーに視線を向けたまま、彼との距離を測った。およそ二間。
彼の人形はこの場に七体、半数ほどしか出ていない。
残りは当然、娘達の所だ。
「判らないんだろうけど」
ユンガーを抑えても、娘達を人質に取られればまた同じ事になってしまう。
アスタロトは周囲の気配を探りながら、口を開いた。少しでも長く、船をこの場に止めておきたい。
「一つ聞かせてよ。何で人形を作ろうと思ったんだ」
ユンガーが笑う。優位を確信した者ならではの、宥めるような口調で両手を広げた。
「時間稼ぎなら乗る気はない。その話はまた今度ゆっくり聞かせて

あげよう。ほら、私の人形が待ちくたびれている」
　アスタロトの横で、娘を抱き上げた人形がキリキリと歯車の音を鳴らす。
「船室は娘達と同じだ。本当は君の為に特別な部屋を仕立てたかったが、この通り貨物船でね。だが皆君の為の娘達だ、不満は無いだろう」
　自分を睨み付けたまますぐには動こうとしないアスタロトへ、ユンガーは彼女の後ろにある階段を示した。船倉への階段だ。
「さあ――船室へどうぞ」
　人形の手が娘の首にかかる。
　アスタロトは漆黒の髪を跳ねさせ、くるりとユンガーに背を向けて船室への階段を降りた。
　梯子に近い階段を降りると細い廊下の左右にそれぞれ扉と、正面にもう一つ扉がある。この廊下の扉はそれだけだ。
　左右の扉が通常の船室になり、正面の扉は貨物の為の仕切りの無い船倉になっていた。娘達が入れられたのはこの正面の船倉で、アスタロトは人形に促されるままに、その扉を潜った。
　船尾まで、船の半分以上を占めるほど広い。窓が一つも無くて不思議に思ったが、壁の向こうはもう一層、船を漕ぐ為の櫓が据えられた部屋があるのだと思い至った。
　薄暗い部屋を見渡そうとしてはっと息を呑み、アスタロトは駆け出した。部屋の中央に、数人の娘達が横たえられている。
「大丈夫――？」
　一人、一番手前に寝かされていた自分と同じ年頃の少女を抱え起こし、顔を覗き込む。目を固く閉じたまま返事は無かったが、肌の暖かさにひとまずは安堵を覚えた。
「しっかりしろ」
「眠っているだけだよ」
　ユンガーが扉の脇に立ち、アスタロトを面白そうに眺めている。
「ただ余り動かさない方がいい。人形みたいに首が落ちるかもしれない」
　冗談めいた言い方だったが、それが単なる脅しで無い事ははっきりと判った。少女の首元に、細い糸が巻き付いている。
　アスタロトは瞳に怒りを昇らせた。少女を下ろし、立ち上がってユンガーを睨み付ける。
「いい加減にしろよ！　こんな事して何が楽しいんだお前！」
　部屋の四隅には、娘達を監視するように、一体ずつ、四体の人形が立っている。あくまでも、娘達をアスタロトへの脅しに使うつもりなのだ。
　ユンガーは人形に支えられた身体を僅か揺らした。
「楽しいという言葉は適切じゃない――」
　両脇の人形が動く。ユンガーもまた人形に運ばれるように歩いた。
　今気付いたが、ユンガーは余り足を動かしていない。少しばかりぎこちない動作で、アスタロトの前に立った。
　手を伸ばせば届く距離――炎なら確実にユンガーを捉えられる。
　アスタロトはゆっくり息を整えた。
「この娘達は帰してやれ。今すぐ」
「それは交渉とは言わない。提供できる利も切り札もない言葉に誰が頷くのかな」
「交渉？　笑わせんな。お前は操り人形みたいに誰かを頷かせた事しかないんだろ」
　ユンガーは喉を反らせて笑った。
「ははは！　君は本当に面白い。公爵家の姫君とはとても思えないな。もっと令嬢らしくとさぞ周りを嘆かせているだろう」
　人形に背を預け、ユンガーはゆったりと腕を組んだ。
「でもこの先はもう、そう嘆く必要も無くなる――私が高貴な姫君らしく仕立ててあげよう」
「ばっかじゃないの、そんなの私じゃないよ。大体周りは嘆いてるって、そんなことないし」

ユンガーは座ったまま顔を伏せるように笑った。
ユンガーは今なら、優位を確信して油断しているように見える。
好機に思えた。
（今のうちに、私が――）
呼吸を整え、炎を指先に宿そうとした時、ふと遠く鐘の音が聞こえた。
「！」
夜の静寂を打ち破り、かぁんと高く一つ。
ユンガーの面に笑みが広がる。
「十一刻――堰を開ける合図だ。我々の船が出る」
アスタロトは再び辺りに意識を巡らせた。
本当に、来られなかったのだろうか。
水の音が遠くで鳴り、足元に振動が伝わる。
堰を切った水が流れ降りてくる。
アスタロトは娘達を見、四隅の人形達を見、そしてユンガーを見た。
（レオアリス――）
船は一度大きく船体を揺らし、それから速い流れと風に乗って運河を下り出した。

四

王都を縦に走る運河を、堰から放出された水が勢い良く下っていく。
その水流に乗るように、帆を張った帆船が走っていた。舳先に掲げた小さな明かりが夜の中を移動していく。
船が越えるべき堰は、下層マレル地区からであれば四つ。堰の落差は下層では緩く、開け放たれている事で更に埋められている。
解放された運河は四半刻足らずで船を街壁まで運ぶだろう。
アスタロトは身体に伝わる振動を感じながら、ユンガーと対峙するように立っていた。胸の奥がじわりと冷えている。
船は出た。
ただでさえ通常の運航の止まった夜に、放水の勢いに乗ってしまえば、外部から停める術などない。自ら停止する事さえ困難だ。
ユンガーはアスタロトの胸の内を読み取ったように、優越感に満ちた表情を浮かべた。
「さあ、もう船は目的地まで停まらない。停めるつもりもないしね。たいしたおもてなしもできないが寛いでいてくれ。……そうだね」
人形はユンガーを支えて動き、船倉の壁際にしつらえてある低い櫃（ひつ）を椅子代わりに座らせた。
「君はさっき、何故人形を作るのかと聞きたがった。その話でもしよう」
アスタロトの瞳は当然それを望んでいなかったが、ユンガーは気にせずに、記憶を追うように瞳を細めた。
「私が人形作りを始めたのは十歳の頃だ」
アスタロトの意識は外へ向けられている。船が走り出し停める事のできない今も、まだ望みを繋いでいる。
「私の生まれ育った村は人形作りが盛んだった。周辺の村や街では繊維業や陶器作りが隆盛し、素材に事欠かない事が一因だろう」

ユンガーは右側に立つ人形の腕を撫でた。
「最初は村の人形師に付いて人形作りを学んでいたが、十八になる頃に街に出た。人形を売るには街道沿いの大きな街の方が都合がいいし、値段もそこそこ付けられる。実際、私の人形は精巧さがすぐに評判になり、良く売れた」
アスタロトはまだ周囲の気配を探りながら、ユンガーに視線を注いだ。
「――その頃からこんな事やってたのか？」
「まさか。私がこの技術を手に入れたのは、もっと後だ」
ユンガーの瞳に、妖しい陽炎が宿る。
「私には妻がいた――黒髪に黒い瞳のとても美しい女性でね、白い頬や整った目鼻立ちはそれこそ人形のようだった。少年の頃は彼女を得る為に――得てからは家庭を守る為に、私は収入源としての人形作りに打ち込んだ。やがて娘も生まれ、幸せな日々を過ごした」
釣り込まれるように、アスタロトは口にした。ユンガーの言葉の内容に憤りも覚えていた。
「家族がいるなら、何でこんな事するんだ。この娘達の家族だって、お前と同じに娘が大切なんだぞ」
ユンガーが笑みを吊り上げる。
その笑みに背中を冷たいものが走るのを感じて、アスタロトは一歩退がった。
ユンガーは右側に立つ人形の腕に手を置いている。
彼は全て過去形で語っていると、アスタロトは思い至った。
妻と娘――。妻と娘がいた、と。
ユンガーの妻と娘は、今どうしているのだろう。
「君は今想像している。それはおそらく――間違いじゃない」
妖しい、陰の揺れる瞳。
（陰――狂気だ）
四隅に立つ人形。
ユンガーの傍らに立つ人形――艶やかな黒髪の。
硬質な白い頬に変わらぬ笑みを浮かべている。
「っ」
胃の奥が持ち上がるような吐き気を覚えた。
闇雲に、ここから飛び出したくなったアスタロトの耳に、どこかで笛の音が高く響いて届いた。
甲板を貫くように、長く、一度。
（ああ、笛だ――）
アスタロトは目の前の男に意識を吸い寄せられたまま、身に染み込んだ事を呟いた。
（一の笛は、『標的の発見』）
そしてもう一度、笛の音が続く。
（二の笛――）
軍の作成行動時の決まりだ。
「接敵」
その瞬間、船は跳ね上がるように、大きく船体を揺らした。
ユンガーとアスタロト達を乗せた船がマレル旧運河を下り出して、三つの区画を過ぎた時だった。
水流の轟きを切り裂いて、高らかに、笛の音が響いた。
その音が夜に吸い込まれ消える前に、運河に沿った通りの路地や倉庫の屋根から、風を切る音と共に一斉に何かが吐き出された。闇を白い蛇のように走る。
縄だ。先端に錘（おもり）――いや、鉤爪の付いた数十もの鉤縄が、水流に乗って下る船の支柱に巻き付き、舳先や船体を捕えて食い込み、絡め取った。
再び呼び笛（よびこ）が四方から響く。

「引け！」
ヒューイットが呼び笛の音を圧して指示を飛ばす。
運河沿いの建物の屋根や路地に伏せていた兵士達が身を起こし、掴んだ縄を一斉に引いた。
左右からおよそ五十もの縄に絡め取られ、船はがくりと船体を上下に揺らした。
船の重さに引かれ、兵士達の足が滑る。けれど既に船の勢いは死んだ。
水流を腹に受け身悶えし、だが縄にがんじがらめになった船体は、不服そうに身を捩りながらも、やがて止まった。

床に放り出されたユンガーの身体を、一瞬遅れて伸びた人形の腕が支える。
「何事だ？！」
アスタロトは咄嗟に身を伏せ、少女達の身体を抑えた。
再び跳ねるような衝撃が襲い――、その後、船が停止したのが判った。
（来た！）
アスタロトは深紅の瞳を輝かせ、床の上で身を起こす。
「これは、君か」
ユンガーが驚愕の醒めやらぬ眼で、アスタロトと、天井――頭上の甲板を睨み据えた。今や船は完全に止まっている。
「どうやって、船を」
ただ、止まった船へと乗り込む兵士達の鬨（とき）の声が聞こえる訳でもなく、周囲は逆に静まり返っている。
それでも、アスタロトにははっきりと、その気配が感じられた。
「さあ――判んない」

アスタロトはユンガーと真っ正面から向き合い、確信と共に告げた。
「でも、この先はお前の人形じゃ足りないよ」
アスタロトの瞳に揺らめいた炎の光、それを見つめ、それからユンガーは唇を歪めた。
「――君はすぐに、後悔する」
ユンガーの背後の扉の向こうで、廊下を這い歩くようなカシャカシャという音が立つ。
人形が甲板へ上がって行く音だ。アスタロトはそれを注意深く数えた。
（四体……五体か――まだ少ない。もっと引っ張り出さなきゃ……）
ユンガーの手勢は、合わせて十八体の人形達だ。それを全て、ここから――娘達の傍から引き離したい。
あの剣の前に。
アスタロトの瞳から何を感じ取ったのか、ユンガーは声に僅かな苛立ちを覗かせた。
「昼と同じ事だ――私の人形にはやはり手も足も出ないのだと思い知るだけだ」
ユンガーは左側の人形を手招き、自分の前に膝を付いた人形の瞳を覗き込んだ。
五体の人形達は階段を這い上がり、甲板へと出たところだ。ユンガーにも、人形達の瞳に映る光景が見える。その光景に、ユンガーは小さな呻き声を上げた。
まるで夜の中に磔にされたように、船は縄に幾重にも絡め取られ止まっていた。
運河を流れる水が船の腹を叩き、船体は不規則に揺れている。
ユンガーはぎり、と唇を噛み、低く吐き出した。
「――探せ。全ての首を落としてやる」
しんと静まり返った船上で、人形達は辺りを見回した。

甲板の上で五体の人形達が辺りを見回しているのが、レオアリス達のいるこの場所からも見て取れた。
レオアリスが立っているのはマレル旧運河沿いの空き倉庫の上――、正規軍と近衛師団が身を伏せていた屋根の上だ。
ヒューイットが率いる正規軍の四小隊四百名とクライフの中軍二小隊百名が、運河の左右に展開していた。
「出てきたのはたった五体か。用心深いな。それとも自信かな」
五体で充分、軍を相手にできると。
「昼の件で証明していますからね。戦力はヒューイット中将の報告からは少なくとも人形十二体――当然それ以上も考えられます」
「地道に行こう」
ロットバルトは頷いて一歩退いた。ここから先はしばらく、レオアリス一人の舞台になる。
正規軍の兵士達も、近衛師団もまた、レオアリスの動きを見守るように退いている。
レオアリスは右手を上げると、自分の鳩尾（みぞおち）に当てた。
ずぶりと――右手が沈む。
右手は何の抵抗もなく手首の辺りまで飲み込まれ、そこから夜の闇に青白い光が零れた。レオアリスの姿を闇に浮かび上がらせる。
右手を引き抜くに従って、零れ落ちる光の筋は闇に差し掛かった。
運河に停止した船の、白い帆の上に――甲板の人形達の上に。
人形達が震え、一斉に光の差す方を振り返った。
光が形を成していくにつれ、周囲にいた兵士達から抑えた感嘆の声が流れる。正規軍の兵士達にとっては、これほど間近に目にするのは初めてだった。
レオアリスの周囲の空気が、肌を切るように研ぎ澄まされている。
意識して抑えなければ、思わず退きそうになる、圧迫感――
それは引き出された右手にいつの間にか握られた、一振りの長剣から発せられていた。
何の飾り気もない、だが見る者の心を吸い寄せる、冴えた刃。
剣士の剣（つるぎ）。
剣士は主に、左右の腕のいずれかを剣に変化させる。
だがレオアリスは違った。
レオアリスは二対の肋骨を変化させ、二振りの剣を持つ。その剣は剣士の中にあってさえ稀だ。
剣が青白く明滅する。それを確かめるようにちらりと視線を落とし、レオアリスは背後のロットバルトを一度振り返った。
「状況を見計らって、娘達の救出を頼む」
「承知しました」
「大将殿、これを」
ヒューイットが近寄り、白い布に包んだ小さなものを手渡す。
「これは」
包みを通して指先に硬い質感が伝わる。
「法術士が解析しました。それと、こちらは――貴方なら使えるでしょうと」
ヒューイットはもう一つ、何事か書かれた紙切れを見せた。声に出さずにそれを読み取り、レオアリスの瞳に面白そうな光が閃く。
「――なるほど。有り難く使わせてもらおう」
「どうか、公を」
ヒューイットは低く告げ、レオアリスの傍から離れた。
「それじゃ、行ってくる」
レオアリスは足元から船へと張られた縄に靴先を掛けると、宙に浮く細い縄の上を走った。
驚いたのは周囲にいたヒューイットや兵士達の方だ。だが驚きを余所に、レオアリスは不安定に揺れる縄を、体勢を崩す事もなく半

ばまで渡った。
加重にたわんだ縄と共に身体が沈むのに合わせ、膝を屈めると、縄を蹴って一息に跳んだ。
暗い水を軽々と越え、人形達の正面、甲板の上に降り立つ。
人形達が一斉に掴み掛かる、その上を、夜の闇を切り裂くように、青白い閃光が一閃した。
瞬きの後、五体の人形達がぐらりと傾ぎ、次々に音を立てて甲板の上に崩れ落ちる。
そのまま、人形は動きを止めた。
真っ二つに割れた胴の中は空洞で、無機質な歯車と骨格が覗いている。
レオアリスは無人になった船上に立ち、倒れている人形の顔に視線を落とした。
人形の虚ろな瞳の奥にあるものを捉える。
「人形師（ユンガー）、そこで見てるんだろう。返してもらいに来たぜ」

「――！」
人形の視界を通して船上を見ていたユンガーは、背筋を凍らせるような光に思わず身を引いた。
人形の瞳がレオアリスの瞳の光を映している。
無機質な瞳を通してユンガーを見据える、酷薄さすら感じられる、切り裂くような光。
まるで、人形がユンガーを睨むような――
「……っ、ばかな、何だと言うんだ」
人形が、ユンガーを。
そんな事は有り得ない。額に冷たい汗を滲ませ、ユンガーは怒りと怯えをすり替えるようにアスタロトを振り返った。

「奴は何者だ」
「剣士。知ってるだろ、近衛師団第一大隊大将。近衛師団が動く事がどういう事か、それくらいお前も判るんじゃない？」
アスタロトの身にも、レオアリスの剣が発する気配が感じられる。ユンガーは人形を通して、この肌を切る気配と対峙しているのだろう。
「お前は王の懐から、剣を引き抜いたんだ」
「――剣士……王だと」
ユンガーは頬を強ばらせ、再び人形の瞳の中の姿を睨んだ。

剣の纏う青白い光に照らされたレオアリスの面には、普段の彼とは全く違う、ある種の冷徹さに似た色が浮かんでいる。
戦いそのものを楽しんでいるかのような――
それはレオアリスの執務室を訪れ、経過を報告していた時にヒューイットが感じた戦慄に似ていた。
剣士としての本能に起因する感覚。
レオアリスは瞳を細め、甲板の上を見回した。
倒した五体に続く人形はまだ出て来ない。慎重になっているのが感じられるが、それは問題ではなかった。
懐から、先ほどヒューイットから渡された包みを取り出す。
「さてと、夜行を見せてもらおうか」
指先に挟むように掲げたのは、あの水晶だ。
娘達を攫う為に目印として渡された水晶――解析した正規軍の法術士は、強制的に発動させる為の式を加えた。ヒューイットがレオアリスに見せた紙には、その術式が記されていた。
レオアリスは紙に記されていた術式を、静かに口ずさんだ。
短い詠唱を受けて水晶はゆっくりと内側から光り、次第にレオアリスの頬を照らすほどに光を増した。

五

水晶が地上で星の欠片のように輝く。
音もなく降り注ぐ光は甲板に遮られながらも、人形達を誘った。
ユンガーの周りで人形がぴくりと反応する。
リン、と鈴が鳴る。
人形は鮮やかな帽子を被った頭を巡らせた。
「待て、どうしたんだ」
船倉の四隅にいた人形達が身を震わせて動き出すのを、ユンガーは慌てて押し止めた。
だが既に別室にいた人形達が甲板に向かって歩き出したのが、廊下から聞こえる鈴の音で知れる。
「待て！」
再び命じたものの、人形は次々と階段を上がっていく。
あの水晶に王都の法術士が何かをしたのか、人形達はユンガーの制止を半ば受け付けていないようだった。
まだレオアリスの剣への対応を思い付いていない内に、事態はユンガーの手を離れていこうとしている。
五体がたった一刀の下に切り伏せられ、ユンガーの人形はあと十三体だ。
剣士の剣の前に、まるで紙のように切り裂かれた。
僅か四半刻前までは、全てがユンガーの手の内にあると思われていたものが。
「――くそ」
吐き出し、憤りと焦りの色も濃く、ユンガーは人形に抱えられて立ち上がった。
苛々と手立てを求めて辺りを見回し――、ふいにくるりと札を返すようにユンガーは落ち着きを取り戻した。
それどころか、瞳に粘つく光を浮かべ、その瞳を室内に留まっていた人形に向ける。
四隅の人形の内二体が動き出し、扉へと向かった。
嫌な予感に捉われ、アスタロトはユンガーを睨んだ。
「――何を狙ってる」
二体を動かした事でこの部屋に残っているのは、彼の脇にいる二体を合わせて四体。
結局九体の人形が甲板に向かったが、先ほどの様子を見れば例え九体の人形を向けたとしても、レオアリスの剣に適うとはもうユンガーも考えていないはずだ。
ユンガーが唇を歪める。
「アスタロト公。ここにいる人形達は、もともと人間だった」
そうだ。つい先ほど、そのおぞましい事実をユンガーから聞かされた。
ただ、今またそれを言い出したユンガーの意図が判らず、アスタロトは黙ったままユンガーを睨み付けていたが、次の言葉に叩きつけられるような驚愕を覚えて深紅の瞳を見開いた。
「彼は知らずに、娘達を殺す事になる」
返す言葉を見失い、アスタロトはじっとユンガーを見つめ――、それからユンガーの悪意に満ちた意図を理解して瞳に怒りを昇らせた。
「ふざけるなよ！　人形にしたのはお前じゃないか！　今さら何言って――」
「戻す術があると言ったら――？」
アスタロトは息を止め、もう一度まじまじとユンガーを見つめた。
嘘だ、と強く思う。こうなって、元に戻る術などないという事はアスタロトにも判る。
ただユンガーは妖しく静かな笑みを刷き、揺るぎなく言い切った。
「私なら、戻せる。私は私の妻を再び戻す為に研究を重ねてきた――」

傍らの黒髪の人形へ、ユンガーは慈しむような視線を向け、その手を包んだ。
「彼女が再び、元通り私の傍に帰る為に、ずっと」
「それだって、お前が自分でそんな姿にしたんだろ――」
「その通り。だがそこで終わりじゃない。研究はほぼ完成している」
それは多分、無視すべき言葉だ。ただアスタロトを惑わせ自らの優位を導こうとしているだけの言葉に過ぎない。
けれど――、ユンガーの瞳の奥底にある光が、アスタロトの意識の奥を引っ掻いた。
「もう私の人形が剣士に敵わないのは判っている。だから取引だ。私は妻を元に戻せればいい。君は娘達を助けたいだろう？　君が彼を止めてくれれば、人形達を元に戻し、この娘達も解放しよう」
「――嘘だ……」
「嘘だと思うなら、ここで見ているといい。君は目の前に単純に見えるものしか救おうとしないのか、それとも彼が手を掛ける分には自分には関係無いと思っているのかな」
アスタロトは喘ぐように喉を震わせた。
「……お前の言葉をどう信じるって言うんだ」
「言っているだろう、信じられなければ仕方ない。ただ、早く止めないと、彼は何も知らないまま、娘達を全て殺してしまうぞ」
アスタロトはぴくりと肩を震わせた。ユンガーは笑みを浮かべたまま、アスタロトの答えを待っている。
甲板で激しく叩きつける音が響き、船が船体を揺らす。
「出たのは九人――。もう、残っていないかもしれないな」
「――最低だ」
一言吐き出し、アスタロトは駆け出した。

既に放水による急流は収まり、船は落ち着きを取り戻した運河に船体をゆっくりと揺らしている。
船の横腹を舐める波と軋む板目の音に交じり、リン、と鈴の音が流れた。
船倉へ続く階段から、すうっと女の上半身が突き出し、レオアリスの手元――光る水晶を見つめた。
すぐに全身を現し、くるりと服の裾を揺らす。
次々と、七体の優雅な衣装を纏った人形達が甲板に現れ、舞踏会の一場面のように身を揺らした。
鮮やかで華やかな衣装、身を翻すごとに赤い衣装が大輪の花弁を甲板に広げる。
取り囲む兵士達も思わず息を洩らした。
だが、七体――。レオアリス達は知る術は無いが、ユンガーが動かした人形は合わせて九体だ。
水晶に誘われたのではなく、ユンガーの指示で動き出した二体の姿はまだ甲板に現われていない。
「夜行か――」
レオアリスは甲板の中央、ちょうど帆柱のある位置に立ち、階段から這い出した七体の人形はレオアリスの行く手を阻むように、階段の手前で半月形に広がった。
そしてレオアリスの視線の先でぴたり、と動きを止め、様子を伺っているのか、そこからじっと動く気配は無い。
レオアリスの手の中ではまだ水晶が揺らめき光っていたが、人形達はあたかも美術館の彫像のように固まっている。
「――女じゃなくて戸惑ってんのかな」
レオアリスは自分を伺う人形達を見渡し、微かな笑いを含んだ息を吐いた。肩から力を抜くような仕草で下ろした剣の先が、コツリと甲板に触れる。
その瞬間、足元の甲板が音を立てて内側から弾け飛んだ。割れ目から突き出した手がレオアリスの右足首を掴む。
腕は更に宙に伸び、レオアリスの身体を放り投げるように吊り上

げた。
その拍子に手から零れ落ちた水晶が甲板で砕ける。
彫像のようだった人形達がぴくりと震え、レオアリスを見上げた。
「あれは――」
兵士達からどよめきが上がる。レオアリスの手は空だ。
剣は輝きを失い、甲板に突き刺さるように立っている。
ヒューイットはロットバルトを振り返った。
「援護、いや、突入を」
ヒューイットの声は動揺を含んでいたが、ロットバルトは一度対岸に視線を向け、表情も変えずに首を振った。
対岸にいるグランスレイに動き出す様子は見えない。片手を剣の柄に当てて立ったまま、船上に視線を注いでいる。
「――必要ありません。まだ対象が甲板に出ていない。このまま予定通りでいいでしょう」
ヒューイットは再び船上を見た。
「しかし、あれでは」
武器もなく動きを封じられ、一見して、危険な状況に見える。機を逃せば瞬く間に状況は悪化するに違いない。
ただヒューイットはその考えに、もう一つ付け加えた。
――通常の想定なら。
ヒューイットの思考を裏打ちするように、ロットバルトは頷いた。
「我々には少し、通常とは違った戦術が必要です」
腕はレオアリスの身体を二間ほどの高さに吊り下げたまま、ゆっくりしなった。みし、と再び甲板が鳴る。
もう一本の腕が割れた甲板から突き出す。
「――」
片腕を追って伸び、帆を張った支柱の横木を掴んだ。
腕が縮み、発条（バネ）が弾けるように、甲板を割って現れた本体が帆柱に取り付く。手足は異様に長く、四つ足の蜘蛛を思わせる姿だ。
更にもう一体の人形が、甲板の割れ目からレオアリスを挟むように立ち上がった。
「……すごい造りだな」
目の前に張り付いた人形を見つめ、レオアリスは感心混じりに呟いた。手の関節が外れ、人間の骨に当たる木組みが伸びる造りになっている。
木組みに筋肉繊維のように絡んでいるのは、無数の糸だ。
通常の剣で斬り付けても糸の束に弾かれるか、途中で遮られてしまうだろう。
「しかもこれで動けるのか」
再び周囲の兵士達が騒めく。
人形の異様さに驚いたからではなく、帆柱に張り付いた人形の胸元に、剣が突き立っているのを見付けたからだ。
剣は取り落としたのではなく、足元に潜む人形を既に捕えていたのだと気付き、ヒューイットも身を乗り出した。
「なら動力部は腹――そこを砕かないと駄目だな」
宙に吊り下げられたまま、レオアリスは腕を伸ばし目の前の剣の柄を掴んだ。
再び、刀身が青白い輝きを纏う。
光に触発されたかのように、正面にいた七体がゆらりと立ち上がった。
顔がレオアリスの位置まで上がる。
合わせて九体の人形達はレオアリスを取り囲み、ゆらゆらと揺れながら中心にいるレオアリスを覗き込んだ。
その動きはまるで輪舞（ロンド）を眺めているようだ。今がどんな状況か、一時忘れてしまう、奇妙に美しい光景だった。
「こんな事じゃなけりゃ良かったのにな――」
微かな哀惜の響きを滲ませて呟き、レオアリスは人形の胸元に突

き立てていた剣を引き抜くと、そのまま斬り下ろした。
輝く刃が触れた人形の身体が、縦に一本、筋を刻む。
うっすらと硬質な笑みを浮かべたまま、人形は肩から胸の下辺りで、左右にずれた。
人形の張り付いていた帆柱も、ごとんと重い音を立て、まるで初めからそこが外れる仕組みだったかのように滑らかな断面を覗かせた。
レオアリスの足を掴んでいた手が緩み、外れる。
剣が翻り、背後の一体の胴を断った。
次の瞬間には、柱は帆を纏い付かせながら、二体の人形達を巻き込んで甲板の上に倒れた。
船体が跳ねる。
めりめりと甲板を割り、柱はてっぺんから運河の水面に滑り落ちた。
激しい水しぶきが立ち上り、束の間先ほどまでの雨を思わせる水音が甲板を叩いた。

「うわ、上将無茶やるなぁ……俺あそこに降りようと思ってたのに」
クライフは眼前に展開するあまりの光景に、思わず平時のような溜息を洩らした。
彼等が待機する倉庫の足元からは、やはり船を繋ぎ止めている縄が何本も張っている。ちょうど帆柱に巻き付いたものも一本あったが、それは今の拍子に切れてしまった。
「何バカ言ってるの、あんな所じゃすぐに動けないし、格好付けてあんな所に降りたら後が怖いわよ？」
傍らにいたフレイザーが右隣の倉庫の上に立つグランスレイと、対岸のロットバルトを視線で示す。
「判ってるよぉ」
「じゃ早いとこ見繕いなさい」
「はいはい。全く、ロットバルトも無茶振りするよなぁ。こんな降下訓練した事ねぇっつうの。途中で外れんじゃねぇか？」
クライフは倉庫の屋上にしゃがみ、持っていた鉄の鉤を船を繋ぎ止めている縄に掛けた。引っ掛けたものも張られた鉤縄と同じものだ。鉤の曲がりが深い為に、思った以上に安定感はあるようだ。
「大体自分はやらねぇし……」
「参謀は全体を見れる位置にいないと意味ないでしょ。ぶつぶつ言ってないで早くなさい」
傍らではフレイザーも同じように手にした鉤縄を掛け、それから身体に縄を結んだ。一方を引けばすぐに解ける特殊な結び方だ。
「準備はいいわね」
手早く結び終え、二人は再び船上に視線を向けた。

レオアリスは水面から斜めに突き出した帆柱を避け、甲板に降り立った。それを追って残った五体の人形が円を縮め、次々に腕や首を突き出し、掴み掛かる。
伸びた腕が鞭のようにしなって足元の甲板を叩き、穿つ。
嵐の如く振り下ろされる腕の中、レオアリスは剣を提げたまま無造作に正面の一体へと踏み込むと、剣を斬り上げた。
青白く輝く剣が夜に筋を残す。
正面にいた人形の胴が断たれてずれる。
瞬きの間――
固唾を飲んで見守っていた兵士達は、三度(みたび)呻くような声を上げた。
「……剣士か――」
ヒューイットは口の中で呟いた。
眼下の戦場で、レオアリスは取り囲む九体の人形達を前に全く動

じる事無く、あっさりと五体を倒して見せた。
（何者だ、あれは……）
自分達とは余りに掛け離れている。
剣が動くごとに空気が震え、この場所にまであの冴えた刃が届くような、そんな恐怖すらある。
戦闘種、という言葉が改めて頭を過った。その呼び名の理由が今なら良く判る。
もう一つの呼び名が浮かびかけた時、傍らに立っていたロットバルトの蒼い瞳と視線が合い、ヒューイットは心を見透かされたように慌ててその言葉を呑み込んだ。
時に『殺戮種』と呼ぶその言葉は、剣士への畏怖と同時に、そこから生じる揶揄や嫌悪すら含むものだ。
ヒューイットの様子をどう捉えたのか、ロットバルトはただ笑みを浮かべた。
「先ほどの続きになりますが、あの剣の間合い、余波、それを前提に戦術を組む必要があります。通常は隊が自ら動く為の戦場を確保するところを、我々の場合はあの剣を生かし、その為の戦場の確保が第一義となります。隊は引いて布陣し、動くべき機を見計らう」
自陣にすらある剣への畏怖。
剣士を将として戴くという事はそういう事だ。
ヒューイットは無言で頷き、眼下の戦場に視線を戻した。
その瞳が見開かれる。
「公！」

斬り上げた剣の動きを追うように、レオアリスは身を翻して右手の人形の懐に踏み込んだ。
人形の腹へ剣が走る。
「レオアリス、待って！」

ふいに響いた声に、レオアリスは斬り裂く寸前で剣を止めた。人形の腕が肩ぎりぎりを掠め、甲板を蹴って距離を置く。
「アスタロト！　お前、無事で――」
レオアリスは安堵の色を浮かべ、再び繰り出された腕を避けつつアスタロトを振り返った。
「攫われた娘達は！」
二体の人形が迫り、腕が振り下ろされる。レオアリスの剣が動く。
「斬っちゃだめだ！」
まだ迷う気持ちを振り切り、アスタロトは無理矢理声を張り上げた。
「何だって？！」
思いがけない言葉に戸惑いながらも、レオアリスは頭上に迫った腕の関節を蹴り上げ、もう一体も躱すと人形から離れた。さほど広くは無い甲板で、船の縁に背中が当たる。
ゆらゆらと揺れる人形を見上げ、それからアスタロトを見た。
「何言って」
「その人形達は元は人間だ――攫われた娘達なんだ！」

六

アスタロトの声は闇を貫くように響き、遠巻きにしている兵士達へもはっきりと届いた。
ざわりと空気が揺れ、兵士達は互いに不安そうな顔を見合わせた。
「公は何を仰ったんだ？」
「人間って言ったぞ――」
「じゃあ斬ったらまずいんじゃないか」
「どうするんだ」
ロットバルトは彼等の呟きを聞きながら、微かに眉を潜めて船上を睨んだ。
（不味い状況だな……）
運河の水面に広がる幾つもの波紋が、その事実が投げ掛けるものを示しているようだ。
「人？」
レオアリスもまた驚き、瞳を見開いて再び人形達を見上げた。
白く滑らかな陶器の頬――いや。
「――っ」
樹脂で固めた肌。
レオアリスの驚きを感じ取ったのか、人形達がぴたりと動きを止め、船上は凍るように静まり返った。
「ユンガーは戻せるって言った」
アスタロトの声は、静寂の中でさえ微かだった。
何故止めたのか、レオアリスにもその理由は理解できた。
だが。
「――アスタロト、それは」
目の前の人形達はどう見ても、生命の無い空洞の存在だ。木組みの骨格、糸で紡がれた筋肉繊維。
肉の無い、硬質な肌。
戻るとは到底思えない。

「アスタロト、どんな法術をもってしても、それは無理だ」
答えたのはアスタロトではなく、男の声だった。
「だったら、全て斬り裂けばいい」
掛けられた声に、アスタロトは身体ごと振り返った。
「ユンガー！」
ユンガーが黒髪の人形に支えられ、階段の前に立っている。
ゆっくりと一歩進み出ると、ユンガーは青白い顔をレオアリスに向けた。
「斬り捨てて、ただ終わりにするのもいいだろう」
「……お前が人形師か。アスタロトにどんな事を吹き込んだんだか知らないが、今更――」
踏み出そうとしてレオアリスは足を止めた。
詠唱が微かに風に乗って届き、直後に背後から赤い光が差す。
レオアリスは振り返りざま、後方へと剣を振り抜いた。
奔った剣風が放たれた火球を砕き、霧散させる。
「何やってんだい、ユンガー！　そのガキをさっさとおとなしくさせなよ！」
船尾の一段高い甲板に立って叫んだのはエマだ。もう一度、詠唱を始めている。
「法術士か」
レオアリスの呟きに焦りはない。法術士の存在はもともと計算の内だ。法術そのものは厄介だが、姿が見えていれば、護衛の無い法術士を封じるのは容易い。
レオアリスはちらりと視線を上げ、倉庫の上を見た。
同時に風を切る音が響き、倉庫の上から放たれた数本の矢がエマの足元に突き刺さる。エマが身を捩り、詠唱は途切れた。
「ちくしょう！」
逃がれようと動いたその先にも、再び矢が突き立つ。
「――ユンガー！　何やってんのさ！」
苛々とエマが叫ぶ。

「聞こえてる」
対照的に落ち着き払い、ユンガーはエマの気を鎮めるように笑ってみせた。
「私は彼と話がある。エマ、君の出番は最後――ここを去る時だ」
頬に浮かんでいるのは自分に勝算があると確信している笑みだ。アスタロトは悔しさに唇を噛み締め、ユンガーを睨み付けた。
答えるように悠然と笑み返し、ユンガーはレオアリスへ身体を向けた。
「これを見ろ」
きし、と軋む音と共に、ユンガーの後ろから三体の人形が姿を現す。
腕に抱えられているのは王都で攫われた娘達だ。
「――」
レオアリスは瞳を細め、娘達を捕らえている人形を見つめた。
三体の人形の手から伸びた細い糸が、彼女達の手や足、喉にしっかりと巻き付いている。昼間、正規軍の兵士達の命を絶った糸。
レオアリスへ視線を据えたまま、ユンガーは手前にいた娘の髪を撫でた。
「それにしても、剣士とは素晴らしいな。こうも容易く私の人形が斬り裂かれるとは思ってもみなかった。さすがは戦闘種の頂点に立つ存在だけはある。いや……」
挑発するような笑みがユンガーの頬に浮かぶ。
「殺戮種と言った方が相応しいかな。容赦なく斬り裂く――」
アスタロトは瞳に怒りを昇らせた。
「ユンガー、そんな事をお前が言うのは許さない！」
怒りを含んだ声にも、ユンガーはますます声量を上げた。周囲に聞こえるようにだ。
「人形達が元に戻る可能性があっても、彼には関係ないという訳だ。確かに、斬り裂いた方が話は早い。それに、戦っている時の彼はとても楽しそうだ――」
演説でもするように周囲を見回す。
「何と優雅に斬り裂く事か」
アスタロトがユンガーの襟元を掴む。
「卑怯だぞ！　いい加減にしろっ」
その手をやんわりと押し退けて、ユンガーはアスタロトに囁いた。
「どれほど罵ろうと構わないが、結局は私の勝ちだ。そうだろう？　この状況を見るといい」
手を広げ、人形に抱えられた娘達を示し、レオアリスと向き合う。
「君もそこにいる正規軍から、昼の様子は聞いているんじゃないのか。彼等が動けなかった理由を」
「――」
「彼女達の首を落すのは残念だが……もう背に腹は変えられないと判っている。ちゃんと理解しているよ」
その言葉は、投降を意図したものではなく、人質が手元にあるのだと示す為のものだ。
娘を抱えた人形が二体、状況を誇示するように、ゆったりと優雅な足取りでレオアリスへと近付いた。
倒れている人形の残骸と、ユンガーの指示を待つように動かない人形達の間を縫ってレオアリスの左右を通り過ぎ、背後で交差して位置を変え再びユンガーの前へと戻った。
レオアリスの身体を剣と同じ青白い光が陽炎のように取り巻く。
触れるだけで斬り裂きそうなその光は、ユンガーをたじろがせたものの、今の状況を表すかのようにレオアリスの周りを離れずに揺らいだ。
「……それで、どうしろって？」
押し出された言葉の響きに自らの優位を感じ取り、ユンガーは白い面に歪んだ喜色を刷いた。
アスタロトの告げた事実はユンガーの狙い通り、レオアリスだけではなく、取り囲む兵士達にも迷いを生んでいる。
アスタロトの言葉で告げさせたからだ。

彼等はその言葉に縛られる。
もう既に兵士達は戸惑い、ユンガーに向けるべき弓を引き絞るのも忘れてお互いの顔を見回していた。
静まり返った戦場をユンガーは満足げに見渡した。砕けた甲板と人形達に肩を竦める。
両方とも、もう使い物にはならないが構わなかった。ユンガーとこの傍らの人形だけ残ればいい。
「私は多くは望まない。君達を好んで壊滅させたいとも思っていないんだ。私は剣士とは違うからね」
「――」
「条件は、三つ。一つには、君が剣を収めること。一つには兵士達を撤退させること。そして我々を追わないこと」
レオアリスは静かに息を吐き、ユンガーを睨み付けた。
「残った人形達を必ず元に戻し、今後一切同じ事を繰り返さないと言えるか」
「君に条件を出す権利は無い」
それから、ユンガーは首を傾げた。
「それとも、その条件の代わりに自分の命を差し出してみるか？アスタロト公のように」
レオアリスの表情は変わらないが、ユンガーは取り立てて急ぐ様子もなく、身体の前で腕を組んだ。
「君のその姿と、その剣は気に入った。人形を作ってみたら面白そうだ」
人形に支えられて甲板を歩き、ユンガーはレオアリスの少し前に立ち止まると、まるで自分の仕事場で新たな素材を検分するような悠長さでじっと見つめた。
「剣をどう再現するかな」
「――遠慮する。俺もこの剣も、じっとしてるのは性に合わない」
肩を竦めたレオアリスを眺め、ユンガーが笑う。
「君達はよく似ているな――。決して恐れず永遠など欲しがらない。だが、思い上がりだよ。時は止まる事なく流れ続け、不意に足元に亀裂を穿(うが)つ。君達にもそれは例外ではない」
自分の言葉の何に触発されたのか、白い頬に差す陰は一言では言い難い色彩を帯びた。それまでの口調とは、どことなく違う感情が籠もっている。
「誰もがいずれ、私の技術を欲するようになる。この娘達もここで帰るより、私と共に行く事を望むかもしれないね」
「お前以外の誰も、そんな事は望んじゃいない」
「誰も？　いいや――」
ユンガーは再びレオアリスの傍から離れると、二人に相対するようにアスタロトとレオアリスの中間に立ち止まった。
「私の妻はそれを望んだ。――彼女は」
ユンガーの告げた言葉の禍々しさに、レオアリスは眉を顰(ひそ)めた。ユンガーが示したのは、彼を支えるように立つ、艶やかな黒髪の人形だ。
「妻――？　お前、……」
「美しいだろう。まるで生きているようだと思わないか？」
「お前、自分の――」
さすがにそれ以上を口にする気にはなれず、レオアリスは唇を引き結んだ。視線の先で、ユンガーは瞳に鬼火のような光を灯している。
「命は簡単に費(つい)える。若い君達はまだ考えた事もないかもしれないが」
ユンガーは一度口をつぐみ、束の間思案した後、再び開いた。
「アスタロト公には話が途中だったな」
「――」

「どこまで話をしたか……。そう、私がこの人形達を作り出す事になったきっかけの辺りだ」
レオアリスはユンガーの向こう側にいるアスタロトへ視線を投げた。アスタロトの様子は逃れたい気持ちを押さえ、その場にかろうじて踏み留まっているように見える。
「私の妻はとても美しかった。君ほどでは無かったけれど、近隣でも一番と評判の美しい女性だったよ。私は彼女を得て、やがて娘も生まれ、誰よりも幸せな暮らしを送っていた。
「だが、ある時街の半分がかかるほどの流行病が起きた。まだ六つだった娘をあっという間に失い、私も妻も病に苦しめられた。私は暫くすると何とか回復したが、彼女の病は重くてね」
ユンガーは遠くへと視線を向け、苦痛に耐えるように瞳を細めた。頬が微かに震える。
「病は妻の美しさを奪って行った……。艶やかだった黒髪は抜け落ち、陶器のような肌もひび割れ、瞳からも生気が失せた。――妻はそれをひどく嘆いて、私にこう言った」
自分を支えている人形の頬に手を当て、ユンガーはあたかも今ある苦痛を和らげようとするように撫ぜた。
「――私の作る人形がうらやましい、と」
『彼女達のように美しいままで、貴方の傍にいられたら――』
病の淵でユンガーの妻は涙を零してそう告げ、それから二日後に息を引き取った。
「私は――、無力だった」
どれほど美しく、生者と見まごう人形を作り上げる事ができても、自分の妻の命を救う事はできなかった。
脱け殻のようになったユンガーは人形を作る事もせず、食事もろくにとれないまま、朽ちて行こうとする彼の妻の亡骸の前に座っていた。
愛する者を失った悲しみの中で自らの無力さを嘆き、呪い――、だがある瞬間にふと、気が付いた。
できる――。彼女の望んだとおり。
永遠の美しさを与える事が、自分にはできる。
抜け落ちた髪を植え、乾いた肌を特殊な樹脂で覆う。
その時のユンガーの心にあったのはただ、妻と再び会う事への喜びだ。
慎重に作業しなくてはいけない。
まずは何体かの実験を繰り返し、五体目だったか――、ユンガーはついに成功した。
彼が作り上げた人形はユンガーの意思に応え、動いた。
それは人形師達が理想とする、技を極め昇華していった結果とは違ったが、確かに動いた。
ユンガーは保存していた妻の身体に、それを施した。
ユンガーの呼び掛けに起き上がり、眼差しを彼に向けた時の喜び。
――あの時のあの喜びは、紛れもなく真実だった。
「……妻は美しさを取り戻したんだ。永遠に」
レオアリスはユンガーとその傍らの人形をじっと見つめた。
「――」
人形はユンガーを硝子玉の瞳で見つめている。そこにはユンガー以外には見えないものが映っているのか。
レオアリスに見える硝子玉の瞳は、何も映していない。鏡と同じ、ただ無機質な硝子の球面に映像を弾いているだけだ。
「――そんなの、違うよ！」
静寂を破ったのはアスタロトだった。アスタロトは唇を噛み締め、喉につかえたものを吐き出すように叫んだ。
「奥さんはそんな事望んでなかったんじゃないの？！　本当に望んでたのは」

ユンガーの面に激しい苛立ちが過る。アスタロトを睨み付け、吐き出した。
「君に何が判る。まだほんの少しも、美しさを損なった事の無い君に、判る訳が無い」
「そうだよ、判らない！　けど、私だったら自分の意思が無いのなんて嫌だ」
「黙れ」
「言葉を交せないなんて嫌だよ。そんなの生きてるのとは違う」
「黙れ！」
「お前の奥さんだって――」
「黙れッ！」
ユンガーは激高して首を振り、荒い呼吸を吐いた。俯いたまましばらく肩が大きく上下していたが、やがてゆっくり顔を上げ、もう一度繰り返した。
「君に何が判る」
「違う、ちゃんと考えないと」
ユンガーに近付こうとして何かが喉元に絡まっているのに気付き、アスタロトは喉に手を当てた。
指先に触れたのは、ごく細い糸だ。
ユンガーは会話を断ち切るようにアスタロトに背を向け、レオアリスへ視線を投げた。
「斬りたければ止めはしない。だがその結果、人形も、この娘達も戻らない」
「――」
「娘達が死んでも構わないなら、好きに斬り裂け」
停止していた人形達が身を揺する。再び腕が振り下ろされ、レオアリスの足元を砕いた。
「その剣で終わりにするのもいいだろう。どうせ哀れな娘達だ。美しさを保つ事に拘り、永遠を望んだのは彼女達自身だよ。私はただ囁いただけ――選んだのは彼女達自身だ。今は幸せだろう」
ユンガーの視線の前で人形は踊るようになめらかに動き、レオアリスへ攻撃の手を繰り出した。
「さあ、どうする」
振り下ろされる腕を躱しながら、レオアリスは剣の柄を握り締めた。人形が甲板を砕き、足場は確実に失われていく。
攻撃を続ける四体の人形の向こうに、ユンガーとアスタロト、そして娘達を抱える三体の人形が見え隠れしている。
彼等を捕えている糸を斬るのも人形を斬るのも、どちらにもレオアリスには容易い。
だが。
「娘達を助けたいなら、剣を捨てろ」
「――それでお前は、人形達を本当に戻せるのか？」
レオアリスが問い返した事に、ユンガーは笑みを深めた。彼の勝ちだ。
「戻せる――」
「よせ、レオアリス！　私はそんなつもりで言ったんじゃない！」
レオアリスは一度ユンガーを射抜くように見つめ、足を止めた。
人形達の口から糸が吐き出され、レオアリスの喉や腕、足を絡めとる。
四体の人形達は身動きを封じられたレオアリスの上に、同時に腕を振り下ろした。激しい音が辺りを圧する。
「……レオアリス！」
レオアリスの姿を人形が完全に覆い隠している。軋み砕ける音が響く。
駆け寄ろうとしたアスタロトの腕を、ユンガーの傍らの人形が掴んだ。
「放せ――」
浴びせかけるような高らかな笑い声が響いた。ユンガーが喉を反らせて笑っている。

「君達はつくづく愚かだな！　あれはもう脱け殻だ。そんなにも形骸に拘って何になる。形などどうとでも残せる。どんな形であれ、形だけなら残せる」
ユンガーの口調は次第に冷静さを欠き始め、瞳はぎらぎらと光を帯びていた。
アスタロトは眉を潜め、その様子を見つめた。
「そんなにこの脱け殻を元に戻したいのか」
「――お前が戻せるって言ったんだ」
ユンガーの喉が笑いに引きつる。
「戻せる――？　ははははッ！　そんな訳がない。どうせ君だって初めから信じていないだろう」
「――っ」
「ただ君は、君の友人に、かつてとは言え人であった娘達を斬らせるのが嫌だっただけだ。――そんな感傷が結果的に、全てを不幸な方向へ向けたが。残念だね」
「……最低だ、お前は」
アスタロトの語尾は震えていた。ユンガーは吐き出すように笑い、歪んだ面をアスタロトに突き付けた。
「もう気にしなくていい。そんな事よりも、これからは永遠に美しいまま在り続ける事を喜ぶべきだ」
アスタロトの腕をぐい、と掴んで引き寄せ、ユンガーは周囲の倉庫を見渡した。
「そこの兵士共！　動くなよ！　お前達が動いても同じ事だ！――エマ！」
エマは足元に突き立っていた矢を忌々しそうに足で払い、一段低い甲板の上に降りた。
「これでお別れだ。娘達と君達の大切なアスタロト公が永遠の命を得る事に祝福を！」
再びユンガーは喉を反らせて笑った。
「――黙れよ」
低い声がかかり、アスタロトとユンガーはそれぞれの光を宿した瞳を向けた。
腕を振り下ろした状態で停止していた人形達が、ぎし、と軋んだ音を立てた。
折り重なるように屈んでいる人形達の隙間から、青白い光が零れる。
「レオアリス！」
振り下ろされた腕は、全て頭上に掲げたレオアリスの剣に止められていた。
絡みついた糸に、赤い血が滲み、甲板の上に滴り落ちる。
レオアリスは自分を覗き込むような人形達の顔を見上げた。
人形の――かつては生き、自分の意志で笑っていたはずの娘の顔が目の前にある。
覗き込んだ硝子玉の瞳は、どこまで行っても無機質で、生命の光は無い。
空洞、虚無――そこに宿る哀しみ。
「戻れないのか」
レオアリスの声は呟きと同じほどに小さかったが、ユンガーの元に届いた。そこには人形達が元に戻れない事への哀惜が込められているように感じられた。
その響きに刺激されたように、ユンガーは引きつった笑い声を立てた。
「まさか、剣士である君までそんな事を信じたのか？　今更遅い。内臓を抜き、樹脂で固めた抜け殻だ。ただの入れ物ですら無い」
青白い光が零れるにつれ、人形達の身体に細かい無数の罅（ひび）が走る。
ユンガーはそれを数えようとするように視線を向けたまま、呻きとも呟きともつかない声を上げた。
「私は何度も試した。何度となく――」

形を留めた彼の人形に、再び命を甦らそうと、何度となく人形を作り続けた。
「だが、私の妻は永遠に言葉を失い、冷たいままだ！　戻る事など無い！」
美しさを留め、ユンガーの意のままに動き――
結局、どこまで行っても抜け殻のまま。
「信じて？　――いいや、お前の言葉を信じた訳じゃない。――戻らないんだな」
レオアリスはもう一度、確認するようにそう言った。
元に戻る事もできず、このままの姿では帰りを待ち侘びる家族の許に戻す事すらできない。
ずっと、この姿で居続けなければならないのなら。
「なら――送る」
「待て……」
アスタロトは迷いを振り切るように、きっと顔を上げた。
「お前が手に掛ける必要なんてない！　私がやる！　私が手を出したんだ、私が最後まで」
ひび割れていく人形達の向こうに、青ざめたアスタロトの姿が見える。レオアリスは微かに笑みを刷いた。
「お前はいい。向かないだろ」
じゃあお前は向くのか、と。
アスタロトはその問いを飲み込んだ。
レオアリスは剣を握る右手に力を込めた。青白い光が強さを増す。右腕に絡む糸が食い込み血を滴らせる。
一瞬――
身を縛る無数の糸は全て、レオアリスの纏う光に触れて溶けた。
青白い閃光が渦を巻き、瞬きの間に、レオアリスの姿を覆っていた人形の身体が弾け飛ぶ。
レオアリスは甲板を蹴って跳躍し、ユンガーと娘達を捕えている人形達の間に降り立った。
剣を巻くように踏み込む。
娘達に巻き付いていた糸が断ち切られて弾ける。
一呼吸の間もなく、三体の人形は胴を断たれ、ゆっくりと甲板の上に崩れ落ちた。

クライフ達の視線の先で、レオアリスの剣が青白い光と共に一閃した。
「行くわよ」
フレイザーが右手で鉤の柄を掴む。そのまま躊躇無く、鉤を滑車代わりに倉庫から滑り降りた。船へ。
「フレイザー！」
フレイザーより先に甲板に着くべく、クライフも勢いをつけて滑り降りる。
甲板に降り立ったクライフ達の反対側にはヴィルトール、もう片方ではヒューイットとその部下が同じく甲板に降り立ったところだ。
それを横目で確認し、クライフは甲板を蹴って倒れている娘達へと駆け寄った。
レオアリスと目が合うと、静かな視線が返る。
そこに宿ったものを今は飲み込み、クライフは娘の傍に膝を付いた。
「ちょうど五人」
一人を抱え、降り立ったのとは反対側の縁へ走る。
「待て――！」
ユンガーを支えている最後の一体が、口から無数の糸を吐き出し

た。
微かな光を弾いてクライフ達の上に降り掛かったそれが、次の瞬間青白い閃光に断たれ、甲板に散る。
クライフ達は易々と駆け抜け、予め当たりを付けていた、船の縁を捕らえている縄へと駆け寄った。
フレイザーが少女を抱えて先に降りるのを確認しつつ、持っていた鉤縄を張られた縄に引っ掛け、もう一度滑り降りた。今度は岸壁へ。
岸壁の上では兵士達が待っている。クライフとフレイザーが辿り着くと、数人が腕を伸ばして素早く娘達を受け取った。
正規兵の一人が呼び笛を鳴らす。
短く三回、娘達の救出の合図だ。
すぐに反対側の岸壁からも、応えるように三回呼び笛が鳴った。

三回目の笛の音を聞きながら、レオアリスはアスタロトを振り返り、左腕を胸に当てて敬礼した。
「正規軍将軍アスタロト公。現時点を以って指揮権をお返しする」
交された瞳の色は、この場では口にしがたい光を帯びている。
「――近衛師団の協力に感謝する」
素早くそれだけ言い、アスタロトはユンガーに向き直った。
船は荒れ果てた姿を見せながら、ゆっくりと水面に船体を揺らしている。
甲板に倒れている人形達の面は、何の感情も窺わせずただ無機質だった。
「お前の人形も、残ったのはその一体だけだ」
「――」
「連行する。可哀そうだけど、一緒の牢には入れられない」
ユンガーは黙ったまま、じっと甲板を見つめ項垂れていた。

「剣士ってのはすごいな」
「けど、やり過ぎな気もするぜ」
「まだ、もしかしたら助かったかもしれないし」
「本気で言ってるのか？　どう見たって無理だろ、あれじゃ」
「まあそうだけどな。でももとは人間だったものを、良く躊躇なく斬れる……」
「おい」
小声で言葉を交していた兵士達は、思いがけず近くにいたロットバルトに気付いて慌てて口を閉ざした。
冷えた視線に兵士達は身を縮めたが、ロットバルトは彼等を一瞥したものの、特に何か言う訳ではなく視線を戻した。
兵士達の言葉はユンガーが齎したものから出ているが、その根底にあるのはまだ拭いきれないレオアリスの立場への拘りや、剣士という存在への畏怖だ。
それを感じているのは、彼等だけと言う事は無いだろう。
「――」
眼下の船上では、事件は終わりを告げた。
けれどこの事件は少なからず、レオアリスの不安定な立場を浮き彫りにしたようにも思えた。

七

月明かりだけが差し込む牢の壁に、ゆらりと影が揺れる。
ユンガーは閉じていた瞳を上げ、見開いた。
「――ああ、来てくれたのか」
きりきりと歯車の回る音が、石の壁に微かに跳ね返る。
白い手がユンガーの首に伸びた。人形の無機質な瞳は、ユンガーの姿をただ映している。
永遠に感情を映す事の無い、硝子玉の瞳。
「――あの時私も、君と一緒に行くべきだったのか……」
人形は答えない。
これまで、本当には一度たりとも、ユンガーの言葉に答えた事は無かった。
「行こう――」
人形の腕に力が篭ったのは、一瞬だけだ。
ユンガーは呻き声すら上げず、糸の切れた人形のように倒れた。
人形はユンガーの傍に座ると、彼の身体の上に覆いかぶさった。
そして、全く動かなくなった。

終

章

翌日は、朝から見事に晴れ渡った。
空は高く、どこまでも澄んでいる。
収穫祭の最後の一日は、多くの人々と屋台、旅芸人達の姿が街に溢れ、より一層の賑わいに満ちていた。
平穏を取り戻した運河を、商船や観光の為の小船が行き来する。

「エマって法術士と仲介人だったウルドって男は、色々喋っているよ。あんまり聞きたくない事も沢山ね。ウルドからは別方面の闇取引も引っ張れそう」
「そうか」
レオアリスは執務室で、部屋の真ん中にある長椅子に座り、アスタロトと向かい合っていた。
事件が終わりを告げ、今朝の空と同様、清清しさが室内に満ちている。中庭の噴水に遊ぶ小鳥達の歌声が平穏な時を感じさせた。
それを壊す事になる言葉を、アスタロトは遠慮がちに口にした。
「それから――。ユンガーは死んだ」
窓からは鮮やかなほどの陽射しが部屋の床を染めている。
「死んだ？」
レオアリスの驚いた顔へ、アスタロトは頷いて見せた。
「うちの牢で。いつの間に入ったんだか、傍に人形が倒れてた。ユンガーの命を奪ったのはその人形だ。覆い被さるみたいに倒れてたって」
「――」
どちらともなく零した溜息は、降注ぐ陽射しに束の間の陰を落とし、だがすぐに溶けた。
扉が叩かれ、フレイザーが顔を覗かせる。

「上将――、あら、アスタロト様、いらしてたんですね。お茶をお持ちしましょうか」
「うん！」
元気良く頷いたアスタロトへにっこりと笑みを返し、フレイザーはまた廊下へ戻る。
ぱたりと閉じられた扉に、レオアリスは少し呆気に取られた視線を向けた。
「……俺に用だったんじゃないのか？　何で茶が優先なんだ」
「いい人だよねぇ、フレイザー。大好き」
「――」
アスタロトの閑かな顔を眺め、レオアリスは軽く息を吐くと長椅子に寄り掛かった。後ろに組んだ腕に頭をもたせかけ、瞳を閉じる。
そうして二人とも黙り込み、しばらくは室外の音が微かな騒めきになって聞こえていた。
「ねえ」
アスタロトは頬杖をついていた顔を上げ、窓の外を見た。
「レオアリス、祭に行こうよ。今日で最後だし」
「まだ食い足りないのかよ」
レオアリスの突っ込みは、アスタロトには一切痛痒を感じさせなかったようだ。
「当たり前じゃん、全然足りてないよ！　こないだは邪魔されて、目的の半分も達成してないんだから！」
レオアリスは閉じていた瞼を上げ、含みのある視線をアスタロトへ向ける。
「目的が違うだろ、目的が」
アスタロトはひょいと立ち上がり、レオアリスの執務机の向こうにある窓を大きく開いた。少し冷えた秋の風がさあっと吹き込み、室内の空気を入れ替える。
「旅芸人達も今日で帰っちゃう。――面白くて、綺麗なものが一杯あるよ」

アスタロトはそう言って、まだ長椅子に腰掛けたまま首を巡らせているレオアリスを振り返った。
窓の外を照らす陽射しに、アスタロトの姿が微かに霞む。眩しさに眼を細め、レオアリスも頷いた。
「――そうだな」
何の屈託も無く、ただ人々の笑顔や楽しみの為に作られるものが、今は見たい。
青い空と活気に満ちた街は、今だけは幾つもの憂いを隠して、それを見せてくれる気がした。

（了）

091129/20141108 校正